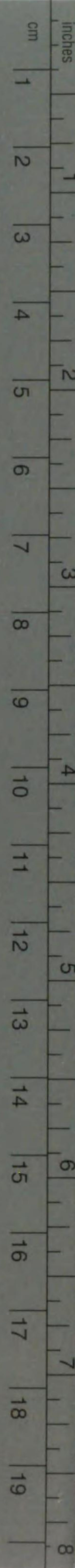


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



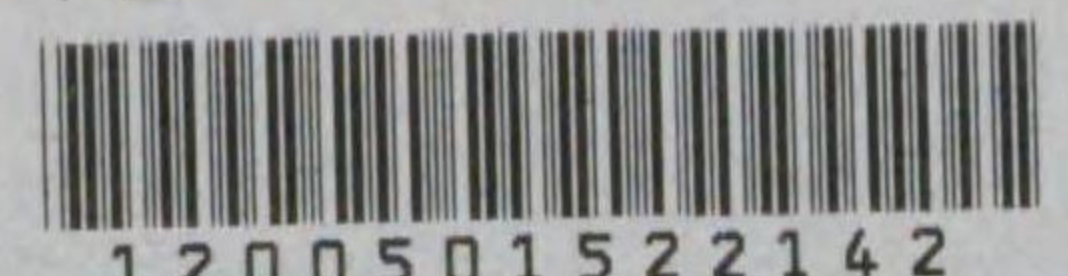
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

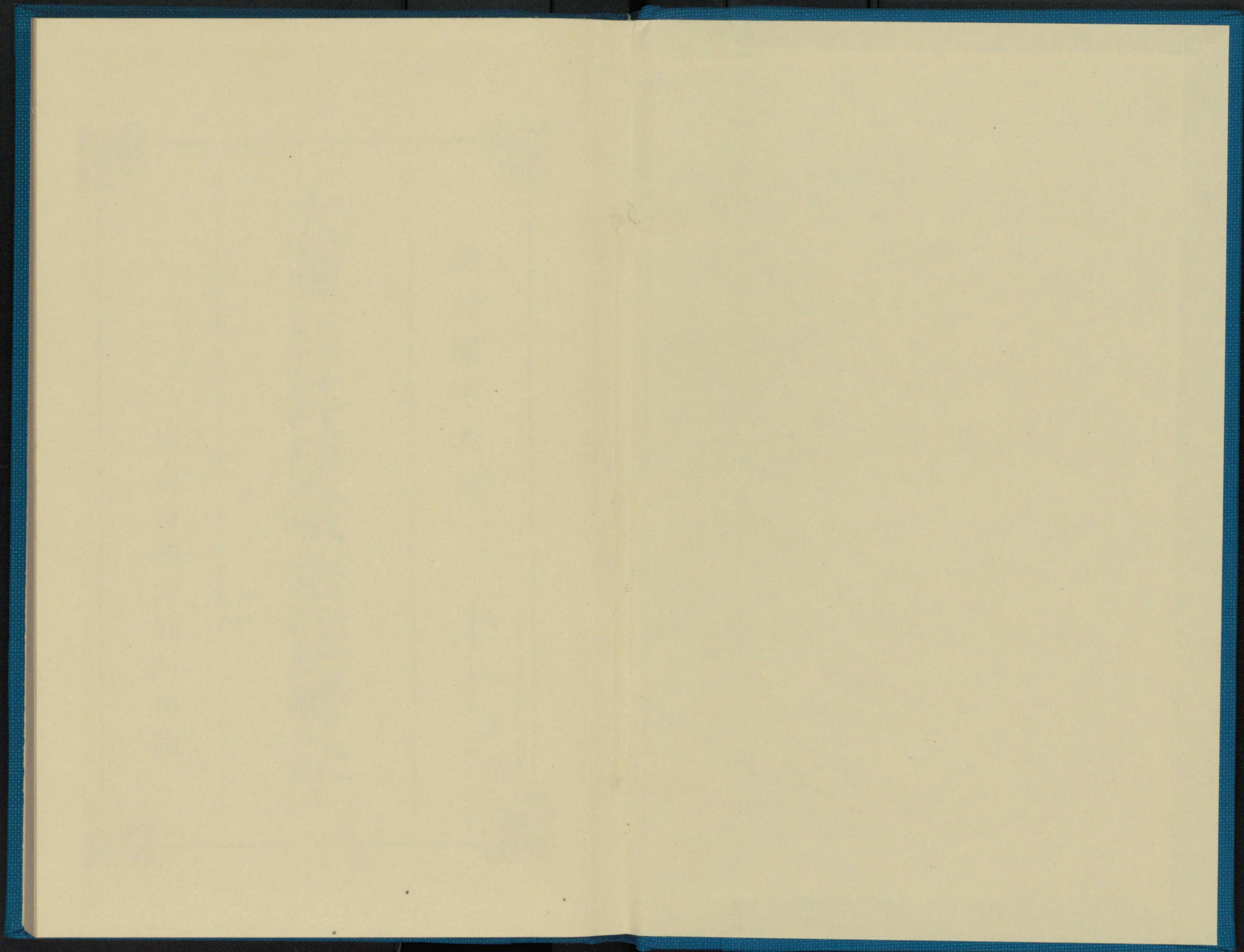
Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

581
72

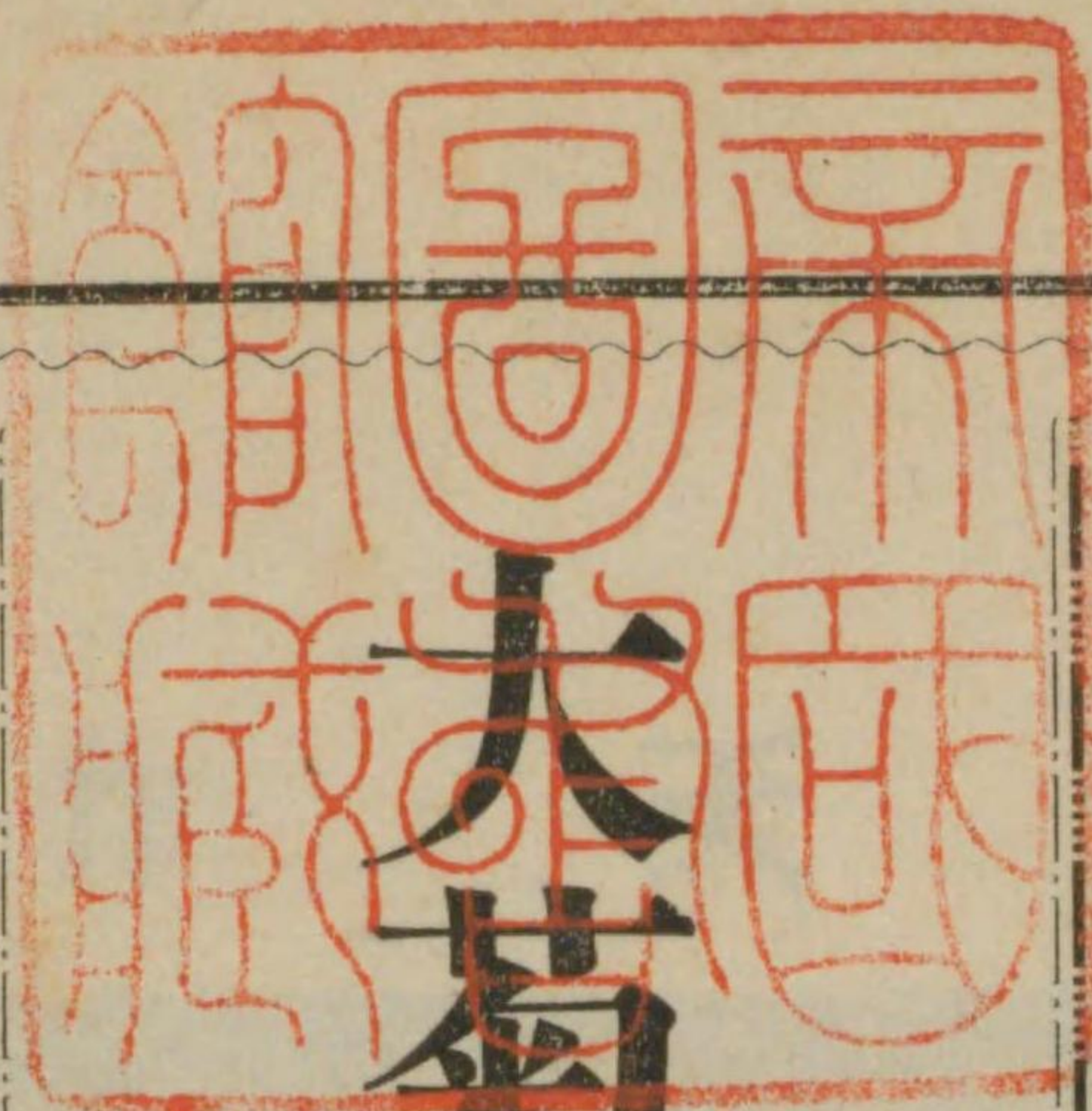
581-72



1200501522142



581-72



大菊

一輪咲
三輪咲

鉢植栽培法秘訣

耕讀園主人著

著者寄贈本



於福古鄉印刷所出版

天 作 作 天



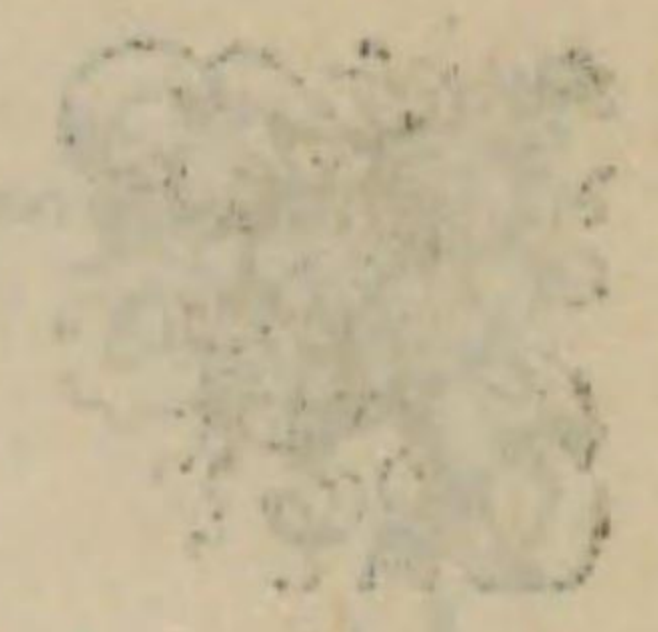
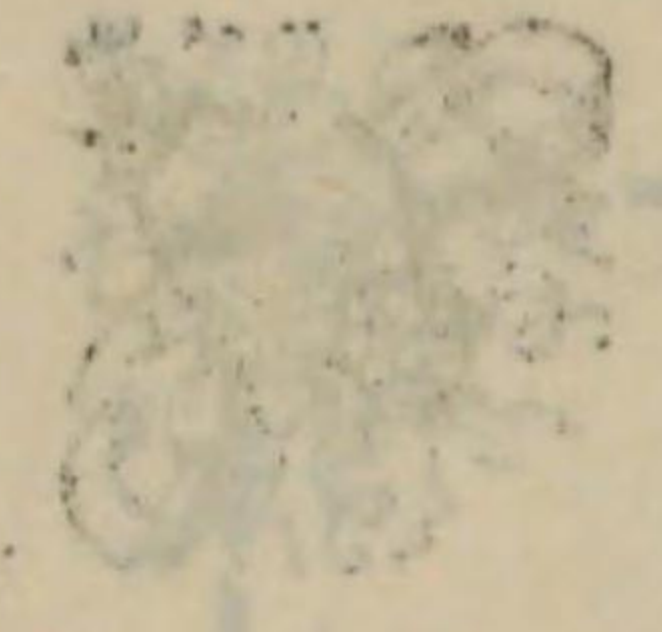
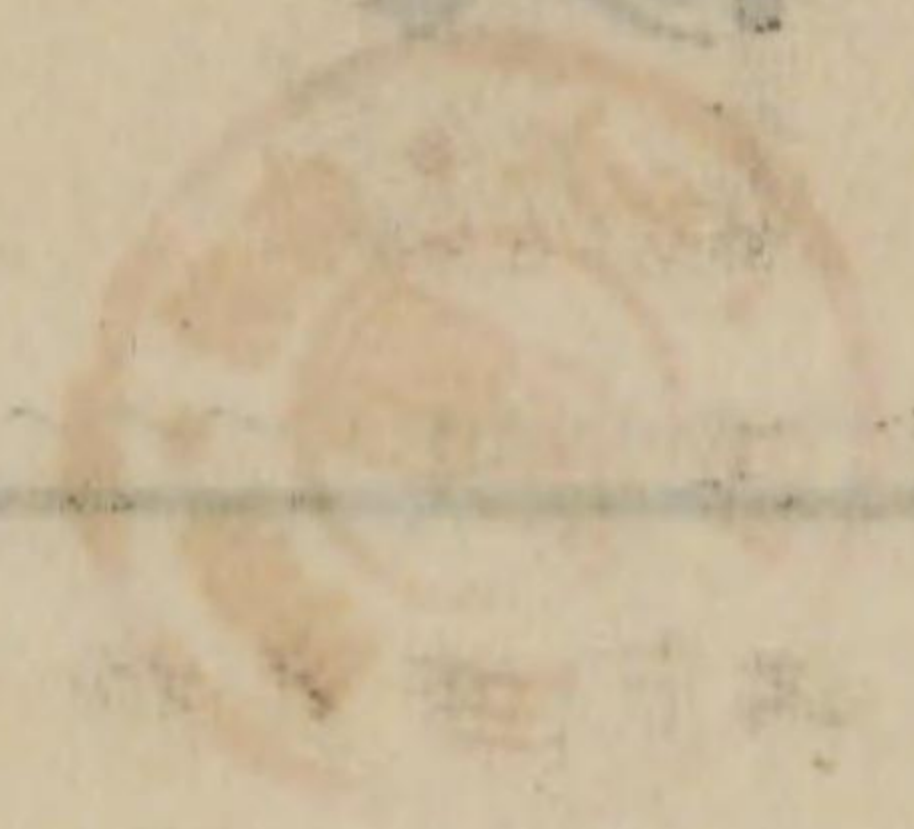
八重雲 殿雲黑 山田

平賀其三 養培君郎五市葉淺

博 園 主 人 著

大 蘇 檢 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇

蘇 蘇 古 漢 甲 佩 河 出 湖



地 作 天 作



雪の山郡 霞重八

養培君藏徳田幸 養培君郎三長戸平

附 録 (二)

大菊鉢作月割行事一覽表

七		六			五			月	旬	項				
中	上	下	中	上	下	中	上	長	中	短	長	中	短	備
	四寸鉢假植		插 芽					一	輪	幹	三	輪	幹	考
		四寸鉢假植		插 芽				二	輪	幹	三	輪	幹	
			四寸鉢假植		插 芽			三	輪	幹	三	輪	幹	
	摘 蕊		四寸鉢假植		插 芽			四	輪	幹	三	輪	幹	
尺鉢本植 元肥		摘 蕊		四寸鉢假植	插 芽			五	輪	幹	三	輪	幹	
尺鉢本植 元肥			摘 蕊		四寸鉢假植	插 芽		六	輪	幹	三	輪	幹	

自 行 考

天人作



雪の山郡 幸徳田君栽培

附 録 (一) 4

大菊鉢作月割行事一覽表

月	旬			五			六			七			八			九			十			二				
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
長	幹	中	幹	短	幹	長	幹	中	幹	短	幹	備	考	備	考	備	考	備	考	備	考	備	考	備	考	
一	輪	二	輪	三	輪	四	輪	五	輪	六	輪	七	輪	八	輪	九	輪	十	輪	十一	輪	十二	輪	十三	輪	十四
上	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽
中	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽
下	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽
上	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植	四寸鉢假植
中	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽	插	芽
下	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植	八寸鉢本植
上	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土	追肥、増土
中	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱	支柱
下	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾	早咲、成蕾
上	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾	中晩咲成蕾
中	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ	本支柱立テ
下	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終	花垣終
上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
中	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
下	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上

自前時 至午後四時 日覆ヲ ナシ節 光詞節 ノコト 柳芽ヲ 除クコト 脇芽ヲ 除クコト 花形ノ 齊整

二		十			九			八				
下	中	上	下	中	上	下	中	上	下	中	上	下
花坦終		花坦 輪台ヲ置 キ花形ヲ齊フ	本支柱立テ カヘ		支柱、上括	中晩咲成蕾 蕾選定	早咲、成蕾	支柱 止肥、増土	追肥、増土		八寸鉢本植 元肥	
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	支柱 止肥、増土	追肥、増土		八寸鉢本植 元肥	
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	支柱 止肥、増土	追肥、増土		八寸鉢本植 元肥	
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	止肥、増土	支柱	追肥、増土		尺鉢本植 元肥
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	止肥、増土	支柱	追肥、増土		
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	止肥、増土	支柱	追肥、増土		
全上		全花 上坦	全上		全上	全上	全上	止肥、増土	支柱	追肥、増土		

花形ノ
齊整

脇芽ヲ
除クコト

柳芽ヲ
除クコト

至後四時
よしす
日覆ヲ
ナシ採
光詞節
ノコト

大菊一輪咲鉢植栽培法秘訣

緒言

つまらぬ私に各地より養菊の事を手紙で御照會になつたり、又數十里を遠しこせられず態々養菊談をせよこて御出下さる方もあり、誠に恐縮です、そこでその御返事とも、御話ごもの、一端こして、この書を書く事にしました。元來が経験があつても經驗に乏もしく到底皆さんの御役に立つ様の事も出来ませんでせう。併し菊花の栽培を六ヶしいご御思ひになつて、躊躇せられて居らるゝ方や、菊花の美しいのを、御覽になつて、自分も一つ栽培して見ようといふ、美しい御心の、御起りの方なごに、少しでも此書が手ほごきになり

て美しい立派なる花が、實際咲きましたならば、私はそれで満足です、この書をかくにあたり東京重陽會主事吉田英男君よりいろいろ有益な御教示や御便宜を與へ下さつたことを御禮を申して置きます

昭和二年四月 耕讀園主人 識す

大葉三編 耕讀園主人 識す

第一二版にあたりて

此書もご一般に賣らん爲めならず、志ある方に御話ごも問合せ手紙の返事ごもにこかき記し、謄寫版ごして贈りしものなりしが、いつの間によら、是非實費で分讓して呉れごの希望者に願ちしが、或は内々實費の三倍四倍の價にて賣買せる者あるを聞き、之では却つて筆者の趣旨に悖るご、茲に實費分讓の廣告を出せしに、貯へし數百冊は少しの間に飛び去り、最早一冊も残さざるに至りた。注文の手紙は山ご積む、茲に於て筆者は遂に活版に附することに意を決したその序に第一版を訂正増補した。

昭和三年三月

耕讀園主人 再記

凡 例

一、この書は菊花培養に長らく従事せられて居る方の爲め書きしにあらず、その道を好み堂に入らんとする方のたづきに書きしものなり、故に極めて平易を主とす。

一、菊花栽培にもいろいろ流派極意ありて人々でその方法を異にす此書餘り異説をかき初學者を惑はすことを憂へ、この方法なら間違ひないといふことを自身に實驗したことを一筋に極めて丁寧にかきたり、異説、議論は、他日書く菊論に掲げる考なり

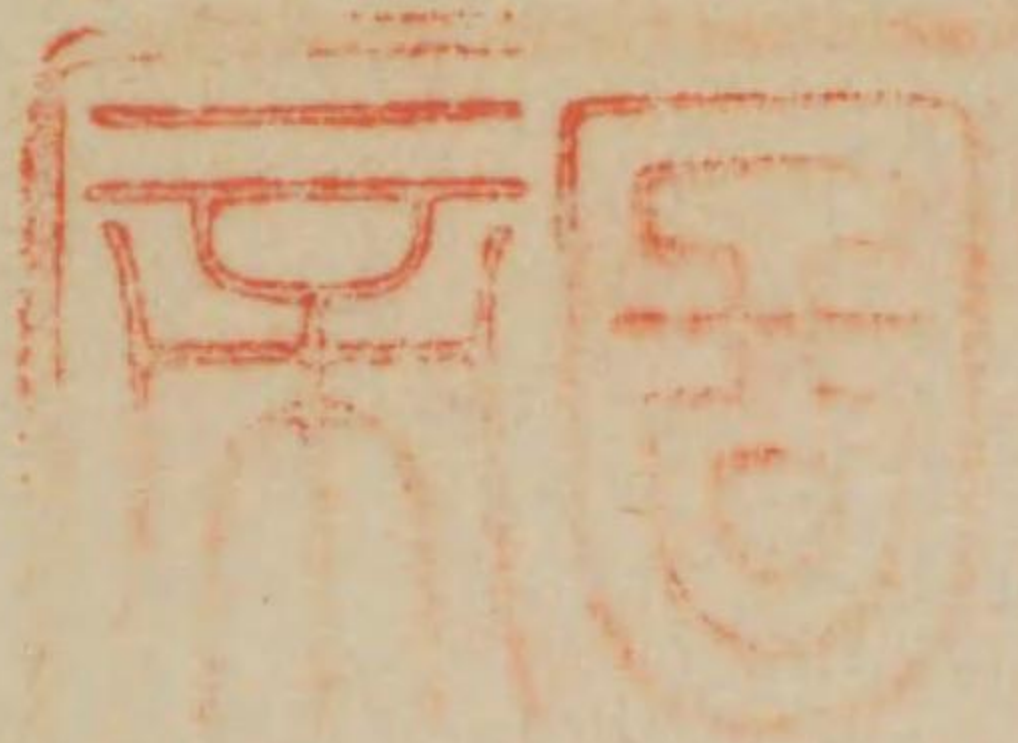
一、従前ありふれた菊の來歴や肥料學より寫して來た分拆表の如きいらぬことは之を簡單に取扱ひ、こゝが栽培の『コツ』といふ處は極めて具体的にかきたり。

大菊^{一輪咲}_{三輪咲}鉢植栽培法秘訣

目 次

第一章	菊花園藝の興隆に就きて	一
第二章	菊花培養上に於ける用語のいろいろ	七
第三章	大菊の種類	二五
第四章	菊花鉢植培養上の諸問題	四三
第五章	菊花培養の鉢は如何なるものが適當なや	四四
第六章	菊花は一鉢に何輪咲を適當とするか	五〇
第七章	鉢の中に入れる土はどんなのが良いか	五〇
第八章	菊の苗はいかにして作るか	六二

第九章	菊の肥料は如何なるものがよろしきか……………	七〇
第十章	菊の植む方はいかにせばよきか……………	八三
第十一章	植付た菊の世話はどんなに世話したらよいか(上)蕾の出るまで……………	九四
第十二章	植付た菊の世話はどんなにしたらよいか(下)成蕾より開花まで……………	一三三
第十三章	花のすんだ後は如何にするか……………	一三三
第十四章	菊花の實生に就いて……………	一三三
	鉢植三輪咲栽培日誌……………	一三六
	菊花實生界の權威、槇麓園及精興園訪問記……………	一三三



大菊三輪咲鉢植栽培法秘訣

大菊三輪咲鉢植栽培法秘訣

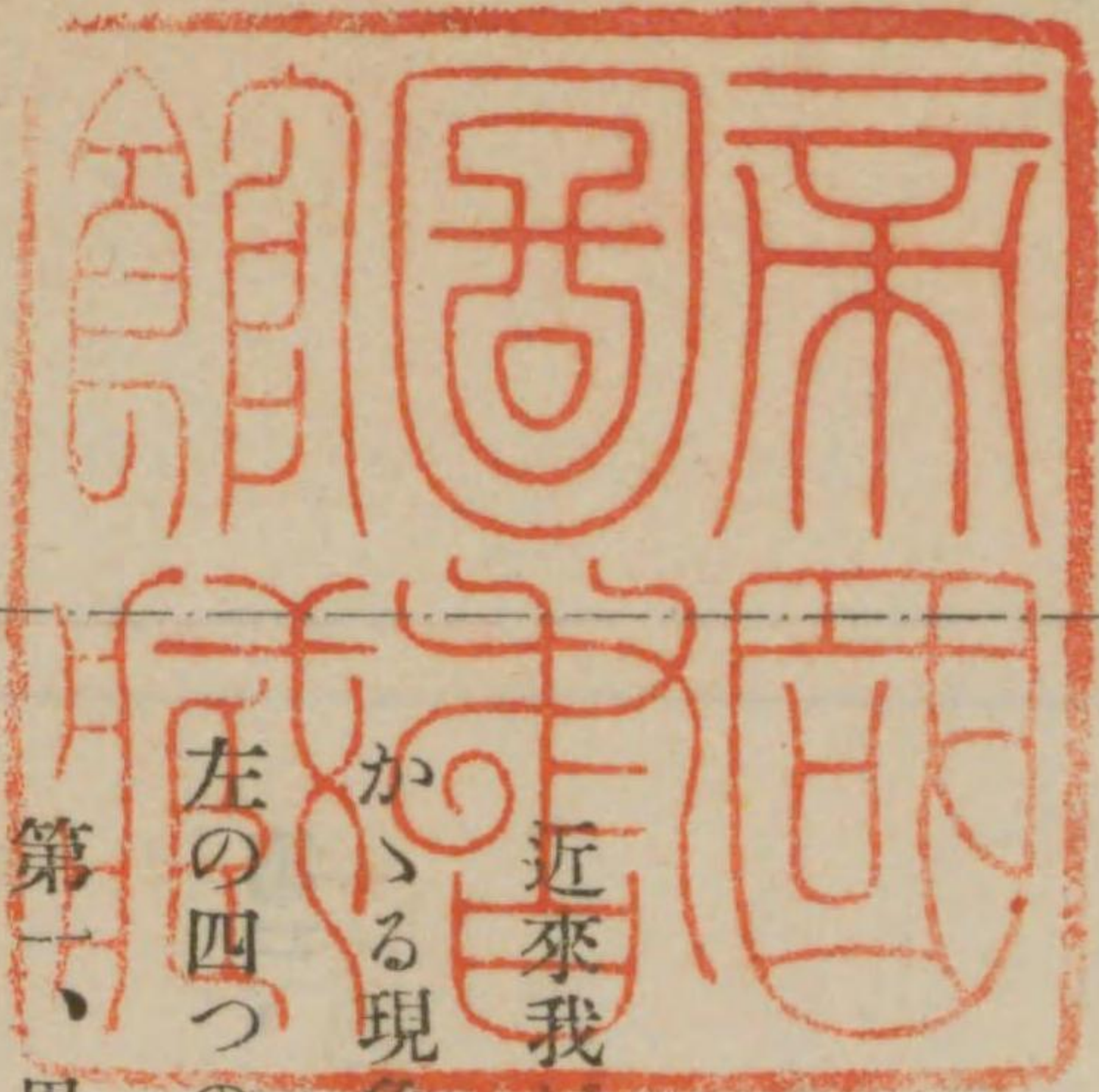
耕讀園主人 高津半造 著

第一章 菊花園藝の興隆に就きて

近來我が國華たる、菊花培養の盛なることは、國民的、民衆的となつて普及し來た。かかる現象は實に喜ばしい事である。抑もかく隆盛になつた原因を考へて見ると、凡そ左の四つの事に歸すであらう。

第一、長くも 皇室におかせられては、毎年新宿御苑に於て菊花を培養せられ給ひ觀菊大會を催され、外國の賓客使臣の招待をはじめ、我國の大官及臣民の代表的の者を召させ給ふ。

第二、東京市にては、市主催の下に愛菊培養團體たる重陽會、秋香會、長生會、千秋



會の四大會を聯ね、毎年日比谷公園に於て菊花大會を催し公衆の觀覽に供し、京都にては菊友會、大阪にては秋芳會、近くは寶塚菊花園藝獎勵會等、その他之に類する無数の菊花培養團體ありて三大都市をはじめ名古屋、青森、福岡等の各都會にも盛んに菊花培養熱をあふつて居る。

第三、近來英國をはじめ、歐米の列強間にも、我國華たる菊の培養は、なか／＼盛んである。昨冬 秩父宮殿下の 先帝の御大漸にて御留學半途に御歸國あらせらるゝ時、御暇乞の爲め、英國皇室を訪はれし際、英皇室にては、その御送別宴の席上の花は我國華たる菊を以て、飾られたりとある。如何に英國などにて栽培せられて居るかは之を以つても推し測ることが出来る。抑も我國より菊花を歐羅巴に持ち歸つたのは、西洋紀元一千七百八十九年即ち我が 光格天皇の寛政元年佛人フランガールが「古代紫」といふ菊を持ちかへりした始まりその後盛んに實生して、新種を作り、今より六七十年前に、己に約九百種類を作り今は却つて我國に、盛んに洋種が逆輸入されて居る。あの近年大流行であつた

ターナー種の如きエルベロン種の如き、我國菊界を聘睨して、我國愛菊家をして顔色ならしかめたのであつた。

第四、元來人間は花を好むの本能を有して居る。誰しも花に向つて「コレハ厭ヤダ」と顔を背ける人は恐らく一人もあるまい、又美しき花を見ては「ア、奇麗」と賞でぬものも一人もあるまい。その賞した瞬間は、一つ花は作りたい、所謂「花咲いて菊作らんと思ひけり」の感じを持つのであるが元來園藝の知識と技術のない國民たる我々は、それに無性が伴ひ、面倒臭いといふ感じと、一時感じて直ぐに醒め易いといふ、一時的國民性と、それから菊はなか／＼作るのが六かしい、面倒な、手間のかゝる事じやといふ娯解が、折角一時その氣になつて居つても、その爲め妨げられて居つたのであつたが、近來上 皇室の御栽培と、各大都市の菊花の培養熱あふり立てと、外國人の我國華培養の盛んにつれ、その刺激の下に、自己自身も、元來花は好きといふ天性と、之に苟くも國民と生れ國華をよく作る事を知らぬ意氣地なささ 皇室を中心として國華を培養

して忠君愛國の氣分を園藝に持たせ、高潔なる人格の修養をして見たいといふ自覺と、下品な娛樂を避けて、菊花培養といふ精神的に高尚な趣味のに生きよといふ欲望と且つ身体的に衛生に適した娛樂を得ようといふ氣分と古來養菊熱の傳統とが、近來の培養熱を高めて、かくは民衆的に國民的に普及して來た事と思ふ。誠に結構なことである。

右の理由により今日の菊花の培養熱は實に氣たたましく普及して、全國の津々浦々山々隅々までも、及んで行かうとして居る。東京、京都大阪の大都市は申すまでもなく岡山、廣島の中國、徳島、高知の四國、福岡、熊本の九州、新潟、金澤の北陸地方、仙台青森の東北地方いづれを見てもなか／＼盛んである。菊は古花といへば、古よりの名花新花といへば新しく實生なり根變りなごして出來た新種の花であるが、我國の菊の種類は、中御門天皇正徳五年十月即紀元二千三百七十五年京都及江戸に於て菊會を催された時に百五十餘種を數へた又、光格天皇は特に菊を愛させ給ひ、時の將軍徳川家齊も大に菊花に興味を持たれ、いろ／＼の奨励あり、天明年間の菊合せには、その種類五百餘種

ターナー種の如きエルペロン種の如き、我國菊界を聘睨して、我國愛菊家をして顔色ならしかめたのであつた。

第四、元來人間は花を好むの本能を有して居る。誰しも花に向つて「コレハ厭ヤダ」と顔を背ける人は恐らく一人もあるまい、又美しき花を見ては「ア、奇麗」と賞でぬものも一人もあるまい。その賞した瞬間は、一つ花は作りたいたい、所謂「花咲いて菊作らんと思ひけり」の感じを持つのであるが元來園藝の知識と技術のない國民たる我々は、それに無性が伴ひ、面倒臭いといふ感じと、一時感じて直ぐに醒め易いといふ、一時的國民性と、それから菊はなか／＼作るのが六かしい、面倒な、手間のかゝる事じやといふ誤解が、折角一時その氣になつて居つても、その爲め妨げられて居つたのであつたが、近來上、皇室の御栽培と、各大都市の菊花の培養熱あふり立てと、外國人の我國華培養の盛んにつれ、その刺激の下に、自己自身も、元來花は好きといふ天性と、之に苟くも國民と生れ國華をよく作る事を知らぬ意氣地なささ、皇室を中心として國華を培養

して忠君愛國の氣分を園藝に持たせ、高潔なる人格の修養をして見たいといふ自覺と、下品な娛樂を避けて、菊花培養といふ精神的に高尚な趣味のに生きようといふ欲望と且つ身体的に衛生に適した娛樂を得ようといふ氣分と古來養菊熱の傳統とが、近來の培養熱を高めて、かくは民衆的に國民的に普及して來た事と思ふ。誠に結構なことである。

右の理由により今日の菊花の培養熱は實に氣たたましく普及して、全國の津々浦々山々隅々までも、及んで行かうとして居る。東京、京都大阪の大都市は申すまでもなく岡山、廣島の中國、徳島、高知の四國、福岡、熊本の九州、新潟、金澤の北陸地方、仙台青森の東北地方いづれを見てもなか／＼盛んである。菊は古花といへば、古よりの名花新花といへば新しく實生なり根變りなごして出來た新種の花であるが、我國の菊の種類は、中御門天皇正徳五年十月即紀元二千三百七十五年京都及江戸に於て菊會を催された時に百五十餘種を數へた又、光格天皇は特に菊を愛させ給ひ、時の將軍徳川家齊も大に菊花に興味を持たれ、いろ／＼の獎勵あり、天明年間の菊合せには、その種類五百餘種

に及んだそうである。

今日大菊のみの、世に出て有名なる優良品種は二千位はあらう、一面實生をなし新種を作り世に出しレコードを作り、自分も楽しみ人もたのしませて居るのが澤山出來た。大正八年東京重陽會が全國の菊の名花を調査した事がある、その時全國の實生家として有名のものは京都に三十二名、青森に八名、東京に五名大阪に四名、滋賀に三名千葉に一名、神奈川に一名、栃木に一名、三重に一名、新潟に一名、北海道に一名計五十八名であつたが、その後長足の進歩をなし、現今にては非常の多數に上つて居るであらう。その時の一名たりし大阪府泉北郡横山村辻林吉雄氏の如きは現今年十萬本以上の實生をなし、新種の名品昭和二年度一ケ年にさへ、約七百餘種を作つて居るなか／＼わらい事である。

國華

英國のパラ、スヰートピー、伊太利のデジー、佛國の百合等皆國の花印としたものを國華とする我國には櫻と菊である、菊は、皇室の御紋章として古くより定められて居る櫻もいつかはなしに國華と肯定して仕舞つたのである、もう別に定めなくしても菊を國花といふことは自然に定まつて來たのである。

菊花園藝の興隆に就きて

が私は一つ帝國議會に出して菊を國華とする決議をして發表する様にしたら層一層菊花に立憲的の恩惠を浴せしめると思ふ讀者を以つて如何とす。

重陽會 東京市小石川區仲町一五西岸寺、井上長善氏に事務所あり、全國に千五百餘名の會員を有す、大菊專門追々は小菊もやるといふ。

秋香會 東京市神田區東紺屋町三八、柳瀨靜之助氏方に事務所あり最も我國培菊團體の古きもの創立以來四十年に近し始は狂菊中心なりしが今は大菊も小菊もやる。

千秋會 事務所は東京市本郷區森川町一、竹内榮太郎氏方にあり創立日淺きも會員多數あり大菊を專門とす。

長生會 東京市外西大久保四一四、鳥居信之助方にあり小菊專門の團體なり、小菊栽培今日の隆盛は本會に負ふ處多し。

大五秋芳會 浪華秋芳會といふ、大阪市天王寺區生玉町光善寺、辻厚道氏方にあり。

京都菊友會 京都市三條東山線西入金臺園内にあり京都菊友會は二つに割れ大正十五年より帝國菊友會てふ分派を生ず今は帝國菊友會事務所を記したり。

今日大... 寶塚菊花獎勵會 會長は菊地幽方氏事務所は兵庫縣川邊郡寶塚伊藤別莊北三號、嵯山誠次郎氏方にあり

關西の鎮たり (以上事務所は昭和三年一月調)

第二章 菊花培養上に於ける用語のいろく

菊花培養を手慣れて居る黒人の方たちは、勿論用語の説明などに耳を傾ける必要はないだらう。さりながら少々菊花の培養を試みては居るがまだ堂には上らない方や、始めて菊花培養に志す方は、どうしても菊花培養者間に使用して居る、菊専門語がわからぬと何かと不便の事が多い、だから以下少し之を述べて見よう。

- 1、小輪とは一寸以下のものをいふ
- 2、中輪とは一寸乃至二寸をいひ
- 3、大輪とは二寸乃至三寸のものをいひ
- 4、大々輪とは花の直徑三寸以上のものをいふ

右は従來の大サに對する名稱と内容とであるが近來の如く大菊の栽培が進歩し瑞雪の如く八島の如き直徑一尺以上のものを作成するに至りては大々輪が三寸

以上を指す程度ではさつぱり時代に適合せぬ。瑞雪八島の如き大花を極大々輪とかの流行語の超特大々輪とかいへはそれは可ならんも之だけの詞では意味をなさない依て左に改正案を提出して置かう。

- 1、小輪 一寸以下
 - 2、中輪 一寸以上三寸マデ
 - 3、大輪 三寸以上五寸マデ
 - 4、大々輪 五寸以上七寸マデ
 - 5、極大々輪 七寸以上一尺マデ
 - 6、超特大々輪 一尺以上
- 二、咲く時期によりての分け方

- 1、春菊 四月下旬頃より咲く
- 2、夏菊 春菊に亞ぎて五月中旬より七八月頃まで咲く
- 3、秋菊 九月下旬より十一月下旬頃まで咲く

三、花輪の大きさによる分け方

- 4、寒菊 十二月上旬より一月下旬まで咲く
- 5、四季咲菊 春より通しでいつも咲く

菊は花輪の大きさにより大菊、中菊、小菊の三つに分ける。外に嵯峨菊、伊勢菊、肥後菊等があるが伊勢、嵯峨は大きさよりいへは中菊の中に入れ肥後菊は單辨の關係より大菊中の一文字菊の仲間に入れてよいと思ふ。

(一) 大菊 菊花中で一番大輪の菊で今日流行の寵兒となつて居るものはこの菊である、大菊は數年前までは一文字、厚物、太管、間管、細管の五つに別けて居つたか此頃は一文字、厚物を厚物、厚物走付(厚走)大掴み咲、の三つに分ち太管、間管はそのまゝとして細管を長垂咲、細管、針管の三つに分ち都合九種に分ち居る、尤も筆者は一文字厚物。厚物走。掴み咲。太管、間管、細管七つに分けて置く。

1、一文字咲 一文字咲は又廣のしともいひ又御紋章菊ともいひ大菊中の單辨廣葩で辨の數、少きは十二三辨より多きは二十八九辨に至る。

この辨數三十辨以上になると一文字咲といはず厚物八重咲といふ

2、厚物 辨が厚くして内抱となりて盛上げて居るもの

3、厚物走付 厚物であつて一部の辨か足を出して走りて居るもの

4、大掴み咲 厚物であつて掴みあげた様に狂つて走かつて居るもの

5、太管 太管辨であつてバツト中央より外に開放して種々の様に咲

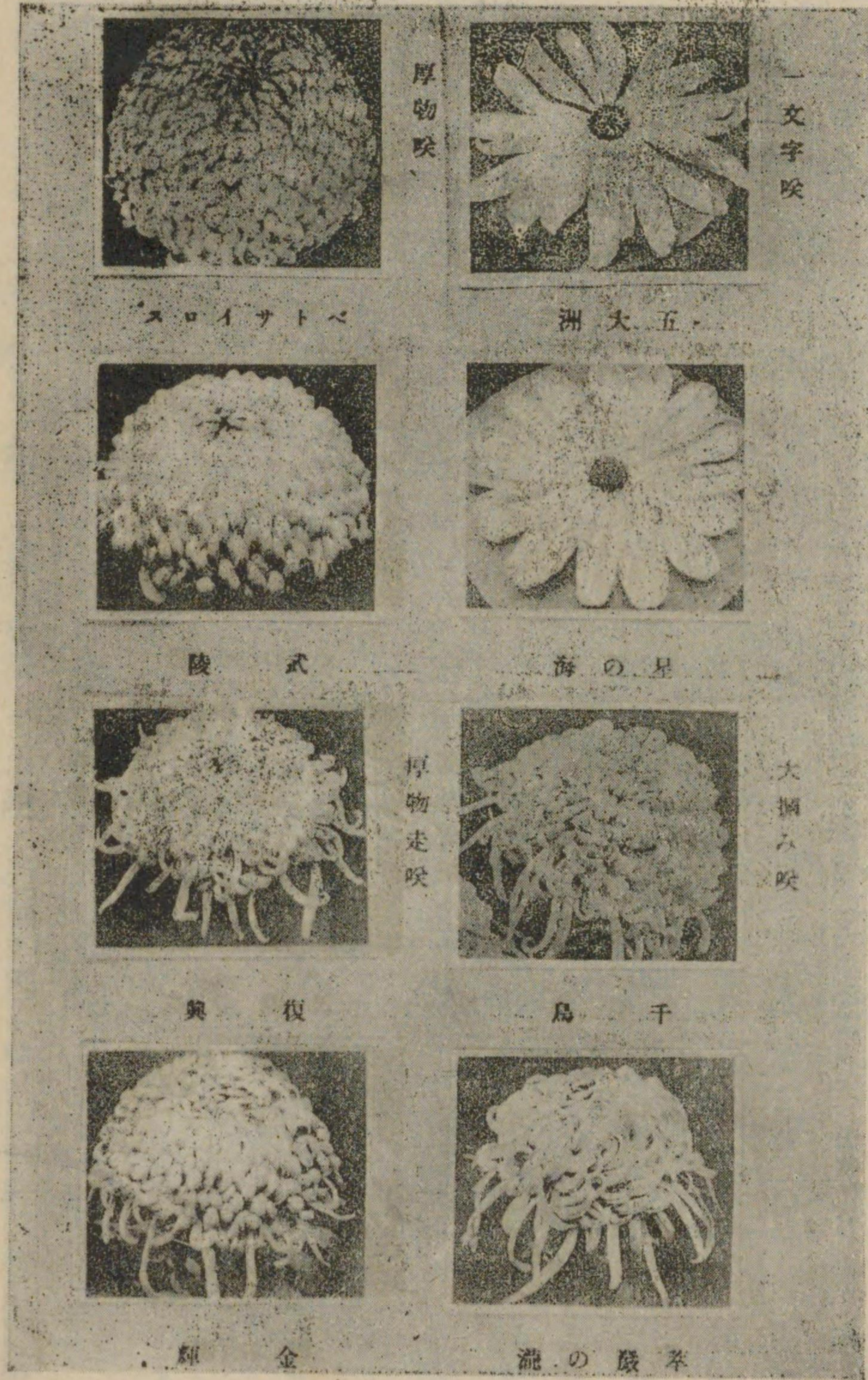
きて居るもの

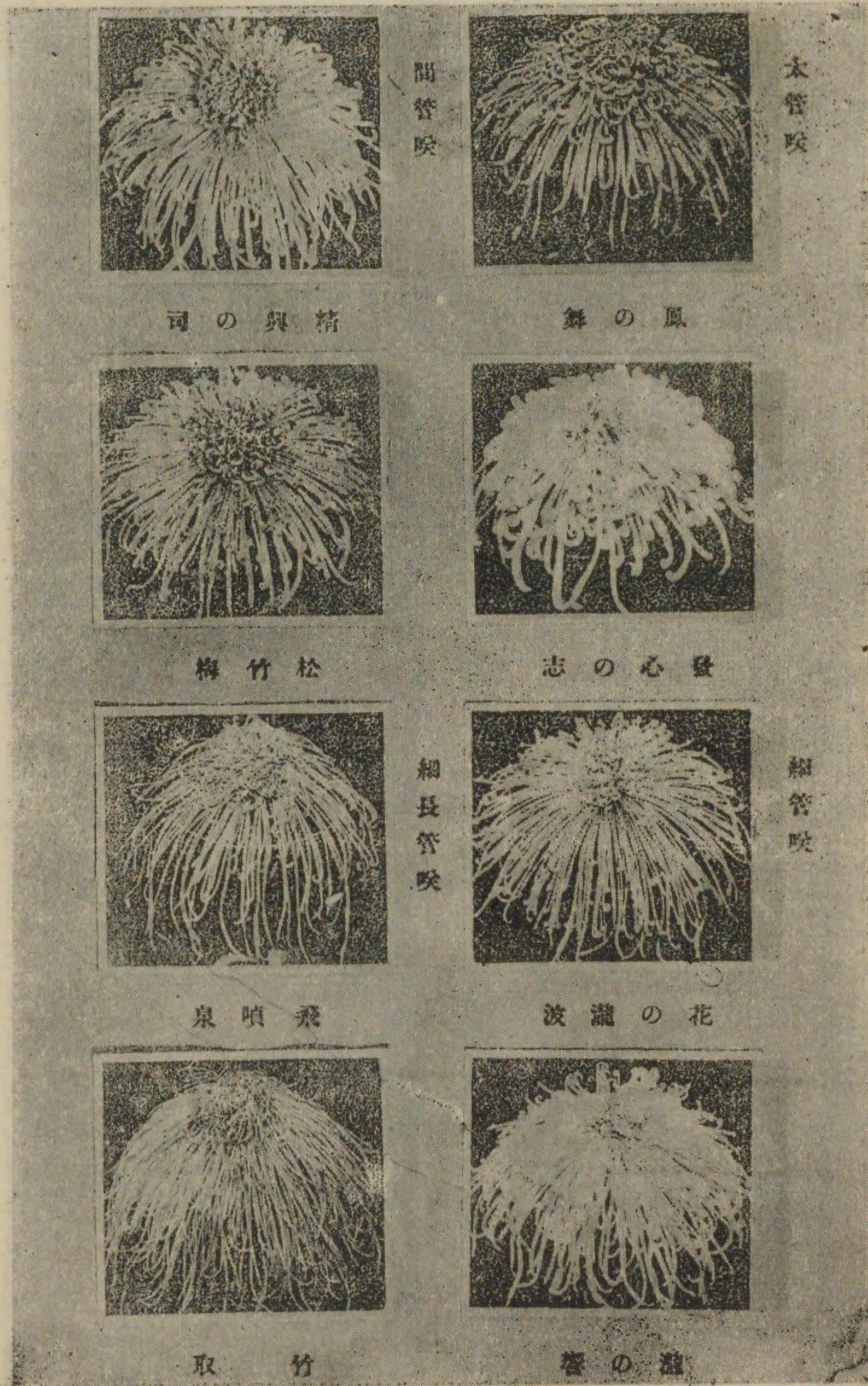
6、間管 又中間咲ともいふ太管と異なる所は唯管の太管より小さく

細管より太くその中間にあるものなるによりいふ

7、細管 間管より極細きもの、稱、糸管ともいふ、細管の中で素管

のものを針管といふ、長く垂れ居るものを長垂咲といふ。





(二) 中 菊 一名狂菊といつて古は江戸を中心として、大に流行したものである、今は

僅かに一部の嗜好家により餘脈を保つて居るは又世に出る時もあらう、東京秋香會では今尙狂菊の品評會を大菊と併べてやつて居るのは感心の事である

(三) 小 菊 1、山 菊 又文人菊ともいひ近來大菊について栽培盛んである、懸崖作りは主としてこの菊である、東京の長生會はこの菊の品評會を毎年日比谷で開き宣傳獎勵して居る。自然の雅趣あるは何とてもこの菊であらう將來益有望である。咲き方に平咲、よれ咲、線咲又管咲、車咲又丁字咲がある。

2、小 菊 普通小菊と稱するもの、之に刺咲、七々子咲、平咲がある
 イ、刺 咲 丁度刺に似た咲き方で又刷毛咲ともいふ
 ロ、七々子咲 又貝咲ともいひ丁度具を並べた様に小菊中最も小さく可愛いのである、盆養に笠菊といつて笠の様に作るのはこの菊である。

ハ、平 咲 小菊で刺咲七々子咲の分類に入らぬ他の平辨の咲方を總

稱する。

(四) 花辨について左の三種がある

- 1、平 辨 全体の辨が扁平のをいふ
- 2、管 辨 之に三つの種類がある素管、匙管、玉卷管である。
- イ、素 管 又袋管ともいひ管が袋の如くなりて先端のつまつたもの
- ロ、匙 管 花葩管状で其先が少しく裂けさちの形をしたもの
- ハ、玉 卷 匙管の進化したもので管の先端小環状に巻きこんだもの
- 3、半管辨 辨の半分丈け半管となつて残りは平辨のもの之に四分管六分管八分管等がある

(五) 辨の多少によりて左の區別がある

- 1、一重咲—單咲—一文字咲
- 2、八重咲
- 3、百重咲、千重咲

4、万重咲、万々重咲

以上は皆内曲咲なり(インカーブ)なり

外曲したるもの(アウトカーブ)は奇花と稱して居る

(六) 咲方によりて左の三つの區別がある

- 1、段咲辨數が豊富で外部の第一管最も長く中央に至るに従ひ順次短少し中心の管辨最も發育しないもの
- 2、采咲ある程度まで管辨數の多少に拘はらず第一管は勿論中心の管も相劣らず發育せるもの、そして直立するもの、狂咲は采咲の變体である
- 3、盛上咲太管にのみより、豊富たる管辨が密接して盛上の形狀をなし居るもの。

(七) 幹のこと

菊の莖幹の長さに長幹、中幹、短幹といふことがある

- イ、長 幹 五尺—五尺五寸
- ロ、中 幹 四尺五寸—五尺

ハ、短 幹 四尺内外

(八) 葉について

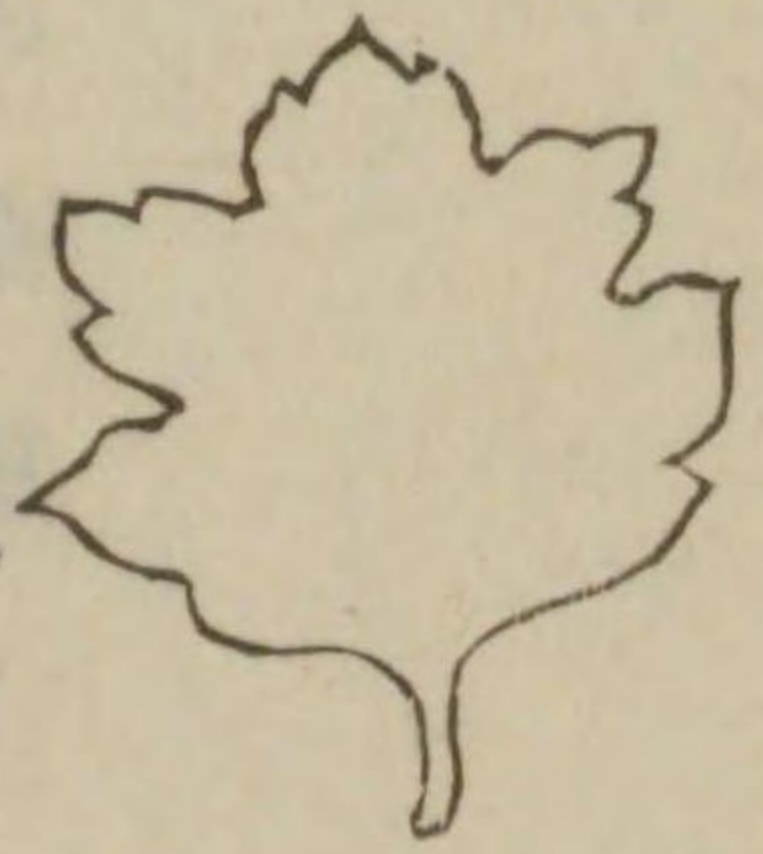
菊の葉もいろ／＼その種類によりて違つて居る大體厚物の如き正しい花の葉は又正しく美しく、細管の如き奇花の如きいろ／＼技巧を凝らして、咲くものは、その葉も又正しからず、葉身が長かつたり葉柄が長かつたり葉柄についた葉が舞ふて見たり、半裏返しをして見たりして居る様である。だから菊の達人になれば葉を見れば、花の恰好を知られる様になれると思ふ（あの朝顔の莖の色や葉の形を見て花色花容を推定出来る様に）葉の事は栽培書に書いてあるものは少ない、併し花を賞すると共に葉の下葉が落ちず青々と美しいものを尊んで居る、菊の種類によつて葉の美しいのもあれば、葉が矢鱈に不行儀極まるものもある、だから花を選ぶと共に葉の美しいのを選ばねばなるまい。葉の問題も軽い事ではない随分重要視せねばなるまい。

野間守八氏は葉を左の七種にわけて居る。

1、正



4、葵葉



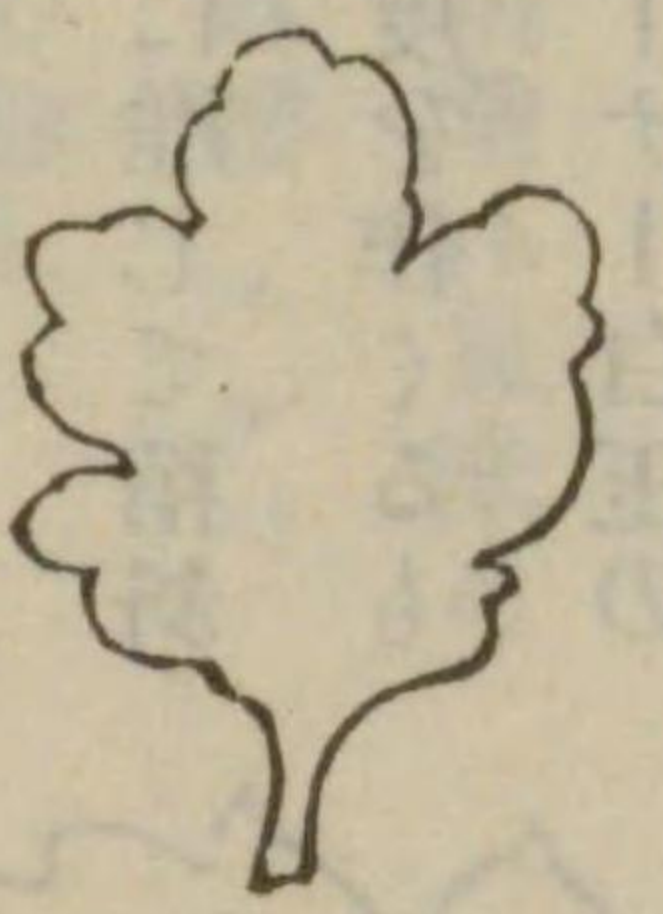
7、蓬葉



2、正葉深切



5、丸葉



3、長葉



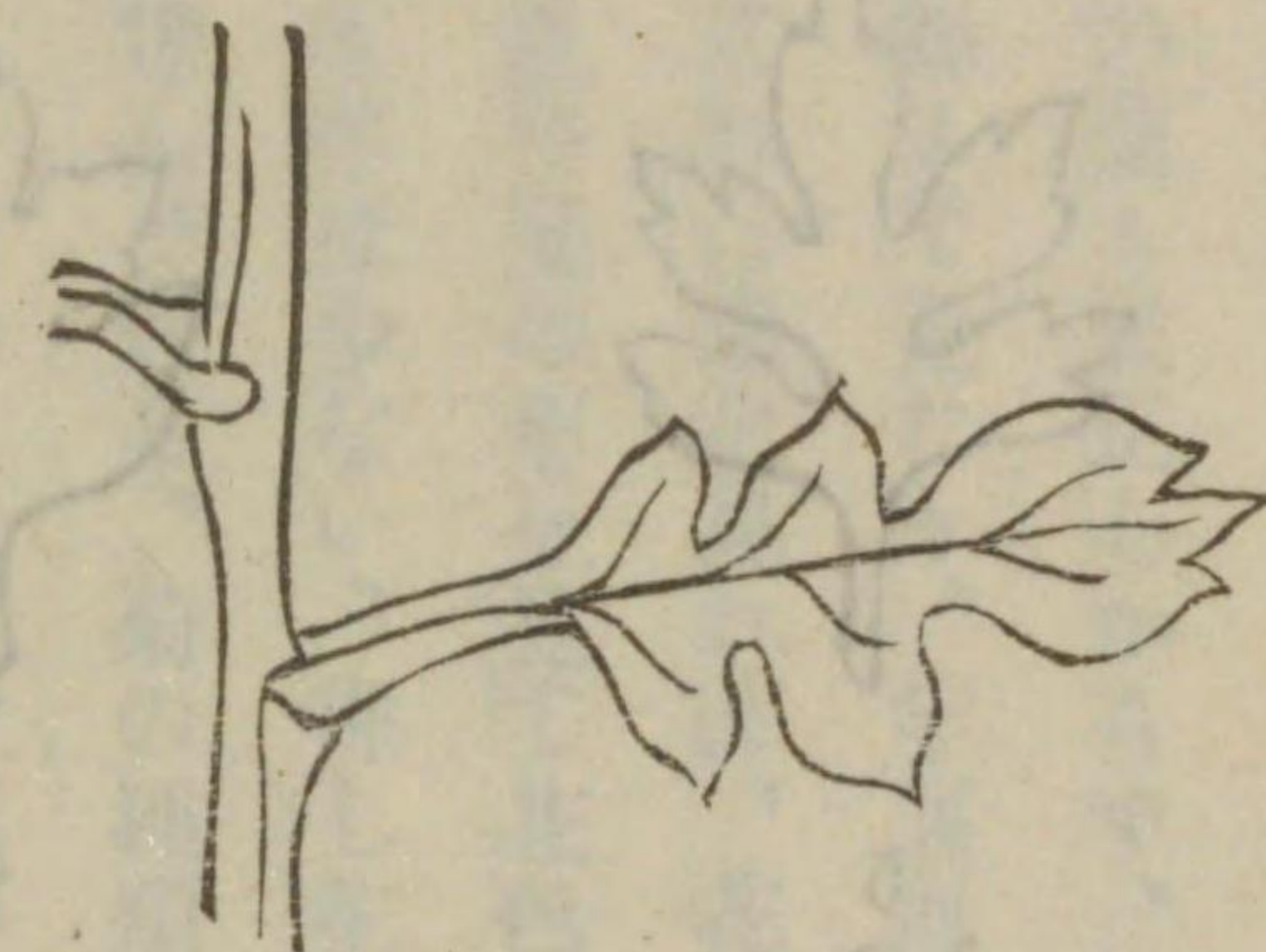
6、打込葉



筆者は次の六種にわけて見たいと思ふ

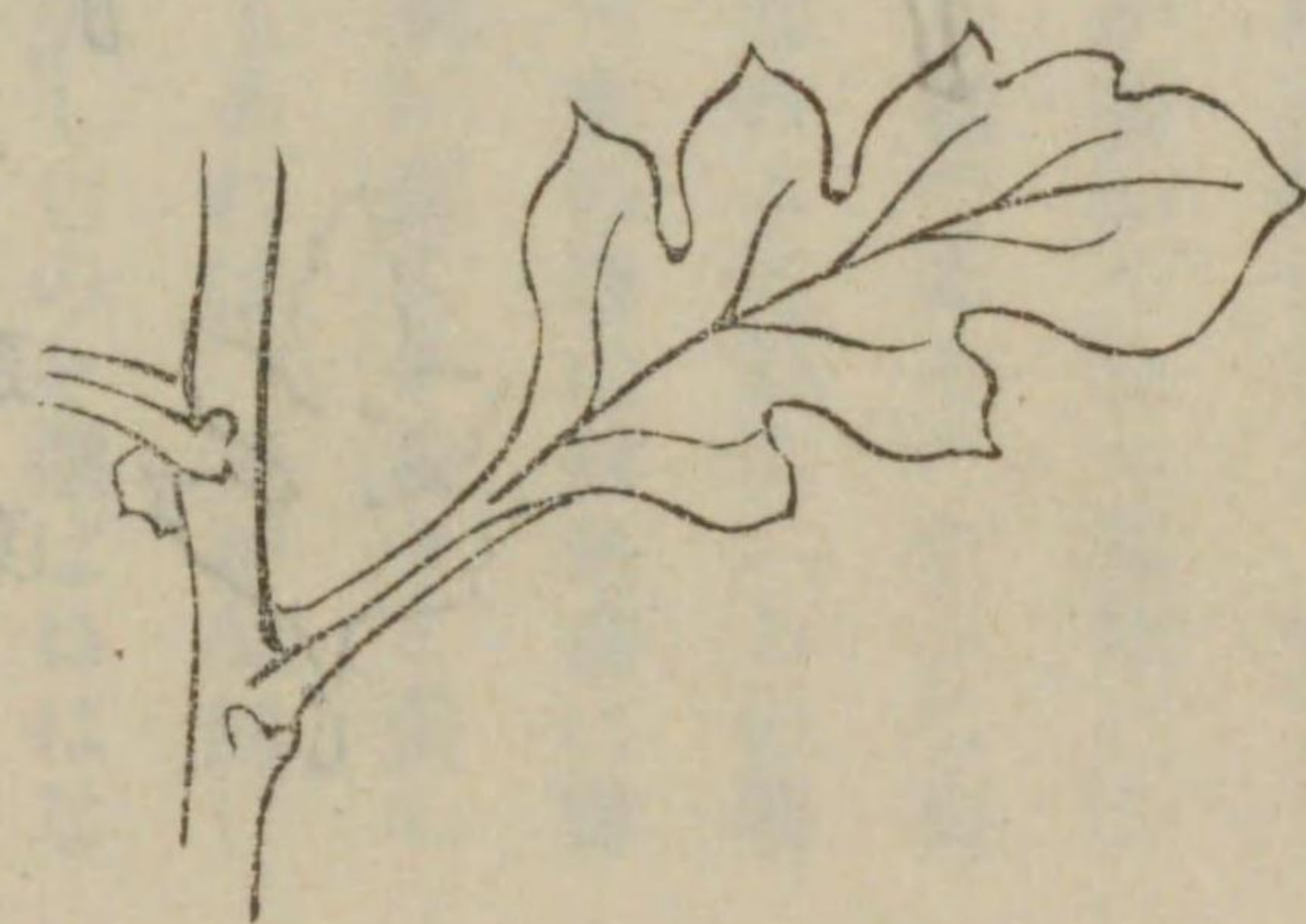
1、正葉

これは最も美しい
正しい葉で葉柄も
短し殆んど莖に直
角をしてついて居
るもの曲玉、大明
錦の如し



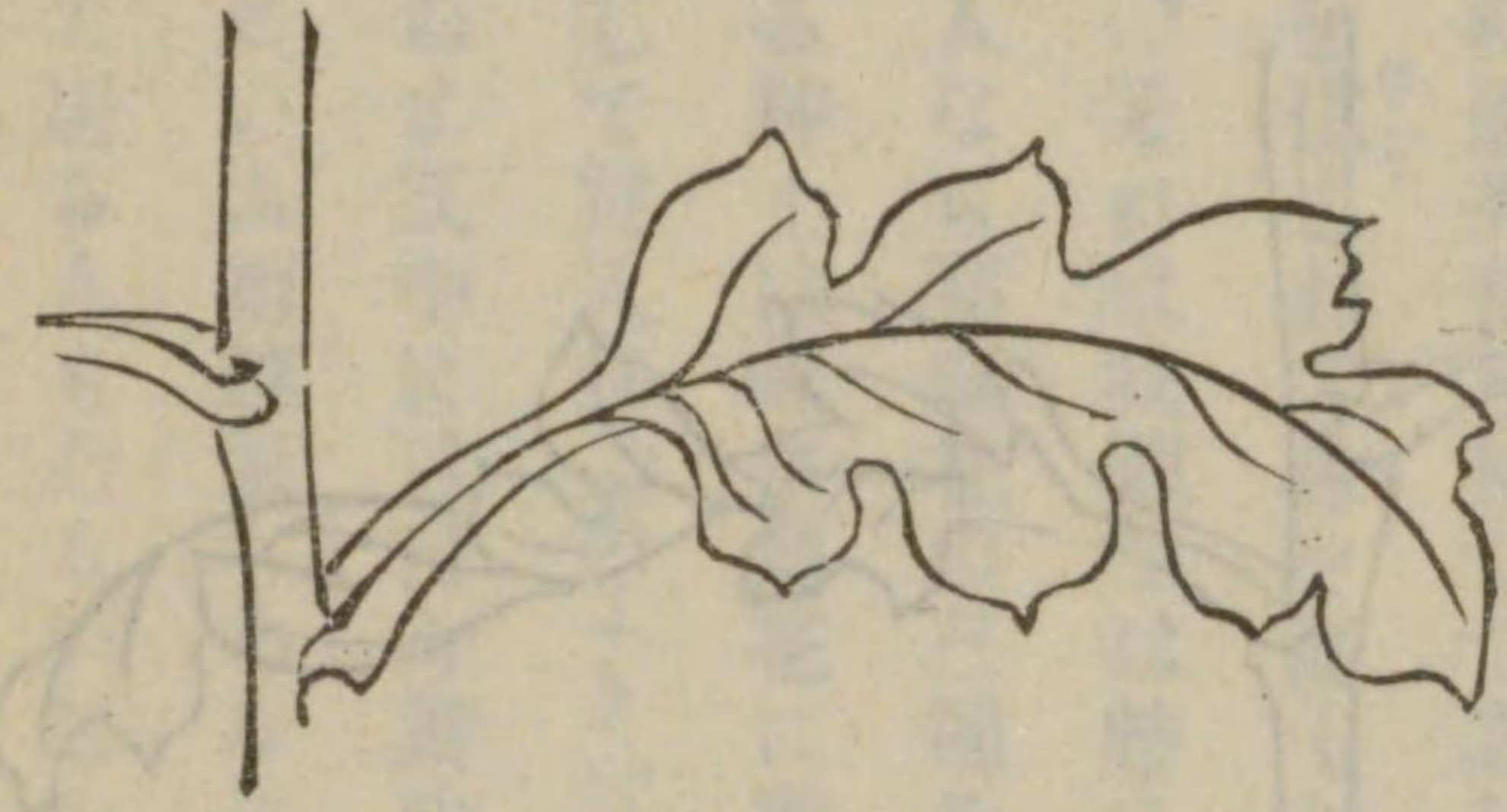
2、准正葉

正葉に准じて稍斜
に角度を作くるも
のターナー白玉の
如し



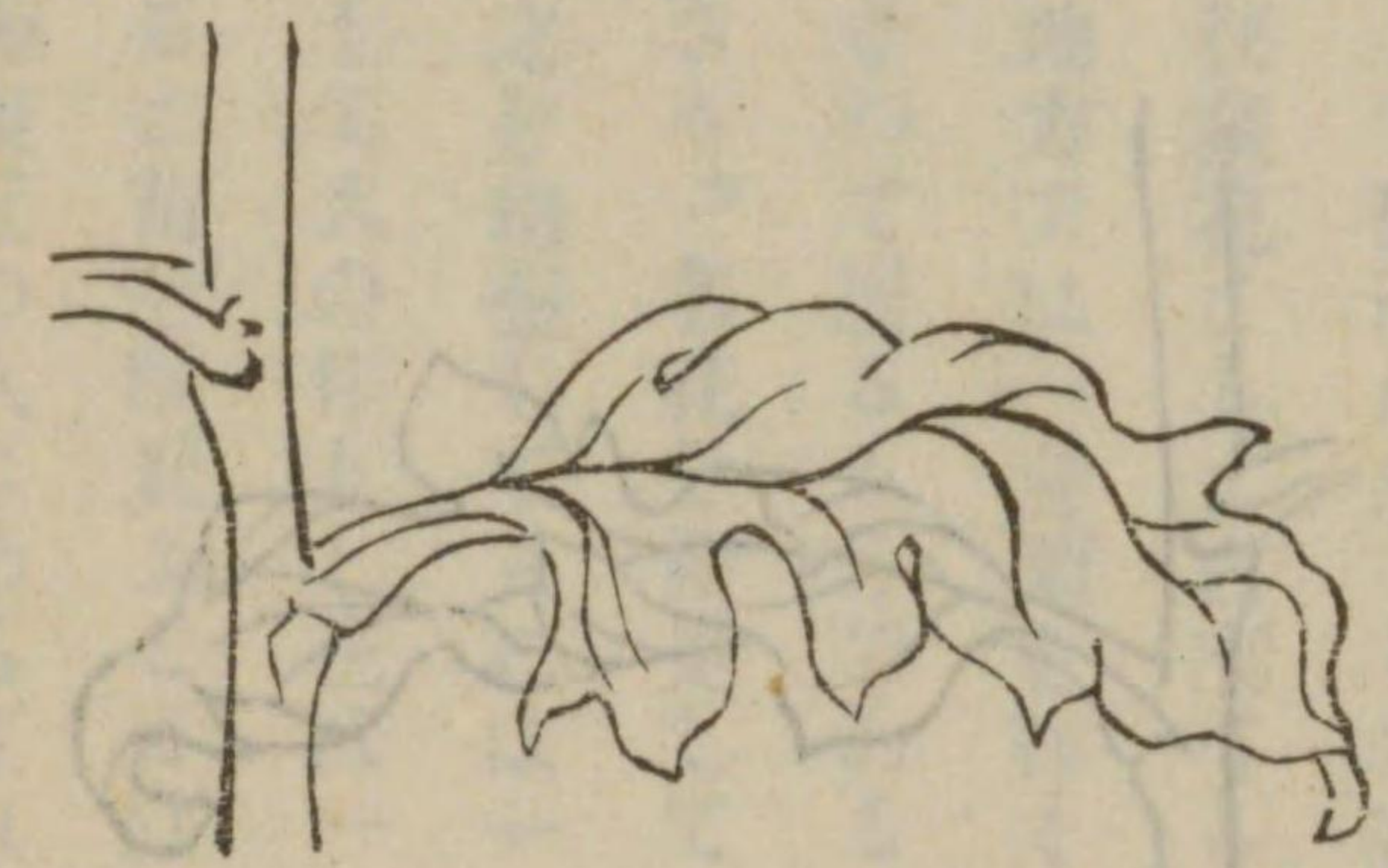
3、眉葉

葉の幹につき工
合横より見て孤の
形をなせるもの昆
崙の雪、金司香の
如し



4、ちさ葉

ちさの葉の如く
美葉稍垂れ氣味あ
り見返櫻 エルベ
ロンの如し



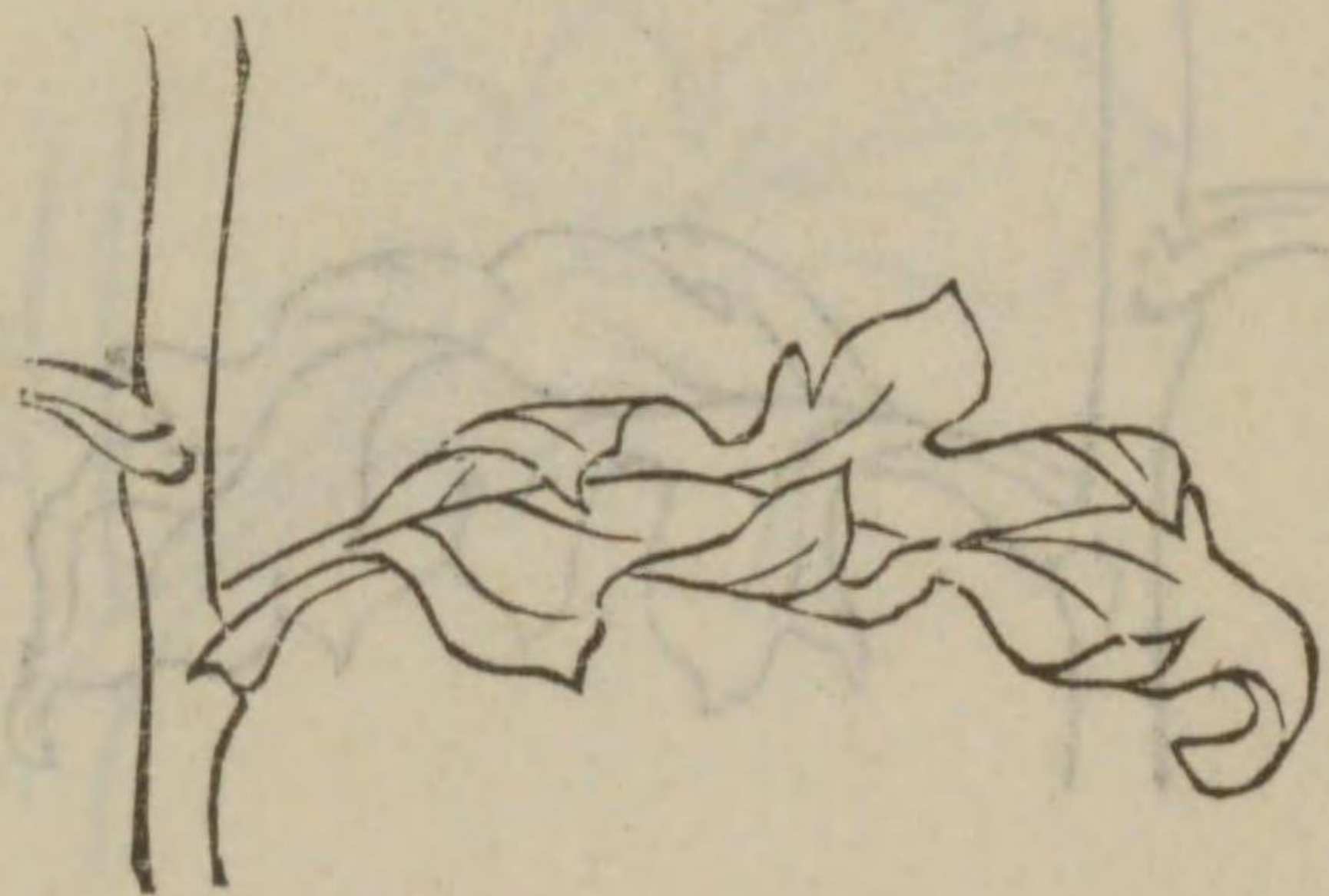
5、乱葉

葉柄長く葉の表面ねぢれ舞ひ至つて不行儀のもの瑞雪、猩々冠の如し



6、准乱葉

乱葉の如く乱れ居らぬもの



(九) 菊の秘藏花と物質的価格について

人は誰れにも自尊心、倨示心といふ本能があるそれか菊の方面に發現する人の知らぬ優秀花を持つて之を花時に人に見せ否倨示して自己がかゝる名花を持つ事を倨^{ほこり}として鼻を高くして人には分與せぬ即ち秘藏花として占有する風がある、それは我國では特に京坂地方に多い、京坂地方では一寸菊を作るといふ人なら秘藏花の三種や五種を占有して高くとまつて居るそうである京坂のある紳士は毎年菊花に數千圓を投じ實生家をあさり、名花を發見して之を根引して買入れ(素より一種高きは數百圓を投ず)之を培養して人には一切譲せぬと又中には自ら實生したものばかりを栽培して人の作りし花は一切作らぬといふ超越家もあるそうである、菊は人によると苗を唯貰ふことばかり考へて居る人もあるがなか／＼優秀花は信友又は極親近の人にあらざれば出さぬ、くれる花はろくなものはないとこぼす人のあるのもこの消息で明かであらう、そこで菊は大抵種苗店より買ふものも多い少し菊道に入ればそ

の價もわかつてくる目下相當優秀花の新花は一種につき五圓以上三四拾圓位まである優秀花でも全國に行渡つて平凡となつたものは一種三十錢より四五拾錢の間である九州大牟田、福岡邊になると菊苗買入に毎年一萬圓以上を奮發する人もあるときく、本年我國實生の大家大阪府泉北部横山村辻林吉雄君より根だやしとして御大典記念として賣出せし名花幾夜△の春、檣麓△の光は一株五百圓づゝなり恐らくは發表後旬日を出でざる内に數奇者の懐に飛んでいつたであらう。素人はかゝる事を信實と思ふまいがそれが事實である、又菊に預けといふ詞あり之は優秀花を望まれた時又は自己の意志によりて人を見てこの種類を預けて栽培せしむ預りしものは他に一切分譲は出來ず、又自己栽培せざる様なれば之を預かりし人に返戻し自己の處にその品種を残すこと出來ざる菊道の道德である之を破りしものは菊界の非紳士として之を卑んで誰れも相手にせざるこゝとなる

以上菊全体に亘りて品種や咲き方等につきての用語を大体述べ盡したと思ふ然るに本書

はこの多數の菊花中範圍を大菊にのみ止め、大菊の栽培中でも又範圍を鉢植即盆養に限定し、その内又一輪咲三輪咲に限定して、題意の如く大菊鉢植一輪咲、三輪咲培養法として述べて見たいと思ふ。用語もこの範圍で述べようと思つて居つたが、つい横道に之も必要と思つて餘分の事ながら大分かいたことを悪く思はない様にして下さい。

園 1、菊の栽培書を筆者だけが讀んだものでも二十幾部あるが、元來書籍でも書きたがるものは經驗に乏しく、眼や耳より直に口や筆に吐いたり、書いたりしたがもの多く、それをたよりにして培うしても菊は思ふ様に咲かぬ、エ、こ書物にだまされたと悔いても仕方がない又實際に研究して經驗して居るものは書籍や雑誌などに發表したくない、寧ろせぬ方が多いのである、愛菊培よう家は自己が一代に研究した事を死ぬる時遺言に一子にしたいといふ事さきいた。こんな調子で發表したがるものに實味が少なく栽培上手といふものは發表を好まぬ、そこで新に菊を作らんとするものは困るので、書物によれば失敗して作くれず、經驗家は秘密を明けてくれず、その極菊花培養が六かしいと、折角思ひ立つたものを、やけ氣分で棄てるといふ調子である、筆者なども明治三十五年から菊に興味を持ち、始めは書籍によりてよる處をつかまへてやる、失敗する又やるもうやめようかと思つた事が二度や三度でない經驗し研究して見るこ全く前述の如く發表家は生かぢり多く經驗家は

秘して語らず、この双方の不親切によることを感じた、そこで吾々如きつまらぬものか到底眞氣ない望みながらこの中間に立ちて出来る限り誠意を以つてほんまに菊花か立派に咲く様なものをかいてよ見うと志したとして筆者と感を同くせらるゝ世の方に知らして上げたいとして筆者の苦しみしことを世の方に苦しませさすまい望みである

2、根だやし、根曳き、根だやしとは菊花賣買の一種にてその品種として買入れた時は賣主の處はその品種は絶対に保存出来ぬ定めて買取者一人の占有となる即ち世界中その品種は買取者のみの處にありて他にはなき事なる故に優秀の名菊が一種五百円は敢て珍らしとするに足らず根曳も之に同じ

3、大菊の種類の分け方につき、純厚物が太管になつたり、一文字咲か細管に咲いたりすることは先づ絶対にないが今年間管と見たものが翌年は肥料や種々の關係で太管に咲いたり甲地で太管と思つたものが乙地で厚走に見えたりすることは常にあることで厚走、大掴み、太管、間管などの分け方は確定にあらず時、處栽培の方法によりて双方混觀せらるゝこと多しそは唯科學的にあらぬ大体のわけ方を承知せられてよい

第三章 大菊の種類

大菊を栽培するにどんな種類がよいかといふに、之は十人十色各自の好き／＼によるのが一番よろしい自分の好きなものを自分が作る、之れ程たのしいことはない。併し今一步ふみこんで考へて見るとその好といふ範圍が一寸考へもので、大菊の花にはどんな種類があるといふことを充分心得て居つて、その澤山の品種を比較研究して、自己の理想自己の性格に合した花を鑑賞するのは眞の好きと稱してよいが、大菊の花の全体否その代表的の花の要素も知らずに、あの花を見れば之も美しい、此の花を見ればあれも美しいと、盲目好みは菊好みといふよりも寧ろ菊めくらであると思ふ、だから菊の栽培をなさんと欲するものは先づ現代いかなる大菊か時代的であるか、もてはやされて居るかを知らねばならぬ、菊の種類は已に徳川時代に五百餘種ありし事は已述の通りだが明治時代となり愛培家の新種を作り出せしもの續出し、世は大正、昭和と、なり、己に數千種を出し、又天下の實生家雨后笥の如しだ、全國秘藏の菊まで數へたなら、數萬種も

大菊の種類

云

あるであらう。然るに之にも新陳代謝、淘汰の原則は次から次きへて行はれ、昨日まで帝都の中心で名菊よこ謳はれしものが、今日は悲風慘雨劣花として顧みるものなき至る状態にて、十年間と名菊の地位を守るものは、数千種中僅に數十種に過ぎない筆者は名菊の内實生年度及實生者の明なるもの、假に百種を選び、之を年度別にし表記して御覽に入れると實に左の通りである、そして明治三十年以前の名菊にて今日までその品位を保ち、實物の現存せるものは、見返櫻外五種に過ぎない、其他のものは名鑑上に名を列しあるといへども、己に實物は淘汰されて、滅多にないようである、偶尙古家に保存されて居つても之を現在の名花に比へて到底比べものにならぬ、劣つた花であるのである。

年 度	種 類	一 文 字	厚 物	大 厚 走 摺	太 管	間 管	細 管
31	明治三十 年以前		見返櫻	黄金露 佐野の渡	田每月	新若紫	青糸竜

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
			夕日影		鶴齡					
	天照							新高山 明月山		
					雪の嵐	越の浪				
					美女舞			白鳳		流鏑馬
	金世界		蓬萊							紫光龍
				意外				金鷄 見鷺		龍神冠

9	8	7	6	5	4	3	2	大正元年	44	43
			美玉王				八重霞	大御代	曲玉	
			故郷春			平曠古和賀		龍冠	吉野櫻	海風
	雪曙	白龍	萬里譽	三番央 鳳の舞、紅葉山			紫宸殿、美玉			深山雪
右邊	山姥	愉快						龍王		
海月	紅葉山									
紅花	故山							飛天噴泉		
花の瀧波	靜波	槇麓譽				瑞雲、那知瀧 結ぶ玉章				

昭和元	14	13	12	11	10
	秀美、秀麗	猩々錦	敷神代島錦	落文	
金星光	日東光	猩々	満山霞	孤村月	
鳳壽の冠	白鳳冠、 業平、國寶	石橋、半蔀	還城樂	百万	延の都齡
月ヶ瀬	黄金鳳	不二曙	高根錦	大觀聲	高嶺雪
精興の司	九重光	鳴の空音	天遲秀	槇麓	麟鳳
こぼれ錦	松の聲	艶姿	凌雲		越後獅子

今左に東京重陽會調査最近菊花銘鑑中より現今帝都を中心として有名なる品種五百餘種の内百餘種を摘記すれば左の如くである。

一 文字

花名 花色 花期 幹種 肥料

金寶 錦 中 中 小 小

第三章 大菊の種類類 元

千代光	八重霞	ピンダターナー	孤村の月	深山雪	快適	武陵	月宮殿	タイニツケ	ベトサイロス	美玉の王	春興殿	陶測明	
錦	淡色	淡桃	白	白	仁紫	櫻	白	乳白	白	白	黄	樺	
早	中	中	中	晩	早	早	中	中	早	中	早	早	
中	短	短	短	中	短	長	中	中	短	短	中	中	
三	大	最大	最大	中	中	大	大	中	大	大	最大	中	大

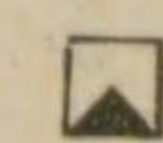
祇王	オデツサ	エローターナー	花名	厚物	万歳	大内山	銀晃蓮	不知火	瓊單	天晴	鏡宮	万歳
濃黄	黄	淡黄	色		黄	紅縞	濃紅	紅紫	淡紅	白	白	黄
早	中	中	花期		中	中	早	早	中	中	早	中
中	中	短	幹種		中	長	中	中	中	中	中	中
大	大	最大	肥料		小	小	小	小	小	小	小	小

東洋司	富士の高根	天主閣	復海興	四海波	佐野の渡	白美女	群山の雪	月の都	天照	五洲	陣太鼓	黄美女
錦	白	白	白	白	白	醉白	白	白	黄	黄	黄樺	黄
早	早	中	中	中	早	中	晚	中	最早	早	早	晚
中	最短	短	中	中	短	長	中	長	短	中	中	中
三	大	大	大	大	中	大	中	大	中	中	中	中

越	黄	新	金	万	花	厚	工	花	曙	見	曲	紫
の	金	海	歳	歳	の	走	ル	の		返		震
譽	壽	風	輝	聲	名		ベ	都		櫻	玉	殿
							ロ					
							ン					
濃黄	黄	黄	黄	黄	色		紅	淡桃	紅	櫻	濃紫	淡紫
中	早	最早	早	早	花期		中	最早	早	早	中	最早
中	中	中	短	中	幹種		短	短	最短	最短	中	短
中	中	中	大	最大	肥料		大	大	大	中	中	中



金	花	間	蓬	紅	三	美	白	祝	天	田	探	雲
鳳		管	葉	番	紫		震		涯	每		か
の			菜	山	王	殿	帶	秀	月	梅		浪
舞	名		紅	細	茶	淡	白	白	白	移	青	平
	色		樺	黃	紅	紅				白	白	
黃			中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
早	花期		晚	中	晚	晚	中	中	中	早	中	中
			中	中	短	中	中	中	中	中	中	最
中	幹種		中	中	中	中	中	中	中	中	中	長
中	肥料		中	中	中	中	中	中	中	中	中	中



高	天	崑	國	新	養	發	鳳	錦	振	金	花	太
根	の	崑	の	龍	老	心	の	猩	風	世		管
の	羽	の	寶	冠	瀧	の	舞	々	古	界	名	
雪	衣	雪	寶	冠	瀧	志	舞	々	古	界	名	
		(曉山雪)										
白	白	白	白	白	白	移	紅	黃	黃	黃	色	
						白	樺					
早	中	中	中	中	中	早	早	中	晚	晚	花期	
中	中	短	中	中	長	中	短	中	中	長	幹種	
中	中	大	中	中	中	中	小	中	中	中	肥料	

金	花	細	松	芳	故	羽	白	鼓	麟	黄	又	槓
瑪		管	竹		山	衣	孔	の		瑞	意	麓
司	名		梅	春	夢	舞	雀	瀧	鳳	雪	外	譽
黄	色		銀紫	紫	紅茶	淡紅	白	白	濃薄	黄	黄	黄
中	花期		中	晚	早	最早	晚	最晚	早	晚	早	最晚
最長	幹種		中	短	最長	中	長	最短	長	中	最長	長
完	最小	肥料	中	中	中	中	中	小	小	小	小	小

沖	富	翠	槓	愉	鳴	瀧	万	滴	猛	新	砧	知
の	岳		麓			の	丈			通		惠
鷗	の	雪	の	波	瀧	快	弦	響	瀧	露	虎	天
白	白	青白	白	白	黄	白	樺	黄	金樺	黄	黄	黄
中	早	中	中	晚	早	中	中	晚	中	中	晚	中
中	長	中	中	中	中	中	長	長	中	中	中	中
小	中	中	中	中	中	中	中	中	最小	小	中	中

右表肥料の欄内に最大とあるは乾燥肥料四合を意味し大は参合中は二合小は一合最小は七勺位である乾燥肥料の製法は第九章肥料の處を見よ

紅	陽	黒	貴	天	結
葉			女	ふ	玉
錦	炎	髪	舞	惠	章
金	紅	黒	濃	淡	淡
樺		紫	紅	紫	紅
中	中	最	晚	中	中
		早			
中	中	短	長	長	短
小	小	中	小	小	大

花	蛛	琵琶	長	誰	友	麗	竹	凌	瑞	君	意	飛
の	の	湖	壽	か	白					が		噴
瀧	糸	の	樂	袖	髪	水	取	雲	雪	代	外	泉
波		波										
移	白	白	白	白	白	青	黄	白	白	黄	黄	淡
白						白						紫
中	中	早	早	中	晚	中	晚	中	中	中	早	中
中	中	短	長	中	長	短	長	長	長	中	長	長
中	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小

第四章 菊花鉢植培養上の諸問題

菊花の鉢植をしようといふ氣になるとだれでも左の様な問題にぶつかゝる。

- 1、菊花培養の鉢はいかなるものが適當なりや
- 2、菊は一鉢に何輪咲を適當とするか
- 3、鉢の中に入れる土はどんなのがよいか
- 4、菊の苗はいかにして作るか
- 5、菊の肥料はどんなものかよいか
- 6、苗の植付かたはいかにせばよいか
- 7、植付た菊苗はどんな世話が必要か
- 8、蕾の出来るまで 花の咲くまで
- 9、花かすんで後はいかにするか

以上の様な九つの問題には是非ぶつかかるこの九つの問題が如實に解決出来ること菊の

培養はもう六ヶしいものではないのである。いで之よりこの九つの問題に解決を與へて見よう。

第五章

菊花培養の鉢は如何なるものか

適當なりや

鉢植菊を作くるかくいひ出すと鉢が是非必要のものとなつてくる、元來何故に鉢植にするのかと疑つて見ると鉢植にせば第一都會の人たちで作くる土地のない方でも家の檐端でも屋根の上に箱を作りその上にでもどこでも作られ、賞玩することが出来る。第二に鉢植にすると管理がし易い日の照る方へ出そうが雨や風に遭はしては毒だと思つた時は一寸抱へて家の中へ走り込み、完全に保護することも出来る。こんな藝當は露地植では決して出来ぬ、鉢植の難有い處である。第三には花が咲くと花壇に作つても色の配合、背の高低等の調子を取る時には自由に前後左右高低思ひのまゝに運ばれる、まして咲いた美しい鉢を朝は室内の適處に置いて獨り打眺め、不覺に微笑を漏らし、晝は人の往來の多い道路の庭先、檐下にこの一物をさし出して、往來の人の眼にも觸さして、人の心を慰めるといふも、この鉢植の特色である、一寸店の裝飾に數鉢貸してくれまいかの依頼にも應せられ、獨り我のみの楽しみでない人と共にたのしむ。何やら古聖人の佛

も、こんな處に見せてうれしでないか。どんな鉢がよろしいか……構はぬといへは何でもよい、バケツの古も可なり、ほうろく釜の古も可なり、土を入れて作れば菊は立派に出来る。併し底へ穴をあけて、水吐きをよくする事を忘れてはならぬ筆者の長友某君が青年會員に菊趣味を養ふといふ精神から土地の若い方たちに養菊を勸めて作らし毎年品評會を開いて居るが、審査に行つて見るとほうろくの釜の古あり、バケツの古あり斗櫛の古ありといふ鹽梅、之に菊が美しく育つて、立派な花をつけて居る、田園青年の高等なる趣味と品性も、この間に養はれて行くことを思ひほんとうにうれしい氣持に浸つた事がある。近來は菊鉢といつてコンクリートでこしらへたのなどあるが之は面白くない、一番理想的なのは素焼鉢といつて、上藥りをかかない粘土を練つて燒窰へ入れ、そのまゝやいたものである、この鉢ならば眼では見えぬが鉢一めんは細い目かあいて居るから、排水がよく出来、又乾きもよく、空氣の流通もよいから、菊は思ふ様に成長するこの鉢に上藥を塗つて美しくしてあるのは空氣も通はず排水も悪いから菊の衛生には不適當である、ある地方では今にこの上藥の塗つたのを菊鉢じやといつて、喜んで買ふて

居る人たちもあるそうであるが、お天氣のよい事である。先日鉢の竈元を訪ねた時にその主人がかくいつて笑つて居つた京坂地方の菊鉢は素焼でないと言はれませぬが某市地方は上薬のあるのを喜んでそれでなければ賣れませぬ、私達は賣つたらよいのだからどちらでもよい様だが、菊作の方の思想が大分おくれて居ることが私達からさへ分つて居ります云云と。又丹波鉢といへる鉢あり素焼の一種にて菊鉢としてよろし。素焼の鉢ごはんな大さが菊作りが必要であるかといへば、一輪咲を作る人は一株につき一度植替へますから四寸鉢と八寸鉢との二つを要します四寸鉢とは鉢の上口直徑四寸のもの八寸鉢は全じく上口直徑八寸のものをいひます。先づ菊苗を四寸鉢に假植して根を張らし充分根の張つた頃、八寸鉢に本植をするのであります。その方法は後に委し。三輪咲に作る方は一株につき矢張二つの鉢を要します即ち一輪咲の通り菊苗を四寸鉢に假植して根を張らし本植にするのは尺鉢にします。即ち上口直徑一尺のものであります。人によると何に八寸鉢で咲かして見るかといふ方もありますが矢張り尺鉢の方が中の土の分量も多く根取りも豊かですが大きな花が咲きます。素人の方はそれならその鉢はここに

賣つて居るかといふ問題になる筆者の本縣に於て調査した處を左にかゝげよう。

(筆者ハ徳島縣人ナリ)本縣では板野郡堀江村がその本場である、堀江村に行けば家々皆瓶類を焼いて居る。京坂地方の菊鉢もこゝから多數に出て居る。

全堀江村田村基藏氏方調査(大正十五年十二月)

素焼鉢(各一個ニ付)

温室形

四寸 參錢

八寸 ナシ

一尺 ナシ

切掛形

ナシ

拾五錢

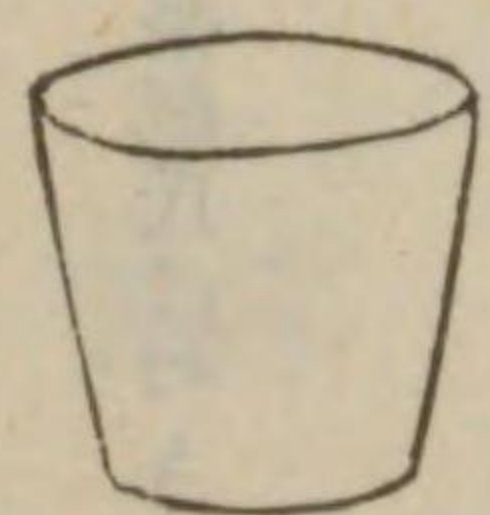
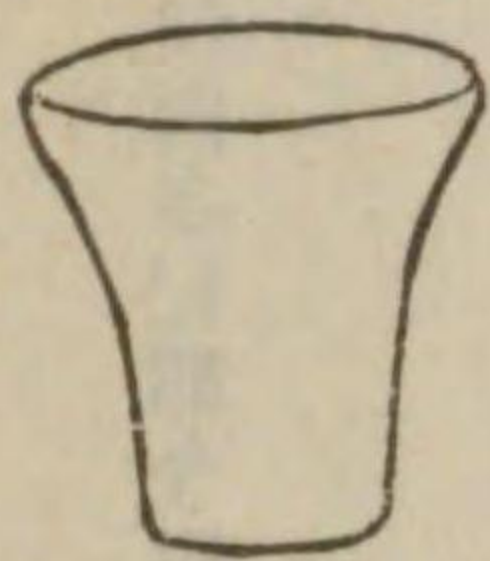
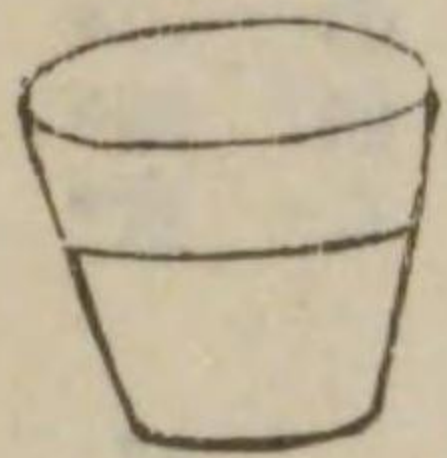
卅五錢

深形

ナシ

拾六錢

卅五錢



假植は温室形がよく本植は深形がよい

1、丹波鉢の調査 昭和三年一月兵庫縣丹波國多紀郡今田村丹波燒製造元市野榮藏氏につき調査したるに左の如し

品目	口径	深サ	一個直段	一俵ノ荷造個數
改良小星鉢	四寸	二寸	四錢	一五〇
深中蓮鉢	八寸	五寸	二拾四錢	二八
深型尺鉢	一尺	七寸	四拾五錢	一〇

2、東京重陽會指定の東京地方菊鉢の調査 (大正十四年五月調査)

品目	一個ニ付直段
並形 四寸鉢	八錢
八寸全	三拾六錢
尺全	五拾五錢

東京市本所區中ノ郷瓦町三拾八番地

内田福太郎商店

3、素焼鉢は讀者諸君の地方にて大てい間にあいませう、全じ素焼鉢でも栗色の伊部燒的のものには不適當です此鉢は水を注ぎてもなか／＼排水せず乾きが悪いです眞の素焼といふは薄赤色にして居るきつくつまめは直に破れる様のものである。

第六章 菊花は一鉢に何輪咲を適當とするか

均しく鉢植の菊花であるか一鉢に何輪を咲かすが適當かといふとそれは、一鉢に一輪を咲かして楽しむ人もあり、三輪を咲かして楽しむ方もあり、或は五輪、七輪、十三輪さては、百輪、千輪咲といふのもある。ある伯爵家にては一鉢に八百何十輪といふ澤山の花をつけてしかもその花が四寸以上の大々輪で見る人々はアレマアと大變感心したるうである。一輪咲可なり、三輪咲可なり七輪咲千輪咲皆可なり人各その好む處によるべしだが或る人は千輪咲の如く多く咲かすを菊藝術だ、技術だ人工天工を奪ふと譽めるか又ある人はその變化のなく造り花を並へた様だ、ごこに藝術ありや人格の發現ありや手間だけじや凡の凡、俗の俗といつて悪くいふ人もある、それは評する人に任せて置き現今大菊の栽培は大勢一輪咲か三輪咲かに歸して居る様である。元來一輪咲は第一一鉢に一輪を咲かすのだから豊大な花が咲く第二、その花の本能即特色の發揮が充分出来る

第三、作くるのに一輪だから手間がかゝらぬ、又普通三輪咲は大人一人の作り前約七

十鉢位とせられてあるが一輪咲になると鉢殆んど三倍二百餘の鉢を栽培するに手間が取れぬといふ事である。

第四、三輪咲にした處でその三つの花の背の高さを揃へて見たり又花期を同時にさせて見たり苦勞がなか／＼ある、なみ大抵の事でない。一輪咲はそこは簡單であるそんな苦勞は何もない。

第五、經濟上からいつても三輪咲は一鉢に立てる支柱が三本いる一輪咲は一本でよいといふ調子だから一切經濟的である。

第六、鉢が持運びに八寸だから軽いので管理がし易い、かういふ様に効能をあげると段々あらう、之が一輪咲の世に持てはやす／＼所以である。併し三輪咲の方も第一豊大の花はさかぬといつた處である程度までは咲く否一輪咲に負けない様に咲く豊大にして艷麗なる花か點々として三つ揃ふて咲いた時の美しさ、日頃の丹精の程も酬はれて胸の溜飲も一時にさかる、愉快さ到底比へるものはない。第二に花期が揃ふの揃はぬのとてそんなことに頓着しなくてよい、そこを揃はすが菊作の名人でないか、きつと揃はせて

見せる我輩の腕を見よと意氣軒昂あたる可からざるものがある。まあそんなに喧嘩腰は論外として三輪咲は一輪咲に比して美しい五輪、七輪になるとくどくどしく餘り技巧を弄し天然を害ふ嫌がある、三輪咲は丁度頃合だ、技巧にも偏せず、自然も害せず無理に三輪の天邊を揃へねばならぬといふ形式的のものでない、一つは高く一つは低く一つは中に之れ天地人の三相を供へる妙趣ありともいへよう。況んや三輪咲を花壇に並べた美しさ今こゝで喋々するまでもない。見た人の心にチャンと判断つて居るでないが、これ三輪咲の重寶がられる所以である。今日大菊を技巧をこらし五輪七輪十三輪百輪千輪といふ様に苦んで作るものあるは、之れ過ぎし古中菊即狂菊全盛時代の方法を大菊に輸したものといつてよいのである、俗の俗凡の凡たるものである。到底これ等の人は客觀的に主觀的に菊の風格を鑑賞することは出来ない事であらう。併し故福羽逸人氏が佛國にて千輪咲を作つて歐洲人に見せた時は日本人にもかゝる技巧がありやと驚いたといふことで、ある場合は別問題である。

■ 菊花は骨董扱にせず、民衆的なれ、隣の隠居さんは菊馬鹿で一鉢に去年は三十五輪さかしたが今年は五十

輪を咲かそうと毎日朝より晩、菊の鉢の傍を去らず一小枝、一葉までそれは、大切に育てられ物にも障る様に大切に育て居るあれは隠居さんだから出来る吾々職業あり仕事する身分であんなことして居れば食はぬと居らねばならぬ……此隠居さんは菊を骨董として道樂として居る方であるこの調子では職業の邪魔となる吾々は職人かひまに煙草を呑む様にその餘暇時間を菊に寄せて作くりて貰ひたい千輪咲になること鉢に五人位か、つて居るそうである之は吾々のいふ一般の菊作りでなく超勞級の菊作りいば骨董屋さんだお互は一輪咲三輪咲の簡單にしてしかも變化あるものにつき菊作りに墮せずして菊を作らう之本書の目的だ、皆さん賛成あれ、一輪咲三輪咲なるかな

鉢の重量 八寸鉢は素焼で普通八九百日 尺鉢で一貫四五百目である、之に培養土を入れると尺鉢で三貫目、八寸で一貫八九百日である。

第七章 鉢の中に入れる土はどんなのが良いか

鉢の中に入れる土はどんなのが良いか。……………所謂培養土問題である。お互人間は三度／＼の飯が第一である。飯を喰ふ、それが總ての原動力である。菊の培養土に於けるは人間の飯に於ける如きものである。依て培養土問題は養菊の基礎である。培養土が悪いと、もう菊は神経衰弱にかゝり、發育不良となり、到底甲種合格の喜びに達し處が丙丁の不合格の虚弱のものとなつて仕舞ふ。この培養土の製方は種々説を爲すものがあるが普通實際やつて居るのは、町のごみ捨場へ行くと何年も／＼積んだ上に積んだ塵埃ごもくの腐つたのが、土に混じて居る之を五分目の篩でおろして持つてかへる。之が町に取つては厄介な塵埃土、我々養菊家に取りては難有い滋養の培養土、世の中に不用のものはないものよ。又筆者はよく茂つて居る森林……神社佛閣の境内の裏の方へ行くと、潤葉古木の葉が落ちては腐り落つた上には又落ちて腐りと何十年も重りあつて腐つて居る葉がある之にその下の土を少し混じて取り矢張五分目の篩にかけ下に篩ひ落し

たのが理想的の腐葉土で實に神様の御威光で吾々菊作りに恵んでくれた難有い土といつてよい。以上述べた塵捨場の腐つて居る土芥。神社の保護境内の腐葉土は此上ない培養土である若し之が得られない場合は人工的に製造せねばならぬ。市町村の塵捨場の掃除は、よからうが神社佛閣の境内を荒らしても氏子、檀家の苦情も出て、そう甘ま／＼とは運はれぬ、況んや少數の人はそれも押して行けようが今日の如く多數の菊花培養家が出來ては到底間に合ふことでない。そこで此人工的製造の方が多くなるわけである。

市町村の塵捨場や、神社佛閣の境内の本葉は己に腐つて居るのだから早速培養土として使用されるが人工的製造は落葉を集めて腐らすのだから時間と手間とを費さねば腐葉は得られない。然らば如何にして之を製するかといふに先づ落葉は毎年秋の頃落ちた柏桐、檉、樺等の潤葉樹の葉かよい松、杉等の如き針葉樹の葉はよろしくない。

桐の一葉がひら／＼と落ちて秋季落葉の候を見せるや木の葉は一風は一風を加ふる毎に堆かく庭につんで毎朝夕掃除の男や女に苦説の種を蒔く、菊作りは苦説ごこらか多い程うれしい落ちよ／＼いくらでも多く落ちてくれと……その落ちたものを集めて（地方

鉢の中に入れる土はどんなのが良いか

五

によりて落葉なき處は、藁又は枯草等有機物なら何でもよい。堆肥とする此堆肥が翌年の冬になるともう完全に腐つた立派のものとなる之が塵捨場で腐したものと、神社佛閣の境内より採た腐葉と同じものとなつたのである。

筆者は之を培養原土と名づける之を表記する。

- (1)、塵芥捨場の何年も積み重つた有機物を五分目の篩にておろしたるもの(之には土が多く混して居るが別に土を混じなくてよい)
- (2)、神社佛閣又は深山の森林に木の葉が落ちては腐り腐つた上に又落ち腐りてある腐葉を採り來りたるもの全じ五分目の篩を通して下りたもの
- (3)、人工的に濶葉樹の葉、藁、枯草等の有機物を一年かゝりて堆肥として腐らしたるもの。

培養原土

大体培養原土には有機物六割、田の土(里芋を植ゑた跡の土最もよし)四割を混したるものを造ればよい、然らば右表による。

(1)の場合は土か混して居るからそのまゝでよい併し六と四との割合の調子を考

へて之に合ふ様おろして取るかよい

(2)と(3)の場合は全く有機物ばかり故之には新にいよゝ田の土四割を加へねばならぬ

以上で培養原土が出来たこの培養原土拾貫につき米糠凡そ一升藁灰一斗を混じ之に人糞尿少々を打つて醗酵させる。此時期は十二月頃に積み立て毎月一回積みかへると三ヶ月位して立派なる培養土が出来る。之が養菊の基礎となる大切の土である。その土が出来たならそれに菊を植ゑてよいかといふとまた〳〵それに植ゑてはならぬ唯基礎的の土が出来たばかりである之に菊を植ゑるには第一砂を混じ輕鬆にしてさら〳〵したる土として排水をよくする様にせねばならぬ、第二にはこの土を消毒して蚯蚓の仔蟲やこがね虫の幼虫等の動物並に各種の病菌の殺滅を期さねばならぬ。

砂を混するは如何にせばよきかといふに花崗岩より成る柔きものなれば一番よいかそれがなくては片麻岩の碎粒の如き堅きものでも苦しからずそれならどんな砂でもよいかといふになか〳〵然らず先づ川の砂のある處に行き一分五厘目の篩で之を篩し上の分を

捨て下におりた分を再び五厘目の篩にかけ上に止りし砂を取り之を腐植土に混するのである。即五厘以上一分五厘以下の篩に通りし砂である。この砂を前述の製造した土に三割乃至五割を混する。五割といへは少し砂が多すぎるでないかといふに、しからず曩に田の土を混した時あの田の土の性質によりて三割乃至五割と決定するのである。田の土が粘土質でどうも三割では排水をせぬ（排水とは鉢に注ぎし水か見て居る時にジューンと吸込んで仕舞ふ程度である、之が十分も八分もして水が下へ吸ひこまぬのは排水不良なるのである）といふ場合には五割まで混してよろしい。次に病菌消毒害虫の仔卵殺滅は如何にするかといふに之は普通右の腐葉土を砂に混ぜぬ前に天氣のよい日、日光にさらして乾燥するのである。乾き切れは黴菌も仔卵も死滅する。薬品消毒の方法あり之は註の處に説かう。

以上の如くして出来たものか完全なる培養土である、之を貯へ置き我が鉢植培養に使用するのである。

因にいふ菊は連作を好まぬ故一度使用せし鉢土は再び使用する事は絶対に出来ぬと

いふ人もあるが決してそうでない。

菊が土壤の養分を吸収して成育すると菊の根より分泌したるある酸が土壤の中に残つて居るのである、だから翌年その土壤に菊を作ると土壤は何も害はなさぬがその酸が菊に害を興へる人間か一室の中に閉ち籠つて鼻より炭酸瓦斯を吐いて居ると、その室内の空気を入れかへぬと、人はその炭酸瓦斯で中毒を起すと同じ理合である、だからその酸を中和する爲めに藁灰を土十貫に付一升位を入れるとそれで中和される、之に米糠腐植質のもの前年通り混じて人糞尿を打つて前述の如く三ヶ月位積み置けば又新しき培養土に更新されるのである、そして同じ土で何年でも繰返し、培養出来るのである、但し日光に逢はして乾燥消毒は、毎年忘れてはならぬ、藁灰の代に石灰を使用しても同じ理であるが、養菊の大家は皆藁灰を使用して居る。

園 1、培養土の薬品消毒

第一、石灰室素による消毒 石灰室素は培養土二斗につき約五勺位の割合で培養土を使用する十日位前

第七章 鉢の中に入れる土はごんなのが良いか

鉢の中に入れる土はどんなのが良いか

六

に培養土に少しきり吹で濕氣を與へ石灰窒素を十倍位の土に混じ培養土に撒布し平等に行き渡る様にかき混ぜてやる一週間の内に仔卵も病菌も死滅して安全且つ石灰窒素より發散せるアンモニヤは培養土に吸収されて肥料の助けとなり一舉兩得である。

第二、セメサンによる消毒

セメサンは近來消毒薬として其價值を大に認められ種子の消毒殺菌、培養

土の消毒殺菌に用ゐる其有効成分は水銀誘導體にしてその効用頗る峻烈菊花の培養土消毒には菊を植込む一週間前にセメサン粉末一匁を水一升に溶かしたるもの土壺斗につき割合で極細き如露又は文化ボンブ(第十章ヲ見ヨ)にて土をかきまぜつゝ吹きかけ數回かきまぜ充分行渡れるを見て之を積み重ね覆をなし一週間位置く培養土中の有毒細菌は之で全滅する。

第八章

菊の苗はいかにして作くるか

菊の苗は一輪咲三輪咲は挿木にして作るのかよい、菊の芽の挿し方は如何にしてさしたのがよいかといふと、いろ／＼變つた方法もあらうが、試験の結果一番よいのは玉さしである、玉さしといふのは赤土を山より取つて來て、之を碎いて粉となし、一分目の篩に通し、固塊なきものとし、之に水を混して丁度團子位の固さにねり、

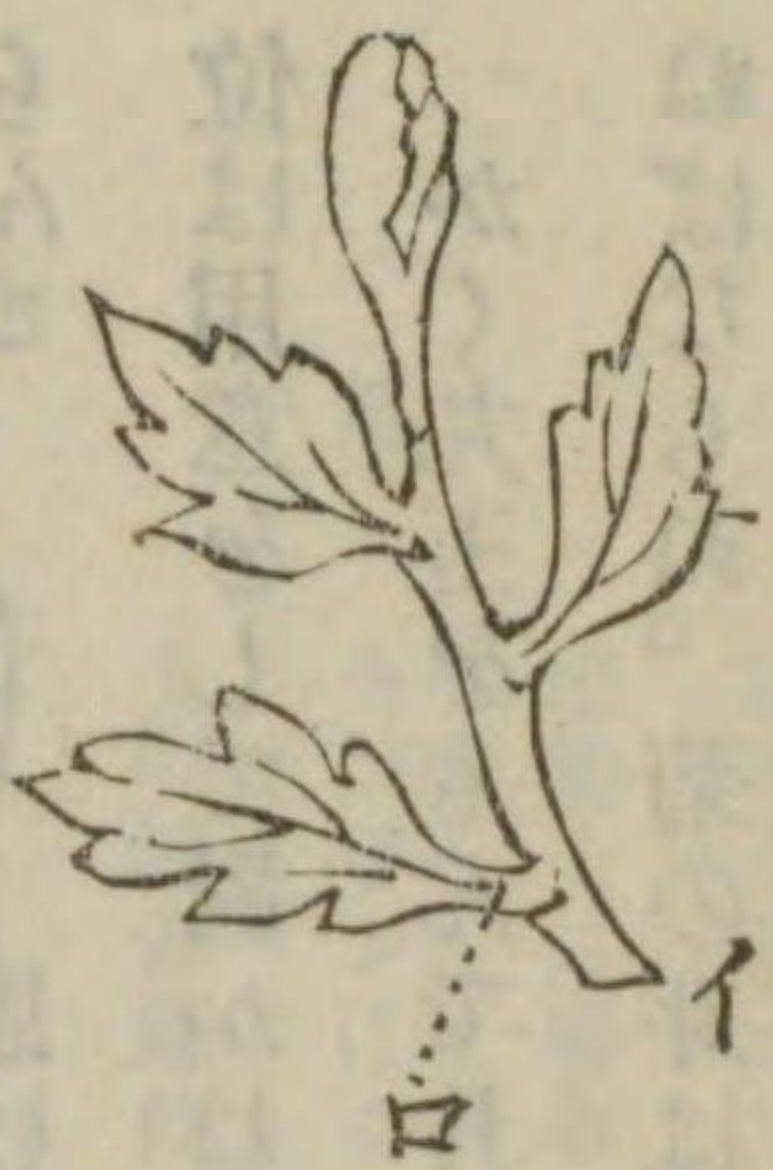
實物大



位の鐵砲の玉の如き丸玉を手の掌に入れて、もんで作くる、この玉は分の作らんとする苗の數だけ作るのである。例へば今年は五十鉢作らんと

思はゞ菊苗はわるいものを淘汰せねばならぬから、少なくとも、七十本位は用意をして置かねばならぬ。そうするところの丸玉も七十個もんで作くるのである。

かく丸玉をもんで片方へ置くとき全時に菊の芽を開いて居る葉三枚をつけて其下を取らぬばならぬ。菊の芽は發芽して居る菊の親木の先きを約二寸位の長さによく切れる剪刀で少し斜にかけて切る。(イの様) (葉の莖について居る節の直ぐ下を切るのです、そ



うせぬと根か出にくい、そして一番下の葉(ロ)を葉柄の莖について居る處より三分位はなれたる處で切り去つて仕舞ふのである之が將來美花を備ける
 大切なる挿し芽である。挿芽の用意が出来たら、かゝる用意の
 赤土の團子にその真中を見かけて左圖の様につつ込のであるを
 の尖は丁度團子の中心で止まる
 を程度とする。



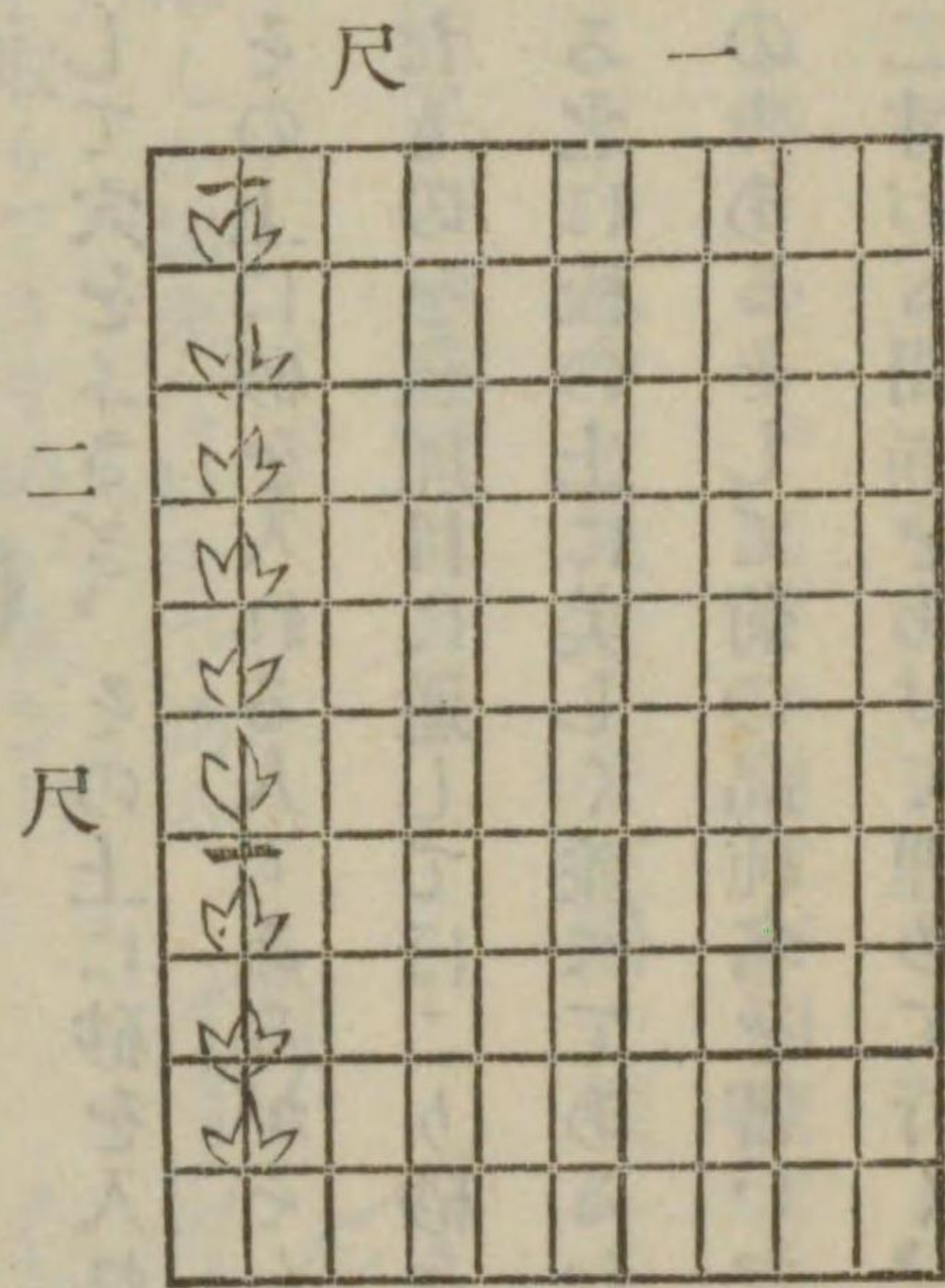
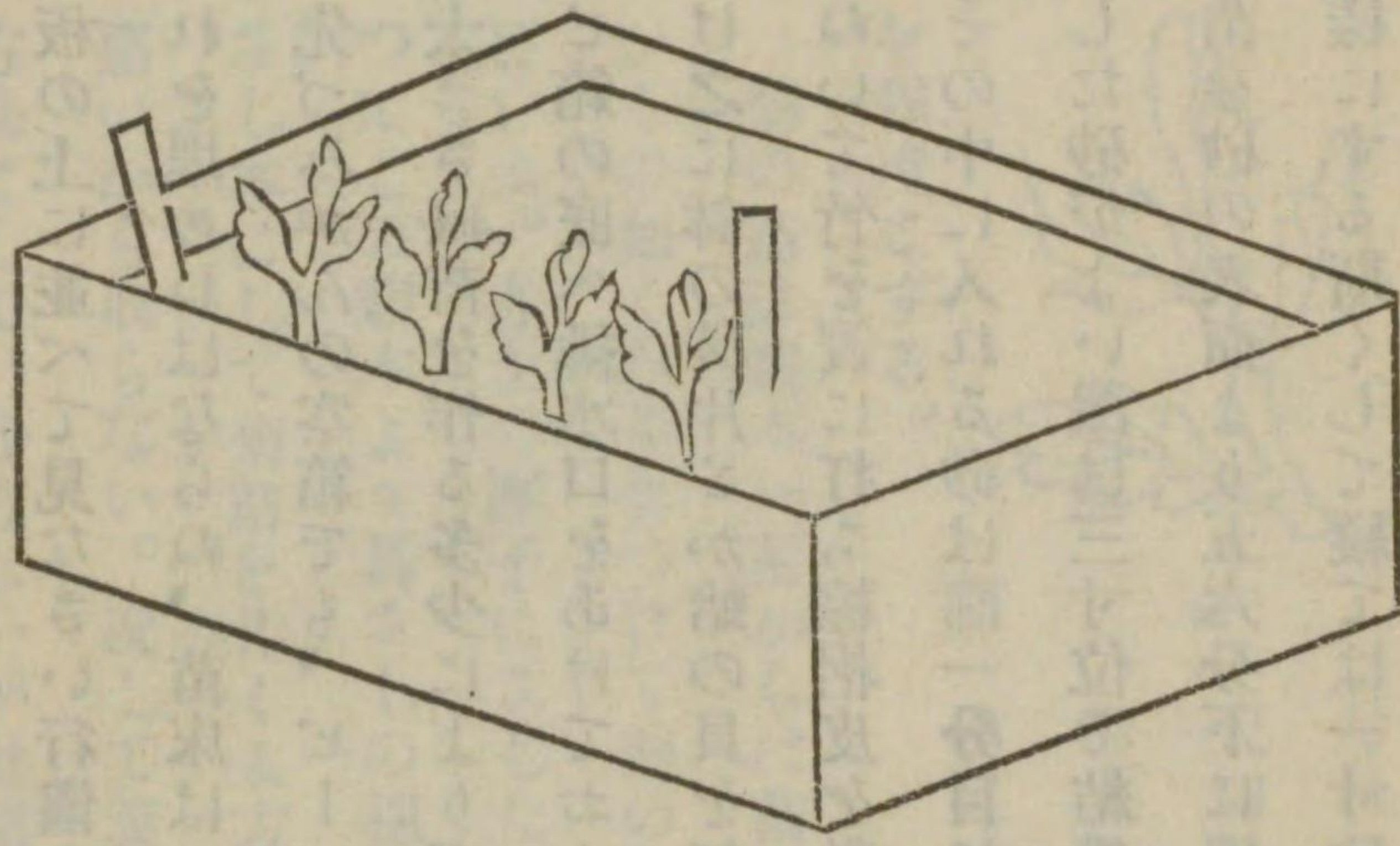
菊の苗は親木一莖からは苗は一本しか出来ないのである
 かくの如く心芽をつけて菊のさきを取りてさすのが眞さし
 といふ。赤土の團子にさしたから之を眞さしの玉さしといふのである。外に莖さしとい
 つてこの親木より眞さしの穂を取つた後の莖を二寸位に三葉つけて切り取り下葉を除き
 さし木にして菊苗を作る方法もあるが我が大菊を培養して大輪の花をかすには成績
 悪いから取らない。況して葉さしの如きも品種を取りて保存するといふには、己を得ぬ
 方法として、仕方ないが鉢植培養の花を目的とする栽培には勿論取らないのである。

右圖の如く團子に挿した芽は恰も子供の正月につく羽子板のむくの様でしよう、之を
 板の上に並べて見なさい行儀よくすはりほんごに心持がよい準備が出来たらは苗床にそ
 れを埋めねはならぬ、苗床はフレームなら一番よいが普通の家ではそれは望めないから
 先づみかんの空箱でも、ビールの空箱でも、何でもよい、深さ四寸位の箱ならばよい。
 太さは苗を作る多少によりて適當にせばよい、唯必要なるは深さが四寸位といふ條件
 と箱の底へ排水口をあけておくといふ事だ丸錐で○位の穴を二寸四方に一つ位づゝあ
 け之に鉢の破片とか蛤の貝を打伏にして穴をふさぎ、その上に砂を入れる。又箱の底を
 ぬいて竹を簀に打ち棕櫚皮を敷いてその上に砂を入れる人もあるがそんな面倒はいらぬ
 その中に入れる砂は篩一分目に通したものを三厘目に通してほこり砂を除いたさらりと
 した砂がよい深は三寸位で結構である之に板の上に美しく並べてあるむくの如き玉さし
 苗を砂の表面より五六分下に埋めるのであるそして菊の品種名を書いた名札を間違はぬ
 様にする斯くして縦ては一寸位横は二寸づゝ間隔をあけて埋めて行く、そうすると幅一
 尺に長さ二尺の箱一つの中には間隔を置きて左圖の如く埋めて行く幅一尺長さ二尺の箱

菊の苗はいかにして作るか

の中には八十一本の苗が育つて行く割合となるのである。

六



名札は長サ五寸位の檜製であれば上等だかなくは附け木でも、折箱の割りたのでも何でもよい、又苗箱は深さ四寸故四寸より深き箱は上方を鋸で切り除ければならぬ、餘り深いと排水悪く苗腐ります。

砂の中に丸玉を埋めて水を如露てたつぷりと一回かけてやる。そしてよし簀にて覆ふよし簀なければ薄き菰でもよい約二十日間位夜は除いて日中その覆をしてやらねはならぬ。

ぬ。水は毎日夕に一回かけてやること、併し水が餘り過ぎると、腐つて仕舞ふから、毎日よく見て、鉢の表面が白く、乾いた時はもう水をやる時期だから、如露でやらねばならぬ。まだジク／＼濕りて居るに水をやり又水をやると大抵は腐つて仕舞ふから少し乾き氣分がよい。そうすると發根も早くする。發根は品種によりて遅速がある九曜の瀧の如きはなか／＼發根せぬある書には一週間位すると揃つて發根するとかいてあるは嘘である早いものは一週間、おそいのは二十一二日もかゝる、だから先づ三週間位すれば根が大抵揃ふものと見てよい特別のおそいのは、別扱にせねはならぬ。

砂に埋めて二十日位して砂より苗を出して御覽なさい。

【良 苗】

實に上圖の如く丸玉の周圍へ放射的に無數の細根が簇出して居るのを見るの愉快さ。

之で良苗は出来たのである次は移植の問題だ之の砂を落さすその細根の根毛を傷めぬ様に大事とかゝへてホーク又手にて之を支へて上圖の形を崩さぬ様に取り、四寸鉢に培



菊の苗はいかにして作くるか

六

養土を入れて假植をするのである。

其植え方は第十章「菊の植方は如何にせばよきか」で委しく説明することではそれより前に知つて置かねばならぬ必要のことかあるがそれを之から説く。一寸待つて下さい。

菊苗のさし方は前述の通り委しくかいたからよく御合點のこと、信ず次に知らねばならぬ必要の事は此さす時期即何月何日頃にさせばよいかといふ事である、之は一輪咲と三輪咲とで時期が違ふ又菊の幹は長幹、中幹、短幹との差によりて時期を異にする、短幹は延びるのが遅いから早くさす、ねはならず長幹は延び過ぎるからおそくさす、ねはならぬ。それから一輪咲は一輪しかかさぬ故早く挿すと徒長してころ合の長さにならぬ。かといつて餘りおそくさすと、一寸法師となり又花の咲かぬ様なことも出来るし、三輪咲は一輪咲に比して幹の勢力を三分せねばならぬから、早くさして之に適する様に苗を仕立てねばならぬ、以上の理由によりて

一輪咲仕立の挿し芽の時期は

長幹は 六 月 中 旬

中幹は 六 月 上 旬

短幹は 五 月 下 旬

三輪咲は

長幹は 五 月 下 旬

中幹は 五 月 中 旬

短幹は 五 月 上 旬

附 け て い ふ

(1)折角フレーム又箱の中に砂を入れて挿床を作り立派にさして居つても一夜でそれを覆されて腹が立ち仕方のない事がある、それは猫の害である、あの可愛い猫か砂を入れた挿床が出来ると、糞尿排泄の便所を自分の爲めに作つてくれた様に考へ、搔て／＼かさ倒してその後へ失敬する、美しくさした菊の玉さし苗は落花狼藉といふ有様、況んや猫糞尿それ自身も菊には大毒であるから猫が近かつかぬ様に注意せねばならぬ

菊の苗はいかにして作るか

六

(2) さし方に玉挿以外に砂の中に直にさす眞さしや、莖さしや、又てこさしや葉さしなどがあり床は露地の眞土にそのまま設け之に挿し藁を切りて上に掛ける方法なごあれども此方法の成績が一番よるから迷はぬ様に願ふ。

(3) さす時刻は朝がよいか夕がよいか晴天がよいか、雨天がよいかといふことを試めして見たのに一番よい時刻は午前午後を問はず雨の降るときさし芽を切り取り、家の中で操作をして、苗床にさいたのが一番よい、次に曇天、晴天の時は夕方方がよい様である。さし芽切り取るや直に清水につけ萎れぬ様にしてそれを玉さしにして苗床に埋めたらよいといふ人があるが丁度雨天の時にさすのと同じ理なれば可ならんと思ふ。但し玉さしの團子に水のしづく着し故吸取紙にてしづくを取りてさせはよろしと思ふ。

玉挿につきて、或人曰く僕は玉挿にして皆枯れた玉挿は悪いと實際を聞いて見るに直径七分位の大きなのを作くりてやつたさうだそのやり方あしくして罪を玉挿に歸する罪深し元來玉さしは西洋園藝挿し木の秘法にて苟くも園藝界へ身を入れて居らるゝ方は百も御承知のこゝ之を菊に利用したまでである。

は比較的よいのである。

さし芽の心を止める法 本書はさしめの心を切りてさすことをせず前述の通りにしたが人によるさし芽の心を止め即前述の場合は二枚葉のみを残して心を切り去りさすのである之も一つの方法であると思ふ。

石灰窒素販賣所 (昭和三年二月調) 一袋十三貫入五四十五錢ノ割)

輸入元 東京市丸の内三菱商事株式會社

關東特約店 東京市京橋區南新堀一七森六商店

關西特約店 川口平三郎商店神戸市兵庫宮内町森六神戸支店

セメサン販賣所 (一瓶十五匁入壹圓九拾錢)

大阪市西區北堀江通四丁目七番地 大日本農業藥品社

第九章 菊の肥料は如何なるものがよろしきか

菊に肥料を施すことに就きて先づ第一に考へらるゝことは如何なる種類の肥料が適當であるか、第二にはその分量は如何程やればよきかといふことである。第三には均しく菊であるが、ある菊は肥料を多く食ふといふ貪食家もあればある菊は肥料は割合に好まぬといふ遠慮家もある。吾々人間に卵や牛乳を大變好んで呑んだり食つたりする人がある反面に卵や牛乳を口の側へもつていつても好かぬ、その香を嗅げはむかづくといふ人もある。菊もその通りいろ／＼個性のあることを知らねばならぬ。

少し理屈強くなりませんが近來何事でも科學の教へることによりてやらねばならぬのである。その科學を菊の肥料の處へ一寸御案内申すと、一體肥料の成分といふのは窒素、磷酸加里の三つになつて居る。申すまでも窒素は葉肥といつて主として葉を繁茂せしめる成分で、磷酸は實肥といつて主として花や實を豊艶充實せしめる成分で。加里は根肥といつて主として根を膨脹肥滿簇出せしむる成分である。そこで體菜とか白菜とかいふ葉

を取る目的のものには窒素を多く含んで居る人糞尿とか硫酸アモンニアとかいふ様のものをやり、大根とか人蔘とかいふ根を取る目的のものには加里を多く含んで居る藁灰、木炭の如き灰類をやり、稻とか麥とかいふ様に實を取る目的のものには磷酸を含んで居る過磷酸石灰とか米糠とかいふ様のものを多くやります。そうなるに吾々は肥料をやる前に考へねばならぬことは、何を取るのかの目的です。花か實か葉か將た根か莖かといふことです。その作り取る目的か明になれば、前述のことによりて、肥料は實肥か、葉肥か根肥かといふこの裁量もつくでせう。尙一步ふみこんでその作物の正體を知ることです。正體とはどんなことかご申すと例へばこゝに稻があるとしませう、その稻の正體即稻の中には窒素や磷酸や加里が何程つゝ含んで居るかといふ成分を知ることです。その成分が明かになると、肥料を施しても、やり過もせねば、やり不足もせぬことになつて、食滯病や消化不良や榮養不良に陥らず、又過ぎると雨水に大切の肥料を流ししまつたりする不經濟もなしになる。そこで作物は稻をはじめ大抵のものは成分分拆といふものが出来て居る。少し農業に志ある人は誰でも知つて居るが筆者はそんなものまでこゝにか

つぎ出しはせぬ。若し今より始めて農業に志す方は農業の書籍の肥料や栽培法を書いてある本を見れば大抵のものに入つて居る。もし見當らなければ村の農會の技手さんに教へを乞へは親切に教へて下さる。さてその分拆の結果を總合すると凡ての植物には肥料として窒素が五割、リン酸が三割、加里が二割位必要となつて居る之は實に粗い總合で、稲にしては麥にしろその種類により又全じ稲でも神力じや、關取じや、雄町じやといふ様の品種によりそれ／＼個性によりて相異なるは勿論である。

園 左に作物分拆の成分五六例をかゝげる(一反歩につきての所要量)

	窒素	リン酸	加里
稻	二貫	一、五百	一
麥	一、八百	一、五百	一、四百
煙草	三	一、五百	二
蘭	七	三	二
茄子	五	二	三

悲哉吾が菊にはこんな所要量の科學的分拆が出来て居らぬ、諸君見た人あるまい、あ

れば筆者に知らせ賜へ。

園 筆者は苟くもこの國華菊の分拆なきは我園藝界の恥辱換言すれば園藝試驗場の恥と存じ國立興津園藝試驗場へ公文で依頼したが相手にしてくれぬ、その不親切に吃驚した、こんな事故日本の園藝は發達せぬのじや折角こつちによい思付あつても相手にせぬ、筆者が代議士などであれば議會で問題にする。そこで筆者は此度は同じ國立西が原農事試驗場へ依頼した流石は西が原様じや當方にもその志があつた。よい處に氣付じや、急いで間に合はぬが分拆してやる材料を送れと筆者は殺す神もあれば助ける神もあるとて大よるこひで材料數貫を送つた之で日本に始めて菊の分拆が責任ある公署に出来る出來次第發表するであらう

右様の關係で菊には分拆がないから只今皆えらそうにいつて居るのはお互に暗中摸索の一人天狗である。つまり今の處そんな都合で基礎のしつかりしたものをつ捉へることが出來ぬ。いづれも自己の經驗によりて此位と定めたものだ。それを筆者が總合して見ると窒素五、リン酸三、加里二の割合となる京都の藝菊家木村太一郎氏は昨年筆者との問答に自分は秘傳として窒素五、リン酸三、加里三をやつて居ると公開してくれた、筆者も本年それを實驗して見る。諸君もやつて見賜へ。

菊の肥料は如何なるものがよろしきか

七

併し今までは前述の通り5、3、2である以下述たる各種肥料調合法は大体皆この割合になつて居るのである。

註 筆者の目下草しつつある菊論にはこの肥料の問題をウント深くかくつもり澤山實驗もして居るが、こゝには一筋に最善の方法をたごるのみ。

菊の成分と肥料との關係は以上で畧お分りでせう次に菊の個性によりて施量の分量があることを説きませう。例へば金鶏の司といふ菊は肥料が極めて少なき分量でなくては出來が悪い。かと思ふと八重霞とかターナー種とかいふ菊になると普通の菊の二倍位やらぬと、よい花がつかぬ。惣じて厚物種は肥料を多く要し厚物走り、大掴み咲、太管間管之につき一文字、細管は肥料が少なくてよいのである。併し全じ細管の中でも前述の金鶏司が少量でよいに比し、結ぶ玉章は肥料を大く喰ふといふ特例もある。結局菊の個性に通するといふ事が必要である。この個性に通するのは研究的態度で永年菊を作り經驗することであるが東京重陽會員となれば毎年東京より好みの菊苗十種づゝくれて立派な會報を一冊づゝくれるその會報の中に會員多數が研究したる施量の分量の多少を菊



の個性によりて、一々菊の名の下に揚げてくれてある。初學者は大變便利であると思ふ

第三章 大菊の種類中に東京重陽會の最近菊花銘鑑の内より百餘種抄録して置いたは己に御承知の事と存す。斯の如く肥料の問題も頭をつきこんで行くと六ヶ敷事が段々あることを御承知下さい、それでこの筆を冒頭の問題、そんな肥料が菊によろしいかといふ一般的菊の肥料について筆をかへしてきませう。

菊の肥料はいろいろあるが普通菊作間で輿論がきまつて居るのは油糟と干鰯と米糠と過燐酸石灰と硫酸アンモニアと藁灰の六つ位にかざられて居る之に人糞尿を加へて七つとする。

油糟は菊の花葉の光澤をよくし花の豊大のものをつけさし、菊の肥として實に理想的のものとして居る。干鰯即にしんかすは花葉の元氣をつけ色澤を立派にし品格をあげ且つ優雅端麗の花を着けさすものとされて、油かすと併用され、その效伯仲の間にあるとされてある。米糠と過燐酸石灰とは幹木を強健にし、雄大の花を咲かすとされてある、硫酸アンモニア人糞尿は葉を美しく成長を早からしむる肥料とされて苗の成長の

菊の肥料は如何なるものがよろしきか

六

遅くれ居るものには之を施し驅足で進行成長せしむるに使用されて居る。藁灰は又菊栽培家の逸してならぬ肥料兼殺菌劑中和劑でなくてはならぬものとされてある。その他豆粕馬糞等をはじめいろいろ肥は澤山あるが何のかの心配はいらぬ以上の肥料を以下述ぶる方法によりてやれば菊の花は立派に咲く。心配無用あせる事勿れ。

さて前述の肥料をどんなにして菊に施すかといふにそのまま施してはならぬ之には二つの加工を施してなくてはならぬその一つは乾燥肥料といつて前述の肥料を窒素、燐酸、加里の所要量だけの割合に調合して之を腐さらして乾燥し貯へ置き所定の分量だけ一輪咲一鉢にはいつく何合の肥料をやるとか、三輪咲一鉢にはどれだけやるとか、ちやんときめてあるだけやればよいのである。乾燥肥料は貯藏し易く清潔で便利で菊作の大部分は之を使用して居る。今一つは液肥といつて油糟、干鰯などを水にとき腐らし使用するもので之を菊作りは一割肥といつて重寶がつて居るのである。この肥は主として菊の幼少なる時に使用されて居り又それはかりて培養しぬく人もある。今乾燥肥料並に一割肥の作り方を左にかゝげよう。

第一 乾燥肥料の製り方

油	粕	八	升
米	糠	二	升
藁	灰	二	升
田	の土	一	斗

又

干	練	七	升
米	糠	三	升
藁	灰	二	升
田	の土	一	斗

右いづれにてもよろしい前掲の分量の割合に混合し之に少ししめる氣味位の水を細目の如露又文化ポンプで加へて又かさませ箱の中に入れ置くと醗酵して二週間位立てば醗

醇熱を起しその爲めにさきに入れた水は蒸發してからくゝとなる之に又少しく前同様にして水を加へて混和して置くともう一月ケ位すると、からくゝの乾燥肥料となつて出來上るのである。之をそのまゝ貯へて置き施肥するのである。この施肥の分量は本植後三輪咲一鉢尺鉢につき普通二合と標準として厚物類には四合までをやる細管には一合に止めて第三章大菊の種類の處に重陽會々報中の銘鑑抄録の處に施肥量を定めてある最大といふのは四合を意味し大は三合中は二合小は一合最小は七勺位と註せしはこゝのことである。一輪咲【八寸鉢】の施肥量は本植後三輪咲の七割位の分量でよい

第二 液肥即一割肥の製り方

油	又	干	鍊	一	升
水				五	升

右大瓶の中に水五升を入れ之に油かす又ほしかは干鯛一升を入れ攪拌して蓋をなし毎日一回づゝ攪拌して一ヶ月位すると完全なる液肥が出來るのである。之を使用する際は十倍の水を混じてやる。よくいふ毎日水の代りにこの肥をかけて他の乾燥肥料をつかはぬ方法もあるが筆者は之は臭いのと汚たないのと手間がかかるので取つて居らぬ。只假

植の際即苗の幼少の際一週間に一度位づゝかけてやると大變よろしいのである。

之で肥料は出來たのである前掲の七肥料の内過磷酸石灰はそのまゝ止肥の時に一鉢につき三輪咲は一にぎりやる一輪咲はその七割、硫酸アンモニアは苗の成長の遅れた時にやる。その分量は硫酸アンモニアを茶匙に一パイを水一升に解く、之を小杓に一パイ一鉢にやる。土用後には硫酸アンモニアはやつてはならぬ。

「人糞尿は鉢植にはごうも嗅くて習慣上吾々きたなくて仕方がない。効能のあるのは間違ない支那の藝菊は何千年の前己に楚の屈平時代から發達して居るがその肥料は糞と尿とが主である筆者は露地作りには之を主として使用するが鉢植はごうもお粗末で使ふ氣になれぬ。養菊の秘傳として筆者が某大家より牛若丸が鞍馬山の僧正坊より巻物を戴く氣持で曾て致へて貰つたのはこの人糞尿を腐らしたものを一度釜で煮て冷したものを水に溶して施ることであつた御教示を蒙りて今日までどうもその釜が惜しので今日實行して居らぬ。そうで人糞尿は先づ糞壺にいれて一ヶ月以上置くと固形物は一切腐りて液体

となる故その液となりしものに苗の時は五倍の水成長したものには二三倍の水を加へて鉢の緑と菊の葉にかゝらぬ様に落つて根元に施るこよいだらう。」

以上で肥料は出来たのである之から施肥の時期を述べよう一寸こゝで一言致したいと申すはこの施肥につき油糟ばかりを使用して居らるゝ方が随分多いと思ふが、筆者は油糟、干鰯、過燐酸石灰の混用論者で且ツその實驗者である。吾々人間でも毎日の食事に牛肉なれば牛肉を一ケ年食ふといつた處ですぐ飽きが來て却つて大變の苦しみである。それよりも今日は牛肉明日は鯛明後日は豆腐に葱といふ調子に變つたものがよい、菊じやとて生物だ、全じお菜よりは變つたものがよい、それが自然だらうと思ふ。そこで油粕單用よりは油糟、干鰯、米糠等混用の方がよい。本書の乾燥肥料はその積りで計畫してある。そこでこの乾燥肥料は大体三回に分ちてやる（但し二合を標準として述べる菊の個性によりこの割に加減すること）

第一回 假植の小鉢より本植の大鉢に移した時

一合（油粕を主としたもの）

第二回 本植後二十日位して

五 勺（干鰯を主としたもの）

第三回 止め肥一名花肥として發蕾前即ちまた蕾の見ぬ時（九月上旬）

五 勺（干鰯半分、過燐酸石灰半分）

元來素人の陥る弊は何でも人の知らぬ間に變つた肥料を澤山やつて、立派に花を咲かし天狗して見ようといふ本能を發現することである。それだから矢鱈に肥料をやる、一方、菊になつて見ると何んば御馳走の肥料だからといつて、そう頭からも足からも矢鱈に食はされては、堪へられたものでない、消化不良、食滯病を起し、遂に立派に咲く花も咲かずに終る事が段々あるのである。そんな近慾の事を考へずに落付いて一面先輩經驗者の意見に耳を傾け又菊そのものゝ個性をよく觀察して程よく加減しなくてはならぬ。試行錯誤も熟達の一步だがそれ斗りては餘りによい花を咲かすことが晚い。

菊の肥料のきいて來た時は葉の色がつかつかしく黒味を帯びてくる。肥料が過ぎると葉が硬化してバツチリ／＼と折らば折れる様になつて來る。又肥料の不足を生じたる時

菊の肥料は如何なるものがよきか

八三

は葉に光澤少なく黄味を帯び、何となく瘦せて淋しい感じに打たれる、定めてある量の通り肥料をやつても氣候の寒暖早雨乾濕等いろいろの關係で肥料が土の中に保存せられ流たりして思ふ様にきいてこぬ場合もあるが、かかる場合は補肥として一割肥を三日に一度位施してよい。厚物類などの如く肥料を好む菊は少々過ぎても心配はない、唯細管ものには氣をつけてやり過ぎぬ様にせぬと、良い花は咲かないのである。いくら肥料をやる氣でも九月十日以後にはやらぬ様にせねばならぬこの禁を犯してやれば、菊は首の長い徒長になつて花期がうんと後れてよい花を見ることは出来ぬ。

● 肥料に就きて前掲の肥料の重量各壹升ニツキ米糖二百十匁油粕二百五十匁、干鯛二百匁、過磷酸石灰三百八十匁、糞灰八十匁である、そして現今の時價を調査するに油糟粉末上々十六匁入一呎六圓五拾錢、干鯛粉末十二匁入一呎六圓參拾錢、硫酸アンモニア拾匁入一袋五圓貳拾錢過磷酸石灰拾匁入一呎壹圓貳拾錢米糖拾匁壹圓貳拾錢糞灰はごこにでも糞をやけば出来るから省く之で換算すれば一切の算用が出来ませう。

第十章 菊の植は方にせよきか

菊の苗を苗床からあげて花を咲かすまでには二度植へ替へねばならぬ。第一度目は假植として菊苗をかりの鉢に植え込むのである。その目的は幹を充實健強にし根を充分に張らして將來立派なる花をつけさせ準備をなすのである。丁度子供を教育して將來成人となりて差支のない様に充分なる準備をさすのと全じ事である。だから假植は人間でいへば少年時代の充實した教育の様なものである。次にその假植の期間を通過すると次には第二度目の植替即ち本植を爲すのである本植は人間でいへば子供の時期を過ぎて獨立して一人前の所帯を持つたのと全じわけである。この二度の植方は菊の幹の長中短により花の着け方の多少によりて時期がそれ／＼違ふのである大体左の標準によれば間違ひない。

一。輪・咲

假植の時期

本植の時期

菊の植は方はいかにせばよきか

八

長 幹 七月上旬

八月上旬

中 幹 六月中下旬

八月上旬

短 幹 六月中旬

七月下旬

三・輪・咲

假植の時期

本植の時期

長 幹 六月中旬

七月下旬

中 幹 六月上旬

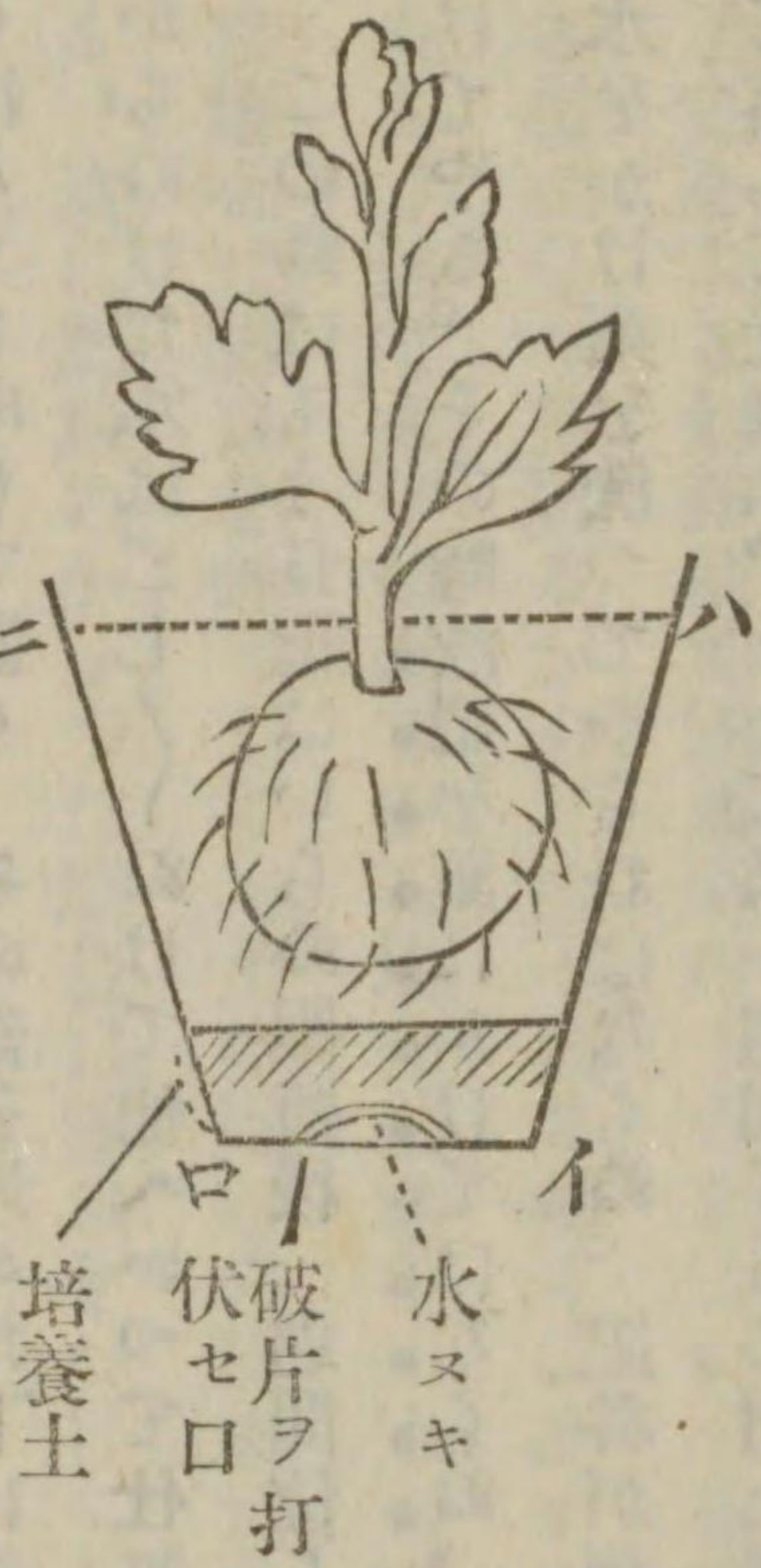
七月中旬

短 幹 五月下旬

七月中旬

假植の仕方【第八章で苗を作りてある。あそこから漸く話は外へそれて居つたがこゝへつゞくのである】菊苗は玉さし苗で苗床から手にて掬ひあげると根が四方に放射して實にうれしい感に打たれる之を四寸鉢へ假植するのである之培養土とする四寸の素焼鉢の底には排水口が貫けてある、この口に素焼鉢の破片を俯伏せにして伏せ、之にかねて作り置き培養土を底へ一寸位入れその上に苗床掬ひあげて来た菊苗を毛根の傷まぬ様氣

をつけて、左の手に菊苗を持ち、右の手にて培養土をその両側に、そろ／＼と入れ、ニ



まで達せしめ、両手の拇指と食指とで一吋と軽く抑へて（餘りさつく抑へてはならぬ）上土を並らし再び両手にて鉢を持ち、土地の上でポント軽く打つて土の落合をつけるのである。このポ

ント軽く打つのが老巧の方は頗る要領を得たもので、之で菊苗がその床に安心して心配なしに落付くといふことである。このポントやるのが下手であると菊の落付がわるく繁茂に關係するといはれて居るから、味よくやらねはならぬ。その落付は圖の様の調子にやるのである。そして此度は一鉢毎に菊の名稱を記載したる札を建てることを、忘れてはならぬ。名札は檜製のもの、セルロイド製のもの、亜鉛製のものいろ／＼種類がある長さは二寸、三寸、四寸、五寸、六寸とて又形もいろ／＼風の變つたのを作つて普通相當大きな種苗店にはどこにでも賣つて居る、勿論自宅にて作つてよいが、多數の鉢を作

くる場合には買った方が安くつく。札に文字を書くのはインキは勿論わるい鉛筆も三ヶ月もすれば剥げる、それに鉛筆の文字は貧弱だから、矢張日本式の純粹の墨を摺り、毛筆で書いたのがよい。

かく四寸鉢に假植したる菊はフレームの中に砂を入れこの中に鉢を七分目位に生け埋めをするこ一番よろしいが、フレームのない處は露地でもよい日あたりのよい、しかも排水のよい地を選びそこへ七分方生け埋めにして毎日夕方一度づゝ水をやるのであるくれ／＼も申して置く、その鉢を埋めた下に鉢の水がたまる様の處は絶対にわるい、鉢からぬけた水はごし／＼ぬけて他へいつて仕舞ふ様の土地でなくてはならぬ。

この時はもう日覆はいらぬ假植後一週間位して液肥の一割肥を夕方水の代りに一度かけてやる。その時液肥を葉にかけてはならぬ、若しも過つて葉にかつた場合は如露で水をかけ葉を洗つてやらねばならぬ。肥料が葉にかゝりそのまゝ捨て置けば葉が黄變して落ちて仕舞ふ、そして又一週間すると同じ様に一割肥をかけてやる、斯の如く毎週一度やるのである(三日に一度位でもよい)菊に水や液肥をやるのは完全なる如露がよい、

普通市場に賣つて居る安ものゝ如露は霧の穴が太くて疎である、あんなものは却つて悪い、完全なる如露は英國製のものが多い、霧の目が細く密にして且霧口の取外しが出来る様になつて居るから、恰も霧の如くに水が吹出す、又取外すると直に出るから便利である、鉢に水を如露でやる場合は鉢の上土の固らぬ場合は霧口をつけてやり、もう固つた場合は霧口を外づして上土が掘れぬ様斜に向け手指を水口にあて水の勢を加減してやる、葉に肥料のかゝつた場合は霧口をつけてきりて葉の肥を洗ひ落すのである。

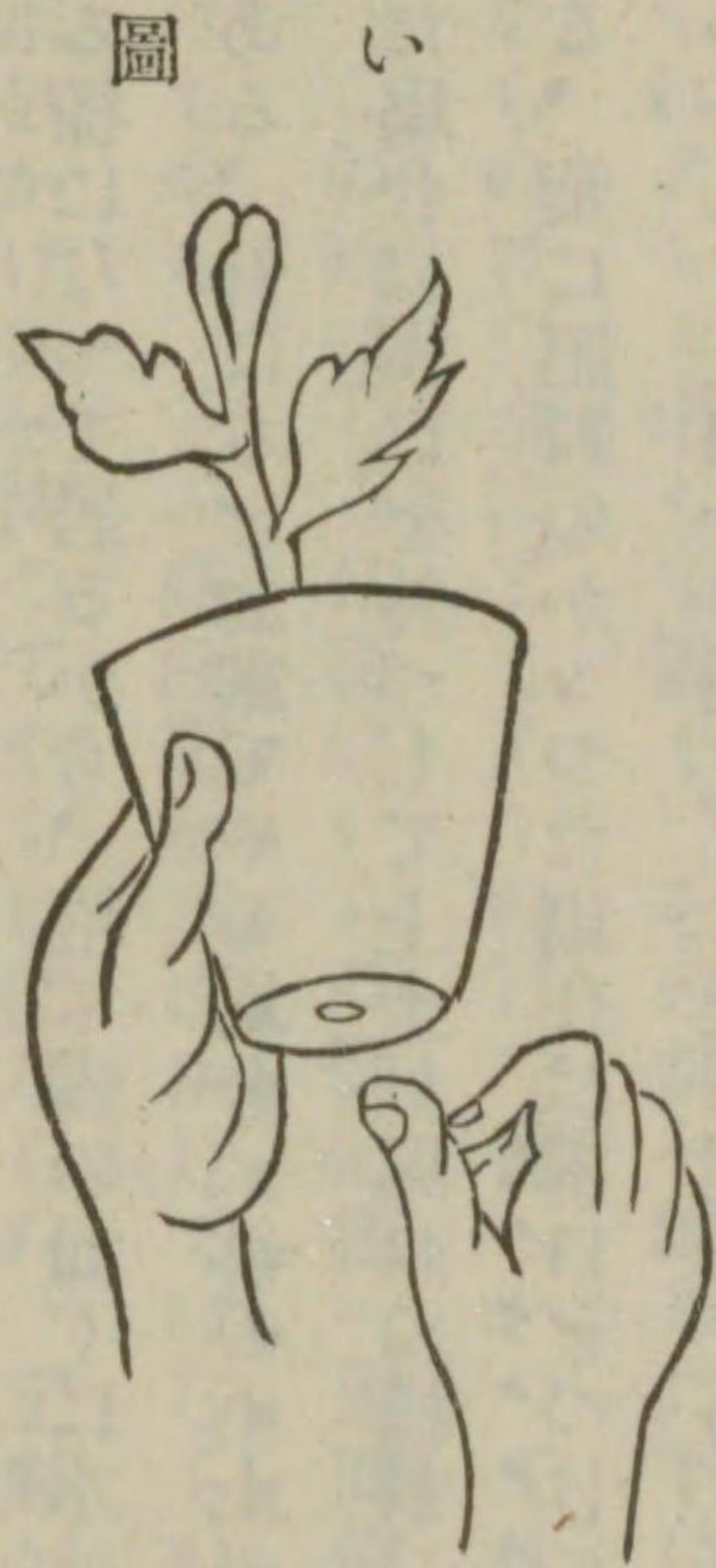
かくして三四十日過ぎるご土に埋めてある鉢をぬき、手に取りて見ると鉢の底の穴へ上の方から白い根が出て来て居る之が素焼の四寸鉢に菊の根の廻はつて自然に植替を要求して居るのである、之から本植を爲すのである。

■ 前述の通り下へ毛鬚根が廻りることが全部揃つて、鉢の下の穴へ根が出てくるのが理想だが、實際出てこぬ場合がある、之は發育が何かの原因で障がられて居るのである、それが廻はるまで待つて本植するのがよいが、餘り後れるとその不發育を辛抱して本植へ移すことである

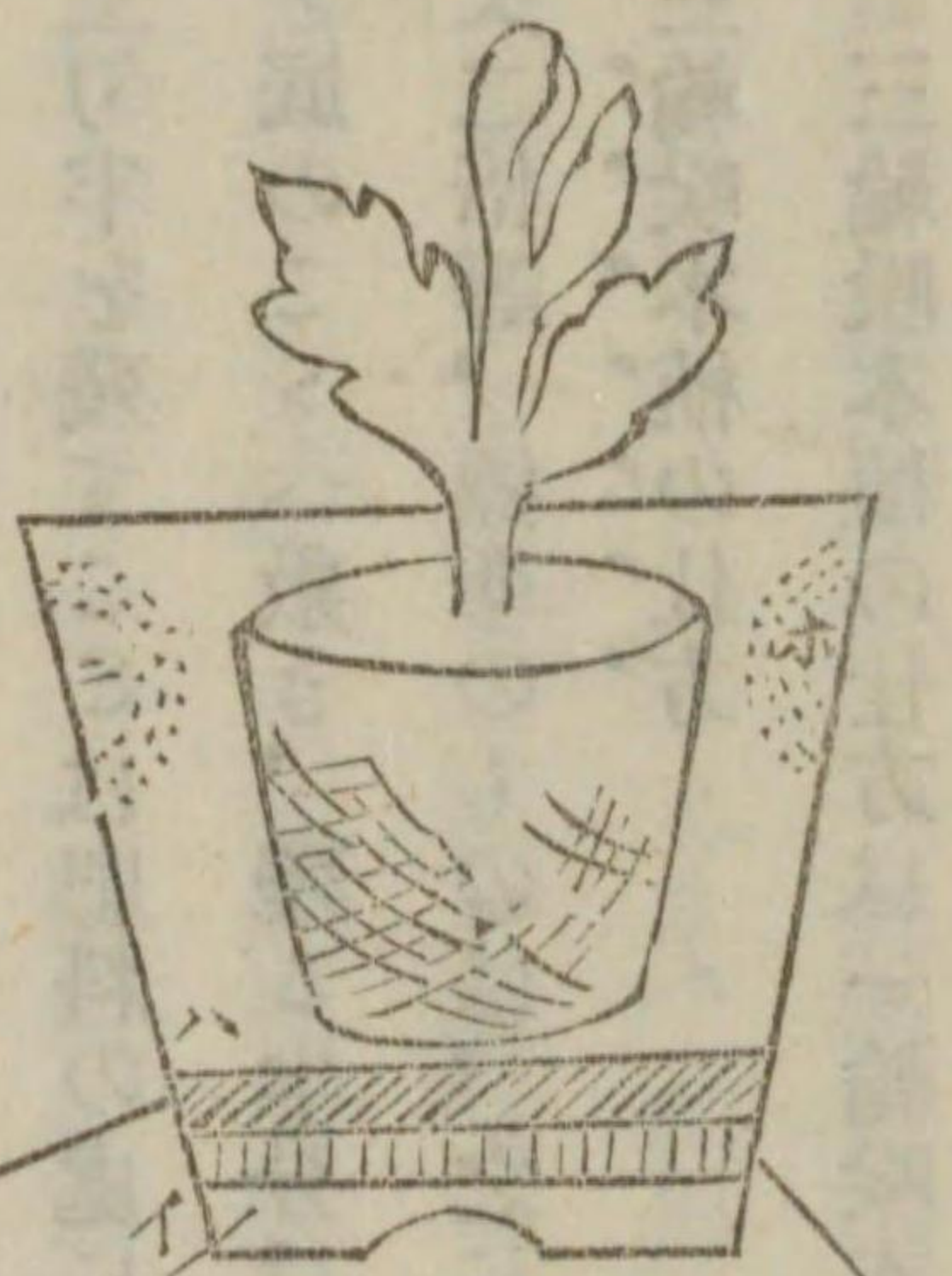
本植の仕方 本植は一輪咲は八寸鉢に三輪咲は尺鉢にするのである

一輪咲の本植の仕方

八寸鉢の底の排水口に貝殻又は鉢の破片を俯伏にしてその上に木炭又は砂利と培養土と混したものと底土として入れその上乾燥肥料を粉碎して置きその上に培養土をしき四寸鉢に假植したる菊苗を左の手にて斜にして持ち右の手の拇指にて排水口を外の穴よりい圖の如くして突くと菊苗は土鉢を付けたまゝボンとぬけろ圖の如く周圍は白い根の纖維を以て土を巻きたまゝのものが出る、底には四寸鉢に入れてあつた排水口の破片も根



の爲めに包まれてついて居る、之を根を傷めぬ様にそろりと除き、そのまゝ八寸鉢の乾燥肥料を敷きてある處へ靜におろして座らせる。そして鉢縁より二寸下りたる上圖へま



培養土
木炭又砂利と培養土とを混じたもの
乾燥肥料

くくと二度斗りつかして土を落つけるそうすると土がしまり過ぎもせず又軽くもなり過ぎもせず丁度菊苗から見れば人が臥床へ入りし時薄團をきせて一寸その裾を抑へてくれるといふと同様心地のよい感じがするであらう又菊が正しく座つて居る時に兩側より培養土を入れてくれ肥料をさしこまされ、一寸首元を壓へてくれるのはほんごによい氣持になつて之よりしつかり豊やかに育ち繁つて行かん氣がするであらう。その上には藁を五分位すさに切り、地の見えぬ程度に、一面にふることである。之は日光を遮さり、日にやけず、又雑草を生せしめず、水氣を長く保たしめるといふ秘傳である。これから話

は少し後へかへり八寸鉢の底へ木炭又砂利を入れるとか肥料を敷くとか抽象的にかいてあつたが、あれはどんな太さの木炭や、砂利で、肥料の分量は何程といふ、細かな事をわざと説明せずに来たから、こゝでそれを説明する。本植の八寸鉢の底に入れる木炭又は砂利は、五分目の篩にかけて下に通らぬけたものを、再び二分目の篩にかけて、その上に残りしものを用ひるのである。木炭でも砂利でも、いづれをつかつてもいいのである。水をよくぬくといふのが主眼であるから。質に關係はそうないのである。それを三割に培養土を七割混して、七八分の厚さに敷くのである(圖のイロ間)その上に敷く肥料は一鉢に付き一合四勺を標準とせしものはこの本植の時に七勺を使用し追肥に三勺半止肥に三勺半を残すことは肥料の處にて述べた通りである。即こゝにて元肥とし七勺の内半分を底のこゝへ敷き、残る半分は、鉢の上面よりの兩側に埋め置く事である。この一倍半又二倍等、標準のものは、之に應じて加減することは論ずるまでもない。

三輪咲本植の仕方

三輪咲本植の仕方は一輪咲本植の仕方と同じ方法でよい、唯異なる点は素焼鉢の八寸

が尺鉢に變つたのと、肥料の割合が多くなる事である、即ち八寸鉢で一合四勺標準のものには尺鉢では二合である。即約三割を増さねばならぬことは肥料の處で述べた通りである、今一つ異なる点は一輪咲の方は四寸鉢の假植より八寸鉢に移植の際でもそのまゝでよいのであるが、三輪咲は本植の時まで摘蕊をして置かねばならぬことである、摘蕊とは芯をつむことで、一輪咲の方は摘蕊の必要はない、眞挿の苗をそのまゝ假鉢より本植八寸の鉢にうつしそのまゝ植つてそのまゝ芯をいためぬ様に成長したらよいのであるが、三輪咲の方は摘蕊をすることが違ふのである。

摘蕊の仕方

本植より前に假植の鉢の中で、幹が五六寸に延びた時、葉を四枚残して上部を摘み取るのである。斯くせば四枚の葉から、芽が吹き出して枝が、四本出来るわけである。この内一本を豫備枝として育てて後三本が立派に成育する見込の立ちし時除くのである。(この除く時期は本植の後でもよい)かくの如く都合よく行く事を普通として居るが、之には變則の場合も出来ることを一寸申し添けて置く。それは五六寸延びた時に注文通り

四枚を残せる場合と五六寸延びても葉が三枚しかない場合も実際には出来る。又四枚残した葉に二枝や三枝極端になると偏して一枝しか吹き出ぬ場合もある、之は菊の個性と日光のあたり工合などで、思ふ通りならぬ場合が出る、かゝる場合は第二回の摘蕊をやりて吹き出さすのである、即ち假に四本の枝を出そうと思つて四枚の葉を残したのに不幸にも二本の枝しか出ない場合はその二本の枝の葉四枚を残して、他はつみ取るのである、そうすると四本又は三本の枝が出るそれで豫定通り三輪咲が出来ませう勿論四本出た場合は一本除くは申すまでもない一回摘蕊して育てた分と二回摘蕊して育てた分とを比較すると二回の方が一回より出来上つた幹が短くなることは思はねばならぬ。

一回のみ摘蕊するものとしての時期

長	幹	七月上旬
中	幹	六月下旬
短	幹	六月中旬

變則の場合二回以上の摘蕊の時期は短幹は七月中旬まで長中幹は七月末日までは摘蕊

をしても花は立派に咲く八月一日以後は摘蕊したるものゝ花は成績悪いから、せぬ様に願ふ。

園 摘蕊及假植時期、本植時期等は附録大菊鉢作月割行事一覽表及筆者の三輪咲鉢植栽培の日記を御参照下さ

第十一章 植つけた菊の世話はどんなに世話し

たらよいか(上) (蕾の出るまで)

假植をして本植にするまでが約七十日内外あり本植をして成蕾を見るまでが五十日内外あること、にいふ植付けた菊の世話はどんなにしたらよいか(上)はこの七十日と五十日即百二十日内外に於ける世話の仕方である。丁度五月下旬から九月中旬までだからこの間には梅雨といふ雨の多い厄介な時期もあるし、土用といふ、盛夏の照付けもある。梅雨には茂り易いが又腐り易い、盛夏には充實もするが枯死もし易い、この百二十日間は養菊家の最も苦勞のある時期である、この時期に於て、凡そ左の十一の問題にぶつかる之を注意して世話をする、菊は其報酬として立派なる花を着けて呉れるのである。

- 第一 本植から後の肥料はどんなにしてやる何度かどれだけか
- 第二 菊の葉を落さないで青々としたものを着けさし度い所謂護葉の問題である
- 第三 は給水とて水はいつやるか午前か午后か夜中か

- 第四 光線は照らして葉を萎らすまでやくか、日覆をするか
- 第五 空氣の流通はごうするか
- 第六 雨の時は風の時はいかにするか
- 第七 いかなる害蟲がつくかその驅除はどうするか
- 第八 添竹はごうするか
- 第九 増土はごうしてするか
- 第十 柳芽の處置はごうするか
- 第十一 摘芽はいかにする今左に順を追ひて之を説明しよう。
一、施肥について

之は肥料の處で委しく述べたからこゝでは重複になるが一寸復習をして置く即ち假植の場合に所謂一割肥料を一週間又は四五日毎に一度づゝ一回五勺位づゝ葉にかけぬ様にして根本に小杓又は如露の霧口を除いたのでやる、その外の肥料は何もやらなくてよい本植の際は已述通りの乾燥肥料を元肥として全量の二分の一(二合標準のものなら一合)

をやり、二十日程立ちて追肥として、全量の四分の一をやり、止肥として九月上旬までに全量の四分の一をやればよいのである。その施り方は本植に埋めたのは東西両側とせは追肥は南北両側といふ様に偏せぬ様やることを一寸注意して置く。之で尙一割肥を一週間に一度水の代りにやつて乾燥肥料と併行して進むと互に欠を補ふて安全である。

二、護葉について。

菊は下葉が落易い下葉が落ちると何だが人間でいへば齒のぬけた様品が落ちて仕舞ひ折角の美しい花もその爲めにさぬ事になる。そこで下葉を落さない様にすること即護葉問題は養菊家に取りてなか／＼やかましい問題である。併しこの問題は挿木によりて殆んど救はれるのである。あの根分をした菊をそのまゝ吹直しにしたりして切り込み育てたものは、どうしてもよく葉が落ちる、それを落さぬ苦心をしてもサラ／＼と落ちるが、本栽培法の如く、吹直しを取らずして、眞挿の玉挿にして菊を培養すると、その問題は殆んど問題にならぬ位下葉は落ちぬのである。安全である。併しいくら安全だからとて油断をしてよく葉の落ち易い個性の菊を培養したり、肥料をやる時に下葉に肥汁を

かけて汚したり(過つてかゝりし時は直に如露の口で霧を吐かして洗ふこと)病害蟲にかゝらして落したり、空氣の流通をあしくして弱い葉を育て、一寸觸れても直ぐに落ちる様のものにしたり、又は添木の時やその他管理の時に、きつく手や竹や剪刀等を葉にふれさせて落したりその他種々の器具と接觸させてすり落さしたりさしては、たまつたものでない。この邊注意すれば美しい葉はつや／＼しく花と相映して、十一月の日を飾るに違ひない、元來菊の葉はもろくて落ち易いから此邊よく／＼注意して落さぬこと吳々も申しあげて置く。護葉とて葉を落さぬことばかりでない。葉を美しく保つといふのも護葉である。落葉を防ぐを消極的とすれば美葉の成育は積極的である。さて積極的護葉は一つは肥料の加減による。葉が黄瘡が／＼りて來ればもう肥料がおそくなつて居るのだから窒素質肥料をやればよい上述の硫酸アンモニアをやればよい今一つは餘り窒素質が過ぎ所謂ほり過ぎ即矢鱈に葉が廣大も面白くないからそのつもりで次に餘りに日蔭に置くと葉が廣大になり易いからその加減も必要だ、ある人は土用中は日に焼くと葉が短小でよいとやきつける人もあるが程度ものである。いづれも極端はいかぬ中庸の道を取る

ここでゐる筆者の日の加減の苦勞を附録の日記につきて見て下さい思ひ半はに過ぎませう。

三、給水について

水……第一の生命の根元水……吾々生物は植物にしろ動物にしろその發生の始源は水の中に居りし關係上水は束の間もなくては生命を維持することは出来ぬ、菊も亦然りて、水がなくては生きて居られぬから給水の問題は、菊の管理上重要な問題の一つである、併しその大切な水も過ぎると菊は負けて腐つて仕舞ふのである、だから給水の分量は如何、給水の時期は如何と考へらるゝ、之について水は毎日朝夕の二度必ずやるべしとか水は日中がよいとか午前十時が適期だ午後三時が最適期だとか又夜の眞夜中丑滿頃がよいとかいろいろの事を秘密そうにいふ人もある又一回の水の分量も鉢の上より底に浸透するまでたつぷりやれとか又一回に二合位つゝやれとか、そのやり方を仰山らしく秘傳として居る方があるが筆者はそんな事には例によりて捕はれぬ。永らくの經驗上、水は植けた時にはたつぷりやるその後は定期としては毎夕午後六時から七時頃即夕日西に

傾きたそがれに近からんとする時換言すれば菊に日の照り付けの疲勞より離れてやれ晩酌の一つも傾けて、ゆくりねませうと思ふ様の時に、優々として之にかの此頃市上に賣つて居る亞鉛製の五合杓に小鉢は二鉢に一杓、大鉢は一鉢に一杓をくれて居る。その水は井戸の水の冷こきをそのまゝやる事は禁物で桶か壺か又はタンクに汲み置きその日中の光熱を透したものを灌く事を忘れてはならぬ。又株元の表土へは一面に藁を六七分に切り表土の見ぬぬ程度に散布してある。この爲め日光は土の表面に照りつけぬから乾き少なくて水持ちよいのである、藁の代りに水苔を使用すると尙よろしい、筆者はその定期給水即日暮一度の灌水の外は菊を見て水をやつて居る同じ素焼の鉢でも温室鉢と普通素焼の堅焼(温室鉢より多く温度をかけてやいたもの)についていへば温室鉢は毎日水がすつかり乾いて水をやらなくては菊が萎れる代りに堅焼の方は日の曇天でもある様の時とくると三日に一度位やつてよい様に水の持ちがよいのであるだから毎日定期に一回つゝやつても右様の次第で鉢と菊との状況を見て水過ぎたりと思へば定期のやり分でもひかへてやらぬ事もあらうし又乾きの甚しくて菊が萎れて見ゆる時の如きは夕刻まで待たず

ともその時にたごひ日中といへども葉にかけぬ様藁の上に灌水して菊をよろこばせてやるべきである。

四、光線について

生物に光の必要なることはそれ水の必要なると同様か光ありてこそ一切各部の活動が出来成長が出来るのである光なくは一切の活動こゝに中止の姿となるべきであるだから菊培養で第一必要のことは光線の充分あたる處で培養することである朝日のサツトあたる家はどんなに住心地がよい事であらう。菊とて全仕事だ旭日のサツトあたり日中は勿論夕日さへ隈なく鉢に匂ふ處ぞほんごに菊栽培に理想の場所である、かゝる場所を選ぶことが大事である。そして植物は向日性といつて日の照る方へ向く性質があるから鉢を一定の處にその儘放置するご一方にのみ偏向して姿勢の悪い菊が出来る故三日に一度づゝ鉢を四分ノ一周圍を廻はすことである。かうして十二日に一週する様にすると偏した姿勢の菊は出来ず誠に八方より見て充實した菊となるのである。菊の個性によりてきつい光線を好まぬものもある之等は充分斟酌してやらねばならぬ、ある人は菊は盛夏

の候しつかり日にあて萎れる位いためて置くごよいご、わざと日にあて葉を萎らし菊をしてわらいめに遣はし居る人も随分ある様だがかゝる方は一つは背を延はさす低く作りたいごの希望と葉をいためて瘦せさす中菊の作り方と混じた頗る舊式の方法である、何ごなれば菊の背は長中短幹に應じて挿芽の時期の早晩の調節により自由に左右せらるゝごごは御承知の通りである、又葉をいためた結果下葉がよく落ちて衰れな菊となるのである、そんな事をやめて人間もあついで時には帽子を着洋傘をさす菊じやごてあついで時には日覆の一つもしてやるのが同情同感且つ自然の法に叶ふたやり方であるまいか。筆者はこの大菊の栽培の時は大体七月中旬から八月廿四日位まで毎日午前十時より午後三時四時までよし簀の日覆をしてやるのである曇天雨天は勿論餘り日覆が過ぎて徒長氣味にもなるごいふ場合は全日又はある部分の時間見合はせて日覆をのけて居るのである。

五、空氣について

空氣はよく流通する様にしてやらねばならぬ、鉢と鉢とが重なり合ひて枝と枝とが交又する様なりては空氣の流通はよいとはいへぬ、必ず葉が腐つて落ちたり、一部に徒長

技を見たりするからよく空気の新鮮代謝を盛にする様にあつてほしい。

六、雨について

如露で水をやつても雨の水でも均しく水であるから同じ様なものだが、そうでないフィルムにがらす戸を覆ひ、その中の苗に水を如露でやつた苗木の勢と、ガラス戸を除きて雨水にあてた苗の勢とは、大變に違ふ、尙繼母と生みの母と位違ふ様に思ふ、一つやつて御覽なさい、その事が合點出來ます。だから鉢作の菊も毎日天氣の時は如露にて水をやつて居るが、雨の時は充分雨にさらして、この天然の慈雨を彼等に浴せしむべきである。然し梅雨の如き毎日の雨又雨と引繼ぐ場合はいくら慈母じやとて愛が過ぎては却つて悪いのご全じ事である、餘り雨が續く時は家の内に入れるか又雨覆をしてやつてほしい一日以上の雨に雨さらしはよくない。又大雨の時も折角施した肥料が流れて仕舞つたり土が雨に打たれて流失したりする恐があるから、その場合は矢張り雨覆又は室の中に取込むのがよい。

七、風について

困るのはこの風だ、風が強くと吹く場合は葉を落し花の首など折つて仕舞ふのである、筆者は先年露地作りをし充分支柱を樹て大丈夫といふ格にして丁度二百十日前に、一週間斗り旅行した、その留守中に大風が吹いた、かへりて見れば哀れや、菊の葉は殆んど風の爲めに、剥き取られ、上葉三四葉位しかない、裸姿となつて居つて、泣くに泣かれず、獨り地壇太をふんで悔やしかつた事がある、菊の大切な時期に二百十日の厄日があるから充分注意せねばならぬ、鉢植の置場の周圍を圍ひて、風避けが出来るご一番よろしいがそれが出来ぬ場合は、矢張大風を見ては、家の中へ抱か込むのが最上策で、簡單である、何分菊の葉はもろいから風にはほんごに弱いのである。

八、害虫について

この害虫の問題はこの處で述べるよりは別に章を起し害虫は菊の苗のそも始より花の萎むだ終りまでに關した事だから別に項をかへて述べるべきであるがこの序に述べて置くのが便利と思ふからこゝで述べる悪から思つて下さい。

1、菊水 五月末から六月にかけて困るのは菊水といつてかみきり蟲の一種の小さい虫

か卵を生みつける爲め菊の若芽の柔き處を彼の剪刀の様な齒でかみ切ることで一本の若芽を二ヶ處も三ヶ處も切られ菊は被害後三時間も立たぬまに首を傾け萎んで仕舞ふのである、之は根分をして育てる菊にはこの被害はあるが我が挿芽を基礎として鉢作りには殆んどその被害にかゝらないのである、何となればこのかみ切の發生の時期が挿芽の時期より早いからである併し氣をつけて居らぬと時期後れのかみきりが大切の挿芽を造作もなくやりつけらるゝ心配がある、この虫の驅除法は引捕へて殺すより外ない。

朝早く露のかはかぬ間に菊鉢の處を巡視すると彼奴か露の爲め羽をぬらされよく飛ばす居るから容易に捕へらるゝからこの時に殺すのである日中は人間様より先方が御敏活故なか／＼手には入り申さぬ御用心／＼。

2、入道むし 入道むし東京邊でいふ猫かへるといふのは之であらうこがねむしの幼虫である之が土を掘るとのの字になりてすくんで居る温順らしいが見かけによらぬいたづらもので大切な菊の根を喰ふて仕舞ふのである、筆者は昨年菊作にあたり笑小町といふ菊がごうも勢力わるい、ごうしたのか原因が不明であつたから土を掘つて見ると居

るわ／＼入道むし一つ二つ……驚く勿れ一鉢に二十七疋早速打殺して菊は植ゑかへたが、もうその菊は花にならなかつた之は培養土の消毒を怠つた爲めであつたので培養土を消毒して置けば己に發生の心配はないのである併し發生した時に土を掘つて見まして入道むしの居る居らぬと見分ける法は毎日水をかけるごと水で鉢の表面は奇麗に均らされる入道むしは空氣にあこがれ夜は表面へ出てくる故入道むしの居る表土は土が處々持ち上つて居るので判別出来るのであるから、怠らず注意をして居ればよくわかります。

3、みゝず

みゝずもうつかりすると鉢に入りて害をなすから、油断なく見付けたら取除くべきである、

4、油むし

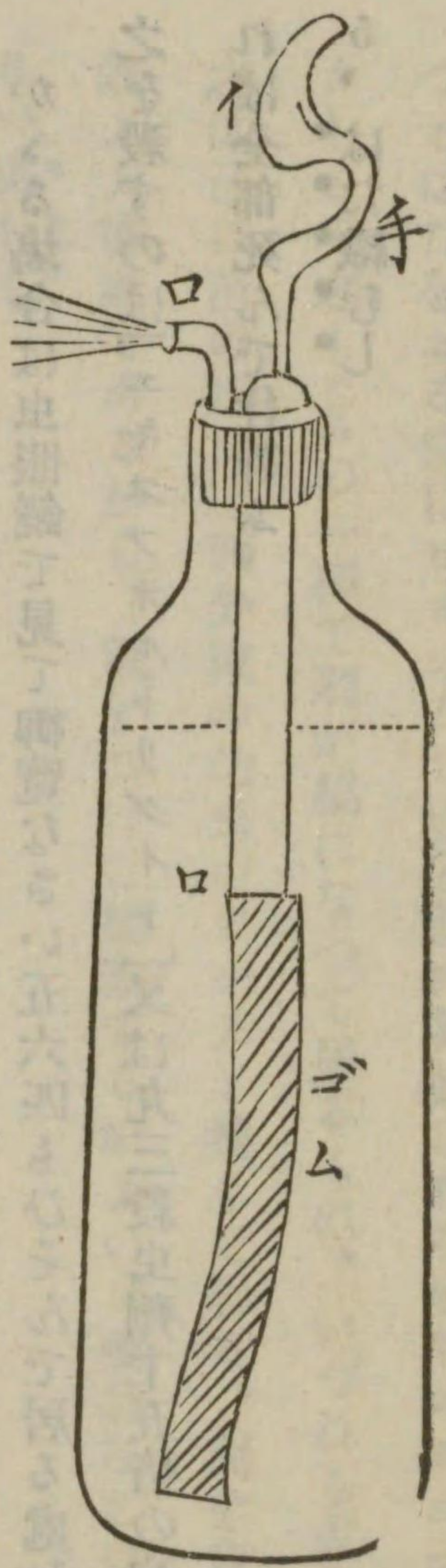
俗にいふきられ之にはいろ／＼種類があつて青い色のも居るし黒い色のも居るし且つ雨に恐れぬのもあるし日に強いのもある之の驅除法は大變むつかしい様について居るが

何でもない、一番簡便なる方法は此頃マルサン殺虫劑といふのがあつた、あれを二匁を水一升の割合に溶かしてきり吹きで吹きかけると必ず一度で死んで仕舞ふ、簡便の殺虫劑である。

●マルサン殺虫劑は一ポンド入罐貳田テアル、黄色カ、リシ粉末テアルテリスミ粉末石鹼ノ合劑カト思フ、神戸市上庄通四丁目五、テリス製劑株式会社製造發賣テアル、

この節殺虫劑はいろ／＼種類が出来て居るが私はこのマルサン殺虫劑を前述の如く使用して効果をあげて居るこの藥劑は水で溶くものだから間に合ひて便利である但し全罐に張つてある用法通りでは少し稀薄すぎて完全に死なぬ様に思ふから前述の割合に改めた。

きり吹きも十鉢や二十鉢の油むしは普通の霧吹で口で吹いた處でそう疲れる事でもなにか澤山の鉢をつくとそれは口も疲れるなか／＼の事だから一つよいのを買入れなくてはならぬ、この頃大抵の蚕具店でも種苗店でも金物屋でも賣つて居る文化霧吹が一番よろしい、こんな形のものでいろ間は金屬之にゴム管をつけてあるビールの空瓶に今の



丸三殺虫劑を溶かして入れ之に文化霧吹を圖の如く挿入れて手を上下するより、

口よ霧り夥しく噴出する口につけるゴムホースが出来て居る之も併て調へ置けば伸縮自在に使用されて調法である。

●殺虫劑としてはアルコール一瓶に三分の一位除虫菊粉を充て之にアルコールを瓶の殆んど口までつめキルク粒を充分にして三晝夜位置くと除虫菊の成分はアルコールに溶解して紅茶色のものが出来る。之を貯へ置き必要に應じ少しづつ出して之に水二十倍を加へて溶かし油むし等害虫に筆の先でぬつてやれば一度で死んで仕舞ふ、筆者は丸三以前は之を使用して居つた又「エキソオルト、リグイド」といふのがあつたは液になつて居るのこ固形になつて居るのこ二種ある固形は蒸蒸用で密閉した室又は箱の中に、害虫の澤山居る苗木を入れ、之で蒸蒸するこ三時間位でみんな見事に死ぬる、所謂虫への毒瓦斯攻めである。液体の方は四十倍位の水に溶かして油むしにきり吹きにて吹きかけ少ない時分には筆にてぬれば見事に死ぬる、

植つけた菊の世話はどんなに世話したらよいか

一〇八

東京邊の菊作の方は主として之を使用して居るらしい、その外澤山あるがこの位にして置く。

4、スリツプ

スリツプはまだ實物を知らぬ方が多い様である某高等園藝學校の先生はスリツプはなめくじだといつて生徒に教へたそうであるこの位の程度だから日本の教育は飽がないのだがさてスリツプの本体は髪の毛程の身体で長さは五厘乃至一分淡黄色の小蟲である菊の葉面の氈毛又芽先の小葉の中にもぐりこんで實に恐るべき害を爲すので一旦この害虫につけ込まれると菊の心は淡黄色になり縮み上り發育を中止し菊の葉は光澤を潤さを失ふてカサ／＼して笹の様になるのである。

かゝる場合は虫眼鏡で見ても御覽なさい五六匹もひそんで居る處を發見するであらう。

之を殺すのは「エキスフォルトリグイト」又は丸三殺虫劑十五倍の溶液を霧吹でかけてやれば全部死んで仕舞ふ。

5、はた織むし

いなごの一種のはた織むしといふがよくくるあの頭の尖がとぎつて居つて足を二本持

つとはたをおる様にビヨン／＼足を動かす虫であるギースチヨン／＼も時々来る、はた／＼とて之もいなごの一種で羽が縞になつて居るもの、いづれも成虫一寸より三寸位ある、之は己に苗の時に三四分位の幼虫がピン／＼飛んで居る、葉を貪食して葉形を變じて仕舞ふ大害虫であるから、氣をつけて捕殺するがよい、藥品などは之には追つ付かない。

6、青むし

蝶の幼蟲の青虫も時々来る、時によると葉の裏に百疋連れが居つて、屹驚することがある、大小にかゝはらず見付次第皆捕殺することである。その外害虫には蟬の形によく似て淡柿茶色がして居るよこばひの一種や小豆蟲やなども随分あるが以上かゝげた一より六までのむしがこの地方に多いから、先づそれだけにして置く。

7、赤だに

菊の葉が勢なく光澤なく何となく病人らしき面持に屹驚して葉の表裏を調べて見ると何か蜘蛛の糸を引いた様の白い光が見え、針の尖端でついた種の赤い点が處々にある之を虫鏡で見る蜘蛛の様な赤だに君がオン／＼歩いて居る殺し方はスリツプに全じ。

病害

病害は第一排水をよくして置く事、水を過ぎぬこと、空気と光線の通過をよくすること、殆んどかゝらぬといつてよい位である、筆者は二十数年菊花の栽培をやるが病害にはかゝつた事がないと申してよい。そんな事いつたごて世には菊の罹病者が格別多い菊花診療院でも建てその治療でもせねばなるまいといふ場合そう逃げて困るでないかと若しそういはれると筆者も躊躇せざるを得ぬ……それはそうだなあ……之には御定りのボルドー殺菌劑がある之を二三度ポンプで全体へかけて置くともう病氣にはかゝらぬ併しこのボルドー液は製造して賣つて居るものもあるが心もとないそこで自ら作るに硫酸銅と生石灰を合はしてクリーム状にする。手加減がチョット面倒である下手な御料理人さんがオレーフ油と卵の黄味とを別にしたマヨネーズを作りて人に笑はれると同じ羽目に陥るから一寸嫌になる近來之に代る福音は前に説きたセメサンであるあのセメサンの溶液で培養土を消毒して置けば大抵病氣にかゝらぬとされて居る菊が成長して居る時はセ

メサン液一鉢につき三合位注ぐとその葉が萎れていやになつたり、黒くなつて腐たりせぬといふことである之は筆者はまだ實驗した事はないが實驗者の報告である。

九、添竹

菊は鉢植のまゝ幹を獨立さすことは出来ぬ、幹の細い割に大きな花を着ける、そこで添竹即ち支柱をして風に抗し姿勢を正しくせしむるのである。支柱は二度に建てる、第一回は假支柱で、かりに建て第二回は成蕾後眞の支柱を立てかへるのである一輪咲の支柱は眞直に建たらよいが三輪咲になると始めは少し斜に立て、菊の幹の位置を定めねばならぬ。三本立にした菊の幹も三本長さが揃ふ場合もあらうし一本長く二本短い場合もあらうし二本長く一本短い場合もあらう、人によるに必ず三本の長さを等しくしようと思つて長短あるものを下の方で長い幹を屈曲して、上で揃はす様の事をする方も随分あるが、筆者はかゝる不自然のやり方に賛同せぬ、天邊で三つ揃はすのもよろしいが揃はなくてもよろしい



いづれでもよいでないか、生花に天地人の變化をさへ態々つける趣を考へて見るがよい、併し根幹の元の三つの岐れた處が偏し

植つけた菊の世話はどんなに世話したらよいか

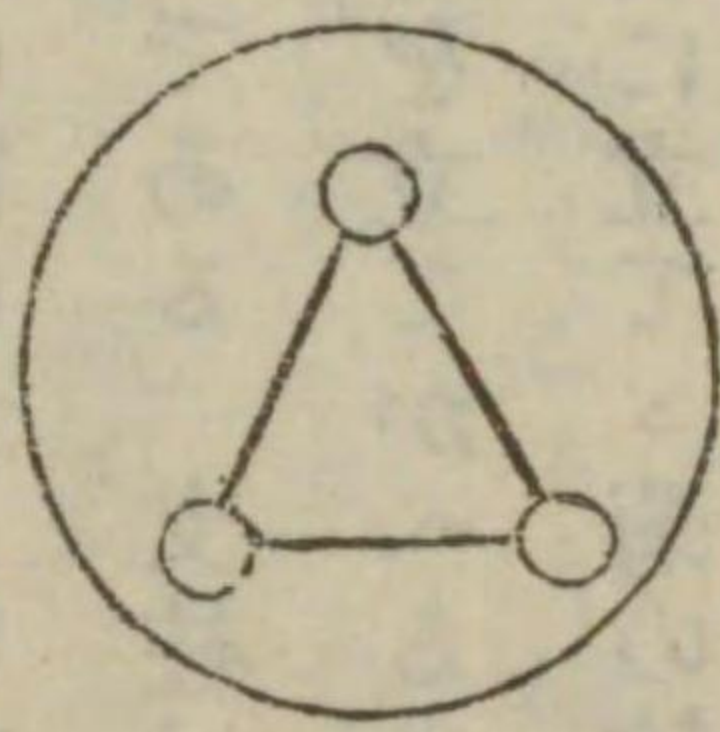
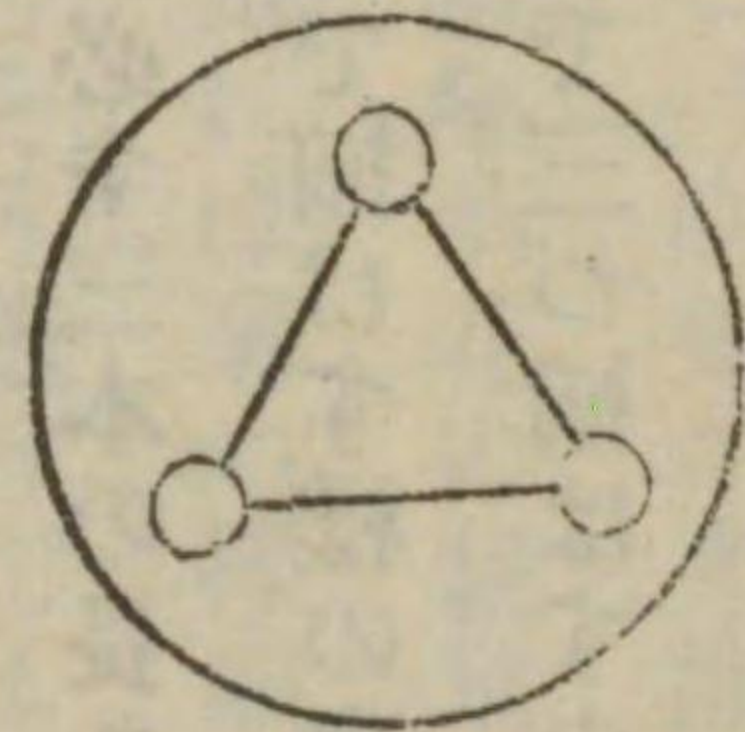
ては見憎いから之を見て氣持のよい様にせねばならぬ之を先輩は左の三つにわけて居る。

イ。天が三つ揃ふ場合 (天作り)(口繪ヲ見ヨ)

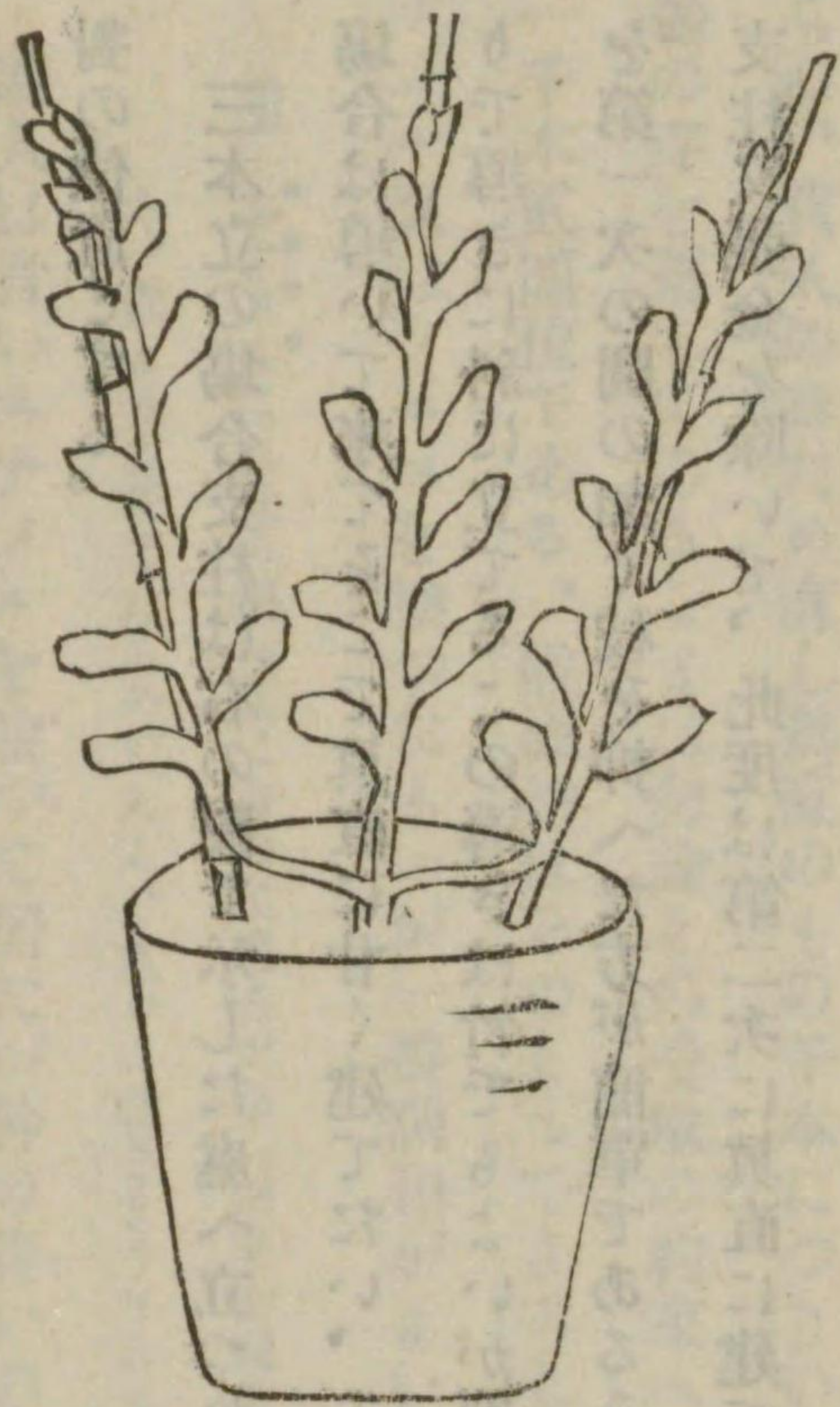
この場合の幹の根元は正三角が美しい
表裏はいづれにしてもよろしい花さへ裏
になつて居らねは結構です

ロ。一本が長くて二本の短い場合 (地作り)

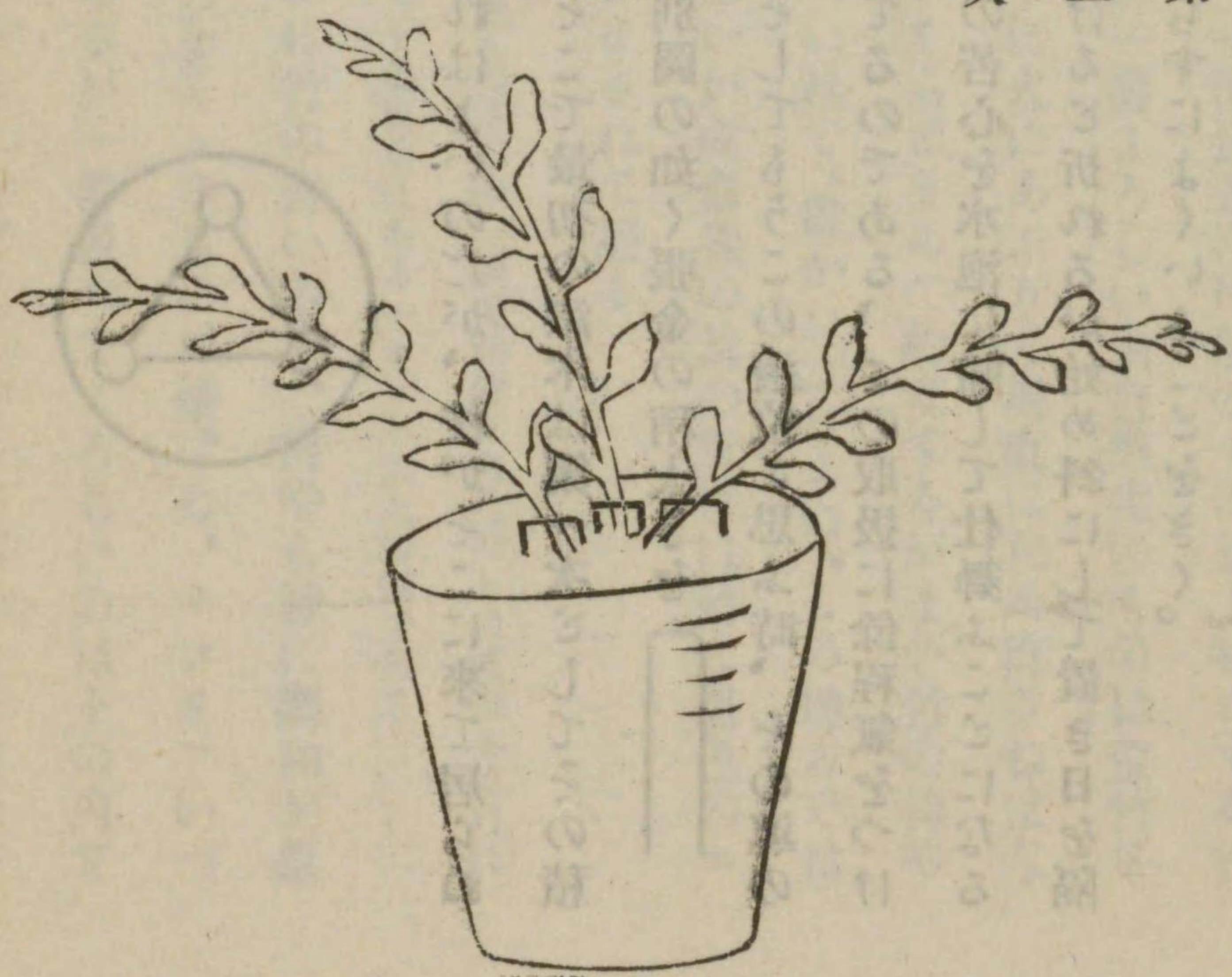
この場合は陰の相と名をつけて長い方
を後方にして短い二本を前にする長を頂
点とした二等邊三角形として短を両脚と
見る。



第一次

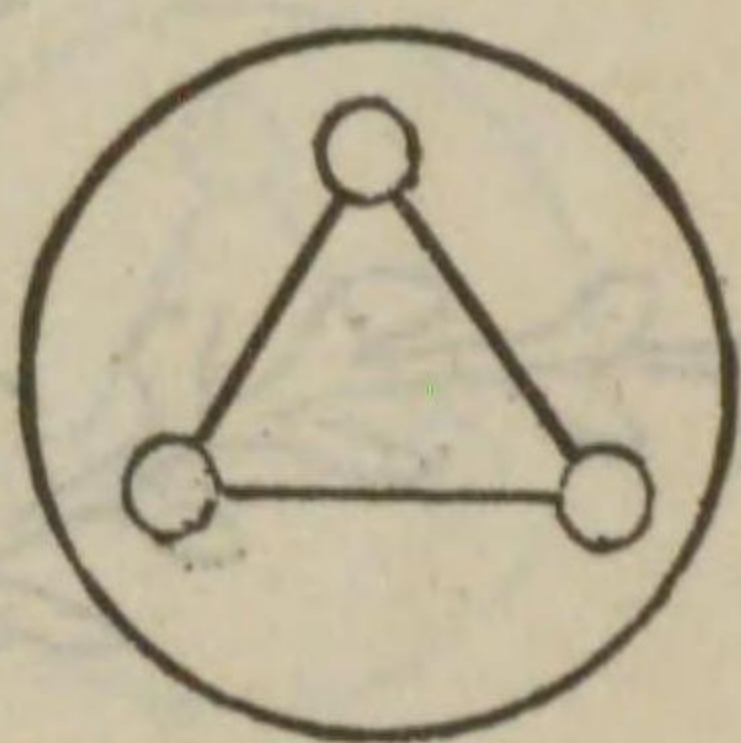


第二次



ハ・二本が長く一本の短い場合 (人作り)

この場合は陽の相と名をつけて長い二本を後として短い一本を前にする陰の反對の位置とする。



三本立の場合支柱は右の圖で示した處へ立つればよいのだが、枝がそこに來て居らぬ場合は導いて來てそこで眞直に甘く建てたい、そこで最初の添木は第一次としてその積りで導きに斜に立てるこの導きは竹でもよいが別圖の如く張金の稍太きを第一の圖の如く枝を抑へた方が簡單であるとしてもこの邊位と思ふ時、その導の支柱又張金を除いて、此度は第二次に眞直に建てるのである、この取扱に餘程氣をつけてせぬと菊の幹は脆いから折れて折角今日までの苦心を水泡に歸して仕舞ふことになるから、氣を長くしてせねばならぬ急に直角に曲げると折れるが始め斜にして置き日を隔て、順次に思ふ様に近づけてくると菊は強情張らずによくいふことをきく。

添竹は普通女竹を使用する、女竹は元口周圍一寸位長五六尺位の上物とする竹は眞直でなくてはならぬ山より切出しは八月頃が一番よろしい山自然生のもは荒竹といつて眞直のものでない、之を切り出しの時直ぐに火にあぶりて眞直にため直さねばならぬ、買入の時ため直し眞直のもの千本につきいくらかごさめて約束するがよい竹の袴や節の芽を落してあることは勿論その受取の約束へいれて、置かねばならぬ、この地方では一千本貳圓位である、假添竹はそのまゝでよろしいが成蓄後の眞の支柱は竹に黒色のエナメル又はワニスを塗つたものが一番調和がよいとされて居る

■ エナメルは人抵の藥種店に賣つて居るが小一罐參拾錢位であるこの一罐で添竹五六尺のもの貳拾本位ぬれる、素より古筆でぬるのである、直ぐに乾きますワニスも藥種店にある一ポンド六七拾錢である

或人は青いエナメルを塗つて居たが幹の青いのに竹の青いので、何やら妙に調和が悪い、黒色のしんと落付いた色調に及はない、添竹をくゝるものは藁、ゐ、ラファイアいづれでもよい紙捻がよいなど、特に古式めく人もあるが一番扱つてよろしいのはその内でラファイアである。ラファイアも青く染めてある方が一層よい。ラファイアは椰子の一種で一

見芋の如きものだ、之を適當にわきて使へは實に使ひ心地のよいものである

園 ラファイアは大きな種苗店には大抵賣つて取るが筆者は横濱市神奈川青木町三ツ澤横濱ガーデンから取つて居る百匁七十錢である百匁もあらば七八十鉢の一年分は充分である。

菊の成長の度合は支柱をしたのと、せぬのといづれがよく成長が速かであるかといふと、支柱をするに彼自身雨にも風にも將た彼自身が彼自身を支持する上にも樂になつたものと見て、せぬものよりは成長が早い、そこで長さを揃はそうとか又餘り短かすぎるから他の長いのに追付かそうと思ふと、それに支柱をくれてやると先生得意になつて延びて行くもうよい工合と見た時に他の方にも支柱をくれてそれで之より御同道なされど、あるのである。

又菊の幹の成長はその尖端のみ延びるか全体が延るかといふと決して尖端のみ延びるものでなくて全体が膨脹して延るのであるから支柱を幹にくくりつけた時でも餘りさつと括つて置くと全体が持ち上りて遂には支柱の土の中に入つて居る分が胴あげせらるゝ事もあるのであるからそのくゞり付様は軽くやつておかねばならぬ。

支柱は一年生の竹が眞直で小節もなくよいといはれて居るが之は矢張狂菊培養時代の方法で今日の我大菊に應用すべきものでない大菊の幹は剛強で大きくなるに食指位の太さになるから到底一年生のひ弱い女竹では支柱處か幹の方が支柱の支柱とせらるゝ様になるから支柱は二年生以上の實の入つたものとするのがよいと思ふ。

註 支柱を自分の宅で製するには八月頃(竹は八月に切るが一番よい時候である)山より切り來り袴を除き、節を削りて之に火をたきて曲りしものをすのである、火も炭火はいかぬ炎の立つ燃火でなくてはいかぬ、かくのされたものにエナメルをぬるのである

一〇、増 土

本植にした時鉢の表面を土を少しく控へて將來増土の出来る様餘地置いてあつたことは前に本植の際述べた通りであるが是は追肥及止肥をした際増土といふことをすることになつて居る、増土は鉢の上土として凡そ五分位培養土を盛ることになつて居る、之は菊の根が上の方に向ひて澤山出て來るから本植の時の土だけでは不充分であるから斯の如く二回補土をやる次第である、それなれば本植の際充分やつて置けばよいでないかと議

植つけた菊の世話はどうに世話したらよいか

二六

論もあらうが一度に大食は食滞病の原因となる、少しづつ小割にした方が充實をするのである二回に分けてやる光線なり空気なりも充分表面に觸れつゝ都合がよいからである、この増土を底へのみする方法、上下二方にする方法もあるが之は後日著を改めて申述べる機会があらうと思ふから今回は普通菊培養家の重寶がるうは土に増土することに話は止めて置く。又それで充分立派の花が咲くのであるからあせらなくてよいと思ふ

支那の古い種樹書に「竹與」菊、根皆向上長添泥覆之爲佳とあり菊は竹の如く根が上へ向くものと考へて居る竹の上に向くは根茎で菊は根である菊の根が上に向くと菊作りがいつて居るのはこの支那の書から出たのだ、果して上に向くか……筆者は四方に向くと思つて居る今までの實驗はそうなつて居るまだ二三年實驗せぬと斷案は下せぬ古來の傳統を覆へすのだから深重にして居る併しすべての鉢植物は上に肥料をやると根はそれを吸ひに上へ向ひて来る菊もこの傾向と思ふ諸君試みて下さい竹の根も全じものであるまい

一一、柳 芽

柳芽とは菊の幹が一定の長さ達し一定の氣候となつて來ると今までの成長が中止されて頂点が三つに屹れて枝が出るこの真中に出る枝は普通の菊の葉の如くでなく葉の縁に切込なく丁度柳の葉の様な葉で細長くすつとしてその先は力のない蕾の如きものか出

來てゝるのである之が柳葉である。この場合は普通之を早速取り取り他の一枝を除きて一枝のみを添竹に括りつけて成長せしめるのであるこの柳葉をそのままにして置くと開花せずに済む事もあるし又時によると面白い花となる場合もあるが普通は皆除く事になつて居る。菊の個性によるとこの柳葉の出ぬものもある。それから挿木の時期が晚いに出る性質のものでも出なくてすむ場合もある。普通八月中旬から九月上旬に出る。

この時期を過ぎると殆んど出ないのである筆者の最近の培養には三百鉢に近い鉢數の栽培に僅に十鉢位しか出なかつた又柳芽は普通一回なるも菊の種類によりては二回以上出る事もある、昨年筆者の培養菊の内麗水といふのがこの柳芽をわざと取らずして咲かせたのであるそうすると實に普通の麗水で見られない立派の花になつた柳芽もどう嫌つたものでないと思つた。

柳芽について青森縣弘前市亀甲町中谷熊次郎といふ菊培養界に有名な方より筆者へくれた通信に「當地は凡て柳蕾を立つる事と知られたし當地は鈴蕾にては開花遅くて小輪なり且つ色も出でず」味ふべき言なりと思ふ。筆者も昨年まで柳芽を恐れて除去したが麗水の成功あり且つ中谷君の來信もありそこで貳拾六鉢出來

植つけた菊の世話はどんなに世話したらよいか

一三〇

た柳芽を一切除去せず之が現はれると直に過燐酸石灰を一握り鉢の周囲を掘りて肥料として埋めた蓋弱き似せ番の如きものを實肥で番にせんとしてなり、又三週間位すると全じく過燐酸石灰をやつた、番は日に増し太く充實して来た、その結果普通の花より三割位大きい立派の花が咲いた唯一鉢のみは花さならなかつた。

一二、摘芽

菊の芽は始の程は尖端のみであるが土用過ぎると各葉の間から芽が出て之が小枝となりて太るはくその成長の盛なる時は一晝夜五六寸延びて今朝摘んだ筈だにあのまあ長い好がないなどこぼす事も少くない、この芽に注ぐ勢力を中心の花や葉に注がさん爲めつとめて之を摘み除かねばならぬこの作業を摘芽といふ。芽が太くなりて之を摘めばその創口も太きくなり随つて菊の負傷も大である事故芽は小さい時に摘むのに限るもう少し芽が見わかるとつんで仕舞ふのである。そうすると創口小なる故跡方なく早く癒えて、その力は他へ及んでゆく、然るに小輪が三寸も五寸にもなつてかいて行くと、その創口の處に突起が出来て、何やら片輪の様ほんこに見憎いものとなる併し勢力分流の

法則により、菊でも何でも枝が澤山あればある程勢力は公平に、それに運はれて居るのである、だから勢力を澤山に分つた方と、勢力を一つに纏めた方とは、勿論成長にも大關係あることは申すまでもないこの理法を應用してこゝに二本立の幹あるとせんに一方は長く一方は短し短い方を長い方に近付かさんこせば摘芽をせずに捨て、置くと、勢力は多方面に注ぎ、その成長は遅緩である、短い方は芽を見るとき除くと勢力を一方に注ぐ故成長は早く遂に長きものに追付くものである、この時長き方の摘芽をやつて、足並を揃へる場合もあるかゝる場合を除く外は全部芽は摘み除かねばならぬ。

以上述べた施肥給水を適度にし日光、空氣の透射流通をよくし病害蟲を豫防驅除して雨と風とに注意を怠らず護葉を完全にし出て来る芽をつみ鉢の表面にはよい時期に土を増し添竹を完全にすればやがて豊満なる理想的蓄を結び艶麗の花を開くに至るや自然の歸結と申さねばならぬ。

第十二章

植付た菊の世話はどんなにしたらよいか

か(下) 成蕾より開花まで

前章にいろいろの手数のかゝることを述べて置いたこの章では成蕾より開花までの世話の仕方を述べて見たいと思ふ前章に述べた肥料の問題はもうないのであるが給水、光線、空氣病害蟲等の問題はこの間を通して忽にしてはならぬ之は別に項を改めて述べないから前章に準じてやつて下さい。

蕾がつくと、さあ嬉しい、五月以來の苦勞が報はれてきたので、その蕾の大きくなるのを、一日千秋の思ひで待て開花に至るのである。この間に起る問題は第一蕾は粟粒の様ブツ／＼澤山出来るか一体どれを置きどれをつみ取るか第二日光と雨露の問題第三に輪台第四に花の整齊の問題第五に花壇と鑑賞の問題で第七には花期は人工で早められぬものかの問題である

一、蕾について

菊の花の蕾は一つ出来るものでない成蕾の氣節九月中旬になると菊の尖端に粟粒の如く澤山一時に出来るのを見るであらう、そしてその蕾は太さが一樣でない、大小のあることは早速見た者は判断出来よう、養菊家はその中央にあるのを眞蕾と名づけ、脇にあるのを脇蕾と名つけて居る、花は一つ咲かすのであるからこの蕾は開花までには除いて一つとせねばならぬ除くことすれば眞蕾を除くか脇蕾を除くかといふ問題に逢着する、ある菊作りは眞蕾を除いて脇蕾を一個成長させた方が立派なる花をつけるといはれて居る又ある人は眞蕾を置きて脇蕾を除く方がよいといはれて居る、近來我國大菊培養家の輿論は脇蕾を置くといふ方は舊狂菊の培養法をその儘受けた時代後れの愚論であつて、我大菊栽培には眞蕾でなくてはならぬと主張して居る、即ち

イ、眞蕾の花は雄大である

ロ、眞蕾の花は花瓣の數多し

ハ、眞蕾の花は花首適度なり

ニ、眞蕾は花期脇蕾により四五日早し

脇蓄は之に反す筆者も理論上より實際上より之に賛成である併しこゝに一つ云つて置かねばならぬのは菊の個性によると眞蓄よりは脇蓄の方が太いものもある、かゝる場合は眞蓄を取りて脇蓄を成長させた方が成績がよい、そこで筆者はその眞蓄たるを脇蓄たるを問はず観察して勢力大で完全の形を供へて居るのを置き弱いものを除き去るといふ方針が一番よいと信じて居る、その方針で毎年やつて居るのである併し早咲を遅くしたり、又三本立の場合、一枝早く成蓄した場合早い方は脇蓄として晚い方を眞蓄として待合せたり又眞蓄に欠点ある場合には脇蓄を態と立てねばならぬのである蓄は見出したら直に摘蓄の作業を行ふかといふにそれは蓄の形も篤と見ねば成らぬことであるからまあ仁丹の太さ位になるまで待つて、その作業を行ふのがよいと思ふ、そして又蓄はその作業を行ふ場合、いよ／＼一個にしてしまはぬことで必ず二個残して置く事である、一個は目的物一個は豫備蓄である、虫害又はその他の害で一個の目的だけでは取返しつかぬ場合があるからかく餘地を存してもう大丈夫と思ふ時期に一個にする。かといつていつまでも二個置いてあることもあまりに小心翼々過ぎるから見計でよい時期に一個にするべからぬ。

摘蓄の仕方は取らんと欲する蓄を右の手の食指でその頭を横に抑へるとコロリと落ちるのであるほんとに脆くて氣持ちがよいあんまりコロリ／＼と遂に全体を坊さんにして仕舞ふ場合もあるから、ごうぞコロリが過ぎない様に勢のよいもの必ず二個を残す様にせねばならぬ蓄は普通早く出たものは早く花になるのであるけれども菊の個性によると早く成蓄はしたけれどもなか／＼花にはならぬものもあるし之と反對に晩く蓄んで早く咲くものもある。かくして選蓄がすむと次ぎには添竹をする。添竹は前章に述べた通り假支柱をぬき取り、黒塗の眞支柱とかへて立て括りかへるのである、之は一日にやれぬ、蓄の成長や幹の都合を見て九月下旬から十月下旬頃までにやるのである、この支柱をやる時に呉々も注意したきは葉に力を觸れぬことである、菊の葉は脆いから力が觸れるとコロ／＼落ちてその美容を傷つけるからである。

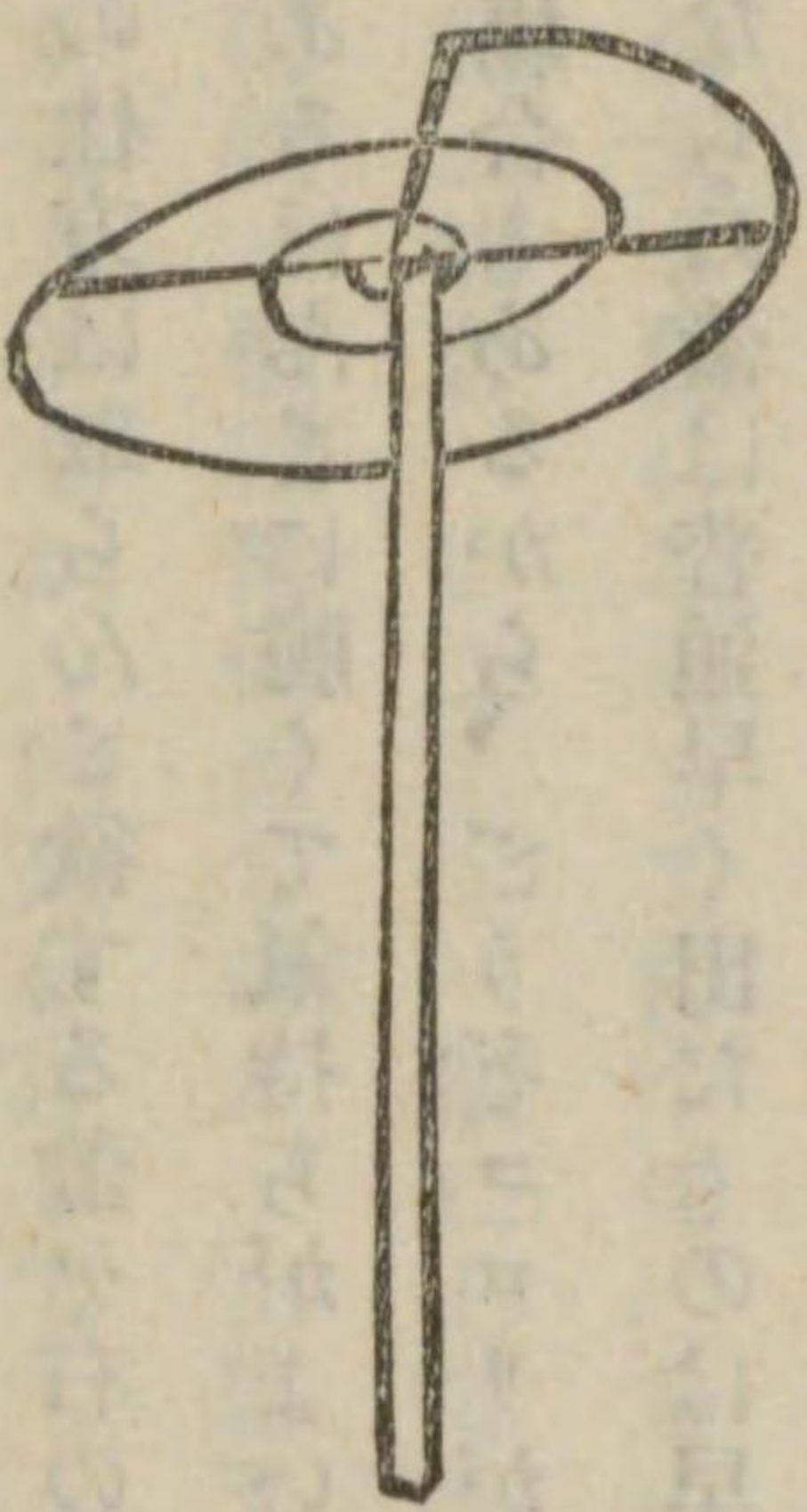
二、日光と雨露

蓄が見わかけると、蓄は充分日光に充てねばならぬが、中には日光にあてられぬもの

もある。之を同時に雨露にもあてられぬものがある、青色系のものは日光にあてると、色が褪色して仕舞ふ、又花が弱いものは雨露にあてると腐敗して仕舞ふ、そこでかゝるものは屋根の下に運はれねばならぬ。

三、輪台

又花受。大菊の花は幹の割合に花がふとくて重く花弁も複雑であるから自然のままに任かして置けば自分の力で自分の花を支えることが六ヶしい首はなたれてしまつて花容を損し且つ花の生命も自然に短くなり誠に惜しい事である、この菊花を完全に支へて花の生命を長からしめ且つ花容を整齊して一層の美観を添へしめるものはこの輪台即花



受けである輪台は亞鉛線で渦巻の形に作り之を支柱に結びつけ花を支持せしめるのである。

輪台の作り方は種々あるが上圖の如きものが一番キチンとして大丈夫で体裁もよい巧者な方は自ら作つてもよいが購入するのが簡單である。

は自ら作つてもよいが購入するのが簡單である。

東京市浅草區永住町七十一番地 松井彦治氏の製作し販賣して居るのが比較的廉價でよいと思ふ。

直徑四寸、五寸、六寸、七寸の四種に分つて居る各一個につき

四寸 (二錢三厘) 五寸 (二錢五厘)

六寸 (三錢二厘) 七寸 (四錢)

輪台は花が六七分咲いた時之を支柱に括りつけて花受けとするのである厚物には普通四寸のものを使用し

その他のものには五六寸のものを使用す七寸は超極大々輪に使用する。

全じ花受けにしても紙を輪台の上に敷いてあるは何とやら餘り人工に過ぎて美しい感じに乏しいがこの亞

鉛線だけのものを以て受けさせたのは誠に品のよいものである。

四、花の整齊

輪台をあて、花受が出来ると花の整齊をする花の整正とは菊花の複雑する無数の辨が入り乱れて居るを、箸で花辨のいたまぬ様に整正するのである、そして始めて菊花天然の美を益發揮せしめるのである、この時辨を傷つけぬ様にせねばならぬ、象牙の箸など使つてやる人もあるが杉箸の柔かいのには及ばない。

五、花坦

五月以來の苦心も報いられ十一月の明治節を前に控へ十月廿七八日頃になるともう花坦を作らねば居られない早咲を多く作り置けば十月廿日頃には花坦が出来るがこの地方としてはどうしても十月廿七八日頃となる、花坦は長幹を後にして中幹を中にして短幹を前にするは勿論の事花容と色の配合をよく考へてやらねば折角の花坦を美しくせないのである花色は紫黄紅白交互に配置し色圖の反対色即餘色を相接すれば大に引立ちて美しい花容は細管の次に間管次に太管厚物といふ順に配置すれば引立つてほんとに美しい、又同じ花容細管ならば細管厚物ならば厚物と同花を一所に集めて色の配合を並へるもなか／＼美しい。花坦の配合をよくせんには毎年春養菊の始めに當りて其幹性及色花容につき研究を遂げ花坦配置圖を作り置きその計畫の下に各種類を栽培するのがよい無計畫の栽培は花坦にはならぬ。

六、菊花の鑑賞

菊花の蕾の繰出しには抱へたるもの露心せるもの吹上るもの、三種あるが毎日／＼徐々變化を始めその繰出しを始めてより満開に至るまで三週間位を要すこの開花にいろいろの變化を起す、その花形に於て花色に於て、花色も始め淡黄のものが純になつたり濃紅のものが淡色に變化したりして變化己む時なく若し夫れ花形に至つては、變化の變化、大變化、奇術師が不可思議の術をあやつる様である、そこで我々は大体その鑑賞の時期を三つに分つて居る。

第一期 鑑賞期 花辨が繰出し始めそれが終つて次には花辨が伸長して伸び切るに
の間約十日間

第二期 鑑賞期 花辨が伸び切つた後花辨がその特性を發揮して活動を始める段咲
型は段咲に盛上りに進むこの間約十日間

第三期 鑑賞期 最も花容に變化なく超然としその特性を持続して居る間約十日間
七、花期は人工で早められぬものか

温室栽培は別として普通鉢植露地栽培として花期は早めたり後れさしたり出来ぬもの

であらうか之は一週間位早く咲かしたり晚く咲かしたりすることが出来る。今で菊花培養家に秘密にして居る藥品が二つある一つは塩化マンガンで之は花期を早くする刺激劑一つは硫酸鉄で花期を晚くする刺激劑である、硫酸鉄は花期を晚くするのみならず葉を美しくする、その用法は一匁を水一升の割にこかし本植後十日毎に三回位にやるとよい又早く咲す方の塩化マンガンは一鉢につき二匁位を水一升到溶かしたるもの七月十五六日頃に一回、八月六七日頃に一回施すと凡そ一週間位早く花が咲く。

① 1、塩化マンガン

壹貫目に付四圓五拾錢位普通一罐六貫目入、一東京市京橋區南新堀一ノ七森六商店

東京支店及神戸市兵庫宮内町森六兵庫支店

2、硫酸鐵

壹貫目に付參拾八錢一罐拾貳貫目取扱店鹽化マンガンに全じ

第十三章

花のすんだ後は如何にするか

花後花壇を解いて後の鉢はそのまゝ幹を切り込み擔の下様の處へ置くもよし又鉢の土の回生を爲さんとするものは必要の種芽は之を苗圃に植込み名札をつけ置き、品種を混ぜぬ様注意し又苗圃植附のものは植付地圖を作り第何行の何本までは何々と、細に記載し置けば、木札よりはたしかでよい。そして土は之に藁灰を土一升到一合位の割に混じて、酸性の中和をなし之に培養土を作る時の有機物及肥料を混じ積み置けば翌年春は優良なる培養土と變化して行くのである。

菊の芽盜賊といつて菊を見る人の中には卑劣の精神の持主もあるものであるからかゝる根性を起さぬ様花壇にある菊花は枝芽及發芽苗は、全部注意して除き置き、眼に觸れさぬことである、之れ人に一面より盜賊心を起さぬ慈悲の心である。

以上随分長きにわたつてつまらぬ菊の栽培法を書いて見た。極めて通俗的に俗語交りて書いて見た、之はもと菊花栽培の極初心家に菊の栽培は六ヶしいといつたり思つたりし

て居方るに極めて平易にたやすく立派の花を咲かす方法をかいた積りである。

菊花栽培法はこの一方法のみでない。地方別にしても京都の栽培法と名古屋の栽培法と東京の栽培法には違つたものがある、同じ東京でも人によりて方法を異にして居るからその方法たるや十人十色といつてよい、筆者も今少し深くふみこんで各大家の栽培法を比較して自己の経験と併せて述べたいとも思つたが、初心の方は、こんな役にも立たぬことを博士らしく擴げられては徒に迷の雲を起すより外なくこんな時間つぶしは後日の慰みとして今回は之れならば充分出来るといふ一つの方法に慕進した方が結果はよいと信じ自分が経験して成績の一番よいものを披瀝したわけである、他日機會あらば學術的に博く比較考證して世に問ふ事あらんと思ふ。

終りに筆者の親しく菊花培養の計畫書たる大菊大作月割行事一覽表と大正十五年度に栽培した日誌を添付する、この日誌は三輪咲のみでしたから、その積りで御讀み下さい。そしてこの實地の事と前記述べた事とを比較して下さつて御味の上御酌量御實施遊はれたならば好結果をもたらすことと思ふ。

第十四章 菊花の實生に就いて

人が菊花を栽培する様になる動機は第一章で述べた通りであるがそして始めはなか／＼菊苗を買入れる處の氣になれぬ、まあ人より貰ふのである、花を見せられた人に下さいといつて見たり、朋友や親戚や見ず知らずの人にでも美しい菊を見ると呉れよと大膽向ふ見ずに出る。自分が作つて見たり又人から自分の最も好きな大切の菊をくれと乞はれたりして大分菊の事が分つて来て、その物質的價額の事も、少々知る様になると、自分の始めにくれ／＼と乞食根性なりし事があまりに作法も知らぬ鉄面波の恥かしくなり、彼の人分譲を否みし譯もあと理解が出来、その次は金を以つて菊を購入する時代となる。立派なる菊を見ては。之を買入れ、遂には數十金數百金を一菊にかけるも惜しと思はぬ様になる。處が金をかけても自由に得られぬ菊が澤山ある所謂秘藏の菊である。之に一つの思ひが行詰る且つ又人が實生して作りし菊よりも自分か一つ、實生して立派なる菊を作つて之を秘藏し又は之を人に誇示して自己満足を得たいといふ心も起り或は

人の未だ作らざりし理想の新花を創造し菊界に貢献し榮譽を得たい人を喜ばしいたいといふ名譽心公益心が基となり茲に實生をやつて見たい氣が勃々と起つて來る大体愛菊家はかゝる三期の徑路を通つて居るものと見て先づ大なる見誤もなからう。筆者はその第一期を貫ひ時代・第二期を購入蒐集時代第三期を實生創造時代と名づけて見たい。然れば菊は貫ひに始まり實生に終ると申してもよい。理想はそこだ自分の創造せし菊か天下一品のものばかりて花壇をつくりて居る又人にもわけてやる是程愉快はなからう。京都に坪井といへる婦人がある筆者に寄せた手紙の一節に●義生來草花を好み種々培養致し近年専ら菊花の實生を樂しみ先輩の指導を仰き培養一意花の進花向上を念として努力致し幸に十數年來二百餘種を創造し秘藏培養の上花壇を作り居候の自己御満足や察しられる。併し實生はかりていよ／＼天下の名菊一人にて出來ればよいがなか／＼そう花は五反か壹町かつくれは何十萬株も株数は揃ふが名花を得ることは難し矣であらう、天才の技術家ならでは六ヶしいだらう。そこで購入といふ事も矢張實生に伴はうて必要であらうし。知人より預けとか、分譲とかいふ事も矢張必要であらうが實生の盛んにな

ることは日を追ふて益盛になることである然るに今日はまだ菊は根分け、挿し木このみ思ひしに種子が出來てそれが生ゐるのかなど、筆者に今更の様驚きて尋ねる人も随分菊作の方にさへある。

そして實生には變化の多いといふことに又驚くそして實生熱は日一日と高く上昇してくる、實生に關しては種子は如何にして採取するか又如何なる種子を買入るかその播種法如何その栽培法如何にすへきことが澤山あるが筆者も目下研究中の一人で之を諸君に講釋するまだ自信がない。出來たらいづれ機會に發表しよう。人のかきしものは段々あるが人のものをぬき書きは筆者の潔しとせざる處。故にこゝで摺筆する附録實生界の權威槇麓園、精興園訪問記を御一覽下さい。槇麓園訪問記は曾て東京重陽會報第十二號に戲せしものを少し訂正した。觀る方之を諒させられたい。

附録(二)

鉢植三輪咲栽培日誌

(大正十五年度)

月日	曜	天候
五月	日	晴
二	日	晴
三	月	晴
四	火	晴
六	木	晴
七	金	晴

川ヨリ洗砂ヲ取り來ル
フレームニ洗砂ヲ厚サ三寸位入レテ均ラシ挿床ノ準備ヲスル
山ヨリ赤土ヲ取り來リ玉挿ノ準備ヲナス
短幹中幹長幹五水晴五 大洲以下二十餘種ノ玉 挿ヲナス
給水朝夕二回苗木ニ葎 簀日覆ヲナス
給水朝夕二回



八	土	晴	水少シ過キタルヲ以テ 本日ハ夕一回トス
九	日	晴	給水輕ク朝夕二回
一〇	月	晴	全
一一	火	雨	日覆ヲ除ク
一二	水	晴	日覆ヲナス水夕ニ一回 トス
一三	木	雨	日覆ヲ取ル
一四	金	雨	日覆ヲ取ル
一五	土	曇	日覆ヲナス給水夕ニ一 回

一六	日	晴	ボツ/、發根シカケタ リ日覆給水全上
一七	月	晴	水多ニ失ス依テ本日ハ 一回トス(全上)
一八	火	曇	日覆ヲ除ク水一回 ターナー種外九十餘種 フレームニ玉挿ス朝夕 二回給水
一九	水	晴	本日ヨリ日中ノミ日覆 ヲナス給水二回 昨日ノ續玉挿ス上ニガ ラスヲ覆フ
二〇	木	雨	日覆ヲ除ク水ヲヤラズ 昨日ノ續玉挿ス雨中み の笠ニテスル忙シ上ニ ガラスヲ覆フ
二一	金	雨	全 ガラス戸ヲ上ニオフ 給水一回
二二	土	雨	全
二三	日	曇	全

二四	月	雨	全
二五	火	曇	全 油むし段々見エタリ除 虫菊浸ヲ噴霧ス給水夕 一回
二六	水	曇	全 給水朝夕二回
二七	水	晴	日覆ヲトザス水二回給 ス全
二八	金	雨	水ヲ給ス 給水一回トス
二九	土	雨	水ヲ給セズ 全
三〇	日	曇	水朝夕二回給ス ガラス戸ヲ除ケ葎簀ノ 日覆ニ變ヘル給水二回
三一	月	曇	全 給水二回

八	七	七	六	四	三	二	宵日
火曇	月晴	日晴	土晴	金晴	木晴	水晴	火晴
水ノ代一割肥ヲ一鉢ニ五勺位與フ	給水タ一回	二三本油むし居リシヲ以テ驅除ス給水一回	給水一回	四寸鉢ニ假植シ鉢首一寸位出シテフレイムニ埋ム	給水二回	給水二回	根廻リ大ニヨロシ給水二回
よしすヲ今日ハ取ル	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	よしすノ日覆	瑞雲、長壽樂外二十餘種挿芽、玉さし、よしすヲ覆フ給水一回

一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九
水晴	火晴	月雨	日雨	土曇	金晴	木晴	水晴
給水一回	一割肥ヲ與フ	全	雨故水ヲ與ヘズ	(入梅) 一回給水	水ノ代一割肥ヲ與フ背ノ高キモノ摘蕊	全上	一回夕ニ給ス。
全	日中ノミ日覆ヲナス給水二回	よしすヲ除キ天水ニアテル	發根充分ナシ居ルアリ未ダ一ツモナシ居ラサルアリ、よしすヲ除ク	全	全	全	よしすヲ午前九時ヨリ午后五時マデトス給水二回
全	よしす日覆給水二回	全	よしすヲ除ク水ヲ給セズ	全	全	全	全

二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七
木	水	火	月	日	土	金	木
晴	曇	雨	晴	雨	晴	雨	晴
一割肥ヲ與フ	給水一回	水ヲ給セズ	給水一回	一割肥ヲ與フ勢ヨク繁茂ス	全	全 背ノ高キモノ摘蕊	全
全	給水一回	給水一回	四寸鉢ニ假植スフレムノ中ニ埋メル鼓ノ瀧外一種今ニ發根セズ		給水二回	よしすヲ取ル	全
全	よしす給水一回	よしすヲ除ク水ヲ給セズ	よしすヲ覆フ給水朝夕二回	よしすヲ除ク水ヲ一回給ス	よしす日覆給水二回	よしすヲ除ク水ヲ給セズ	全

二五	二六	二七	二八	二九	三〇	七月	二
金	土	日	月	火	水	木	金
晴	雨	晴	雨	雨	雨	晴	晴
給水一回一部摘蕊ヲナス	水ヲ給セズ	一割肥ヲ與フ	水ヲ給セズ	全	全	摘蕊ヲナス給水一回	給水一回
全	全	全	全	全	全	全	全
長キモノ今日摘蕊ニカ、ル		一割肥ヲ與フ	水ヲ給セズ	水ヲ給セズ	水ヲ給セズ	一割肥ヲ與フ	
全	發根見事ノモノアリ	よしす日中ノミトス給水二回	よしすヲ除ク	全	全	四寸鉢ニ假植ヲナス給水一回	全

一〇	九	八	七	六	五	四	三
土	金	木	水	火	月	日	土
晴	晴	曇	雨	雨	曇	雨	雨
尺鉢ニ本植ス (元肥)	水ヲ給セズ	水ヲ給セズ	一割肥ヲ雨ノ間ニ與フ	水ヲ給セズ	給水一回	朝雨后晴夕ニ給水一回	(半夏) 全
全	全	給水一回	一割肥ヲ與フ摘蕊ヲ終ル	全 水ヲ給セズ	全	全	全 水ヲ給セズ
全	給水一回	一割肥ヲ與フ			一割肥ヲ與フ	長キモノ摘蕊ニカ、ル	水給ヲセズ

一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一
日	土	金	木	水	火	月	日
晴	晴	晴	晴	曇	晴	晴	晴
全	水過キタルヲ以テ給水セズ	給水夕一回	本日ヨリ毎日晴天ノ中午前十時ヨリ午後四時迄日覆ヲナス	給水一回	發芽ノアシキモノハ長キニ失スルモノ第二回摘蕊ヲナス	給水夕一回	鉢ノ土ノ表ニワラスサヲ振ル
鉢ノ土表ニワラスサヲ振ル	四寸鉢ヨリ尺鉢ヘ本植ス(元肥)	全	全	全	全	給水一回	一割肥ヲ與フ
給水一回	一割肥ヲ與フ	全	本日ヨリ晴天ノ時上ノ如ク日覆ヲナス	全	給水一回	一割肥ヲ與フ	全

二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九
月	日	土	金	木	水	火	月
晴	晴	曇	雨	晴	晴	晴	晴
給水一回	給水一回	給水一回 輕ク		全	全	(土用) 全	給水一回
給水一回	一割肥ヲ與フ	給水一回	發芽ノアシキモノ、 キニ失スルモノ第二回 摘蕊ヲナス	全	全	給水一	鉢ノ上ニ日覆ヲナス
全	全	給水一回		一割肥ヲ與フ	全	全	全

二七	二八	二九	三〇	三一	八月	二	三
火	水	木	金	土	日	月	火
晴	晴	雨	晴	曇	曇	晴	晴
全水一回	全	一割肥ヲヤル	給水一回	全	全	全	全
全水一回	全	全	一割肥ヲ與フ	給水一回	全	全	一割肥ヲ與フ
一割肥ヲ與フ	給水一回		摘蕊ヲ終ル	鉢尺ニ本植ヲナス (元肥)	鉢ノ表面ニワラスサ ヲ振ル	給水一回	全

四	水	晴	一割肥ヲヤル	給水一回	全
五	木	晴	給水一回	全	全
六	金	晴夜雨	全	全	一割肥ヲ與フ
七	土	曇	全	一割肥ヲ與フ	給水一回
八	日	晴	全	給水一回	全
九	月	晴	全	全	全
一〇	火	晴	追肥(ほしか)ヲヤル給水一回増土	追肥(ほしか)ヲヤル給水一回増土	全
一一	水	晴	給水一回	給水一回	一割肥ヲ與フ

一二	木	晴	全	給水一回	全
一三	金	晴	全	全	全
一四	土	晴	全	全	全
一五	日	雨	給水一回	追肥(ほしか)増土給水一回	給水一回
一六	月	晴	給水一回	給水一回	給水一回
一七	火	晴	全	全	全
一八	水	晴	本日ヨリ日覆ヲヤメル	本日ヨリ日覆ヲヤメル	本日ヨリ日覆ヲヤメル
一九	木	曇	支柱ヲ背ノ高キモノヨリ斜ニ始ム	支柱ヲ背ノ高キモノヨリ斜ニ始ム	支柱ヲ背ノ高キモノヨリ斜ニ始ム

二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇
金	木	水	火	月	日	土	金
曇	晴	雨	晴	雨	晴	雨	曇
給水一回	一割肥ヲ與フ		給水一回		給水一回		一割肥ヲヤル
給水一回	一割肥ヲ與フ		給水一回		給水一回		一割肥ヲヤル
給水一回	一割肥ヲ與フ		給水一回		給水一回		一割肥ヲヤル

四	三	二	九月	三一	三〇	二九	二八
土	金	木	水	火	月	日	土
曇	曇	晴	晴	晴	晴	晴	晴
給水一回	元氣アシク萎エルモノアリ之ヲ掘リ見レバ入道むし一鉢ニ27疋居レリ捕殺ス其他ノ鉢モ改メ見居レバ皆コロシタリ	止肥ヲヤル	(二百十日) 全	支柱ヲ真直ニ直ス	全	全	全
		止肥ヲヤル	全	支柱ヲ真直ニ直ス	全	全	全
		止肥ヲヤル	全	支柱ヲ真直ニ直ス	全	全	全

五	日	雨	
六	月	雨	
七	火	曇	給水一回
八	水	曇	全
九	木	雨	
一〇	金	晴	給水一回
一一	土	晴	全
一二	日	晴	全

一三	月	晴	全	蕾ガハサイノガ見えダシタ
一四	火	曇		支柱上括ヲナス
一五	水	曇		脇芽段々ト出カケタリ本日ヨリ毎日之ヲ除ク
一六	木	雨		
一七	金	雨		暴風雨ニ付菊鉢ヲ室内ニ運ブ
一八	土	晴		給水一回
一九	日	晴		柳芽モクニト出カケタリ、見付次第之ヲ除ク
二〇	月	晴		給水前日以下全ジ

二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一
火	月	日	土	金	木	水	火
晴	晴	晴	雨	晴	雨	晴	晴
		支柱上括ヲナス	摘蕾ヲカリカケル真中ノ勢ヨキモノヲ殘ス	成蕾調査ヲシタ曠古賀外二十九種ハ蕾ガハツキリ見エタ中ニモ大明錦ハ真經一分ニモナツテクレタ			柳芽ヲ三ツ除イタ

二九	三〇	三十一	二	三	四	五	六
水	木	金	土	日	月	火	水
晴	雨	晴	晴	晴	晴	晴	雨
蕾ハモウ七分以上ノ鉢ニ見エカケタ				支柱上括ヲナス			

一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七
木	水	火	月	日	土	金	木
晴	晴	晴	曇	晴	晴	雨	晴

二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五
金	木	水	火	月	日	土	金
晴	晴	晴	晴	雨	曇	雨	曇
花ニ輪台ヲヤリカケル花ノ形モ箸デ齊ヘルコト本ヨリ始メタ			風止ム鉢ヲ室ヨリ出ス	風強ク鉢ヲ室ニ運ヒ込ム			

三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三
土	金	木	水	火	月	日	土
曇雨	晴	雨	曇	晴	晴	晴	晴
花坦昨日全ジ	花坦ニ作クリカケル本日二十鉢斗リ出来タ、支柱ヤリカヘ		風強ク、鉢々定ニ振ナシ	風強ク、鉢々定ニ振ナシ		大明錦満開、共鳴鳳 <small>鳳</small> 、五大洲、九分咲小倉色紙七分咲	

七	六	五	四	三	二	十一	三十一
日	土	金	木	水	火	月	日
晴	晴	晴	雨	晴	晴	晴	晴
							花坦終ル

一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三
火	水	木	金	土	日	月	火
晴	晴	曇	晴	晴	晴	雨	雨

八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五
月	火	水	木	金	土	日	月
晴	晴	雨	晴	晴	雨	雨	晴
	花垣満開						早咲ト晩咲ト入レ替

二四	水	晴	
二五	木	雨	
二六	金	晴	
二七	土	曇	
二八	日	晴	
二九	月	晴	
三〇	火	晴	花壇ヲ閉ヅ

菊花實生界の權威

槇麓園及精興園訪問記

耕 讀 園 主 人

一、槇麓園

【大阪府泉北郡横山村】

槇麓園……實生界の權威へ一度行きて見たいとしてその業績を極めたいといふのが私の年來の望であつた、大正十五年十一月十九日その望を果すことが出来た。

大阪築港棧橋より電車阿部野橋行に乗りその終点阿部野にて下車、南に約一丁にして大阪鐵道の電車、長野行といふ高い大きい看板の出で居る、阿部野驛より電車に乗りて長野に走る長野は高野行電車の停留所も同一の、處にある、大阪鐵道の方はこゝが終点である、下車して南に約半丁踏切を右に折れて警察前に出ると共和自動車會社といふのがある之が槇麓園と特約の共和自動車である。高野行の電車停留所前には幾つもの自動車

が居るが、共和自動車に乗るのが安心である。一人でも神妙に壹圓貳拾錢で驅り出す、右に曲り左に折れ六尺幅位の狭道、牛が向より來れば負けて畑の中を牛が通りてかはし、稻束を積んだ車力に出逢へば、一丁も後退りしてやつこの事、無事にかはすといふ、運轉手にはほんごに氣の毒な道、之が天下の名園植籠園への道である。人間人格の輝き位難有いものはない、人があり人が訪ねて行く、長野より三十分位で行きますといひしものが四十分でまだ着かない、檀那おかへりには迎に來ませうか「ウンたのむ」「何時間位して参りませうか」……二時間位してたのむ運轉手クス／＼笑ふ、旦那植籠園の辻林さんの菊は八万株おますせそれを二時間やで見る事が出來ますか早くて四時間丁寧に見て三日間位足留する客もおますさかへ……近來澤山觀に参ります乃公すつかり参つてしまつた、ごうだ先方には宿つたり飯を食ふ處があるかい……山の中だ何がおますかいなあ……辻林さん處で宿めてくれませう飯もくれませうあ大きな家だ……なごう話をしつゝ自動車は谷を下り坂を昇り竹林の端にてブツト止り、之から右に折れて二丁斗り竹林に添ふて行けば、辻林さん宅です、運轉手には四時間位後にこゝで又逢ふ約束で別る

竹林の細道に添ひ小坂を昇り行く、大きな門がある家につきあたる「辻林吉雄」の門札こゝだなあ……大門に中が檜皮葺の純日本古代式の大家ハア古は庄屋さんでもして居られた家らしい、こゝの地方には見ぬ舊家、舊家の主人が菊道樂かねー之は眞物だと私は眞にうなづいた。

門に入ると母屋の入口が三つある庭口、中の門玄關と中間、玄關いづれにもビールの空瓶に厚物間管細管の紅白黄の菊花二二三切花として生けられてある、郁々たる香は早くも如實に植籠園を物語る、刺を通すると、令夫人らしい豊艶な婦人が淑やかに謙遜の態度で挨拶をせらる、來意を告げるとごうかあちらへお通り下さいといはるものだから、遠慮なく、玄關へ廻り、座敷に通る、菊の品評會でもあつた跡の様に菊の花が澤山切花とせられて生けられてある、よく見るごいづれも優物である、その花を横目に見つゝ座敷に通れば再び令夫人御出になりコーヒを運ばるやがて主人事只今留守中につき使を以て呼びにやりたれば、程なくかへる御待ちあれど、私は自動車と約束した四時間とれに八萬株、心は焦燥して仕方がない、奥様それでは恐れ入りますが、菊花の方を御主

人御歸までに少しでも拜見して置きたし、それでは園丁に案内させませうと、極熟練の園丁を一人附せられた、園丁に尾して行く、之より五六分の間に入万株の菊花が見ゆると思ふと胸は格別おどる……竹藪に添ひ細道を下り民家を通りぬけ行く事三四丁山と山との谷間に來る、開墾せられたる地は、谷川の兩脇に柵をなし並ふ、その柵なす耕地こそ、八万株の實生菊花を植わたる花畑で、この田を見ても菊花……何故こんな谷間を選んだのが、第一排水がよい水は雨が降つても直に耕地を透して谷川に流れ落つ、第二地味も粘土に砂礫の少し混じた様の適土、第三に日光の透射も理想的だ第四花粉交媒の昆虫もこれならよく集り來るであらうと思つた、私は生れて始めてこんな菊花の群り咲きを見たのである、櫻の花ならば雲か霞か將た雪か滿谷皆花とてもいふべきだが菊花は總合觀としては、さては見ぬ、時に風吹けば菊の浪あしこゝに跳り、香氣鄭郁として人の衣袂を襲ふ、今日はそんな遊山の花見でない、天下の菊花實生の本山の見届けた一瓢を携へて吞むよりは一花を研究して我物とする、始めて案内せられたのは約五畝位の第一號園こゝには四方に柵を巡らし鐵索線を引き、入口は錠をおろし人の出入を禁じ

てゐる錠をあけ中に入ると約、一万二千株もあらうと思ふ菊花は赤白黄樺薄紅、等あらゆる色の隈を盡くした厚物あり厚走りあり大管さては細管針管の中には一文字さへぼつ／＼混入しそれが二尺五寸幅の畦に中心に一間に杉丸を立て之に十六番の亞鉛線を二條引き支柱代とし地より株立の菊花をラファイヤにて結びつけ菊をして添木をしたると同じ結果に直立せしむのである一株の花少きは三輪多きは五輪、皆かはいの大輪に咲き揃ふ、實に立派なるものである之は全家秘藏の親木軒の玉水といふ極めて子の變化に富む白の管咲の親木の實生とき、之が軒の玉水といふ一種の菊の種を取りて蒔いた菊……さては五色、七色、十色と色は變り厚物厚走管物と花容を異にした大變化!!覺わすア、と菊の變化性に富むに今更の様に驚く、こんなに變つて行く面白さ……よし／＼我輩も之からうんと實生をやつて見せることは恐くこゝを一目見せる人の思はぬものはないだらう。側に亞鉛板の屋根で奥行一間長十間位の小屋がある、こゝの中には六寸鉢に植わた菊が百四五十鉢もある、之は本年の此實生中より選抜せし一部で、良種を畑よりぬきて鉢に取り花名をつけ明年再び改作し之にて花色定まれば明後年新種として世に出すものを貯

へあるごきく、かくして新種は實生より三年振に社會に出るのである。

園主が選定して良種を取りし跡はたふしといつて參觀人の自由選擇に任かし、一株五拾錢つゝにて分讓してくれる、今私が見て驚嘆して居る菊の花は素人の下手な實生家の優等菊よりよいものがまだ澤山残つてある、それがより取りである、菊が故に天下の菊の同好者菊商人は茲に集りそのたふしの中より自己の氣に入りしものを選択して持ちかへり培養して之に自己が勝手の美名を附し己が實生としてカタログにし親戚朋友さては客人に誇るのである。かくすればこゝは天下實生の本山ともいへるいでや私も今日の記念に五種位選擇してこの園視察の記念に培養せんと、白、黄、権、赤、柿茶の五つを選び出し槇の玉水、槇の網代木、槇の火の花槇の尾の金槇の土か香と名づく園丁は記念に進呈せんといふ。之はよい記念と喜ぶ間に早や時は四時間の一時問半を過ぐ成程三日かゝるなあ……と約束ある時間躊躇も出来ない進行と第一號園を割愛し二號園に移る、こゝも同じく柵をつくり錠ををろし人の出入を禁じてある後の園皆同じ、こゝは富士大鼓、山科の譽を親木とした實生園、咲いて居るはくゞ澤山の花又花……それから三號園四號園

五號園流石の私も飽き氣になつた、花に酔ふたとはこの事かも知れない、すべての花の形が似たものゝ様に見えたり、すべての花の色が同じ様のものに見えたり、こんなに花に負けてたまるものかと勇を鼓して谷に下る美しき女中來りて主人只今歸りたまふ、あちらに御眼にかゝらんとしらす……園丁いふ序にあちらの橋を渡りてあそこの園を御覽になりては……それよと進み内く、橋を渡り北の一號二號三號園 今度は少し走り氣味に見る今夕はいつそ宿りて丁寧に見るとせんかと胸はまた湧く、エト明年といふ月日が無ければこそ、「又明く年も來り訪はなむ」よと口誦みつゝまだある五ツの園を見残して、家にかへる主人己に座敷にあり、客いそきて座につき、菊の話に花は益々咲きかける、主人辻林氏がかく菊に力瘤を入れらるゝに至りしは中學の二年頃より菊花に興味を持たれあらゆる天下の名品を集め、手植にして樂まんとした、然るにその事を行詰まりしは元來菊花の賣買は根引又根だやしといつて、實生者より株を買取ることにして一旦如何なる新種も全賣渡さは實生者の宅にはその種は絶品となり、新種は買入者の専有に歸すものである、某といへる菊好者あり、毎年實生家をあさり一株何百圓でも氣に入り

し種類は根引してかへりその菊を秘藏して他へは一種も出さぬといふ恐ろしい人に出逢ひその爲め名菊の思ふままに自分の庭に集らぬより奮發し「オノレ見よ我自ら新種を作り汝の菊より以上の優秀品を作り出さん」とこの一念氏が日本の菊界のバーバンクとなりし所以である、この八萬株の菊を作るに手入の盛りには人を毎日四十八人位使用するが平素は六人語切なりと氏は一ケ年中毎日殆んど菊と相對してくらし居れり始めてより今年にいたる十三ケ年間品種を作り出せしもの千を以て數ふ菊の花の終りしよりは採種畑より實生の種子の採種にかゝり之を蔭干となし雪の中より春の彼岸までは毎日取りし種子を盆に並へて一粒よりに鑑定して良種を選び取ると氏の産する種子毎年十八萬粒にして自己園庭に播種して残りしものは天下の同好者に頒つこの種子一万粒につき下等品百五拾圓優秀品は貳千圓なりとそれが賣れて足らぬとのこと、いやなか／＼菊の種子も輕蔑は出來ぬ英國サットンの上等選の蘭の種子や、ブルムラ、カーネーションの優秀品に匹敵して、負を取らぬことである。

大臣一ケ年の年俸も優良菊種十萬粒には足らぬ。なか／＼菊もわらいと思つた毎年土地

をかへて作らるゝかとの間に、いや尻を嫌などいへごもわら灰をやれば決してこの憂なし、本園は毎年同じ處に栽培して何も不都合なきは、稻や麥を毎年同じ處に栽培して不都合なきが如しと氏は種子の選擇終れば四月となり之を播種しそれより段々菊繁時期となり、遂に秋の花期に至ると。一ケ年中殆んど寧日なし、かゝる菊界に犠牲の人ありてこそ、天下の菊花愛好者は秋の楽しみあるといふものである。

「敬意を表せよ辻林君に」それより全氏の秘密の畑……寶庫……山の採種田に導かれ田は平地にあらす二十三度位したる峻はしい山、處々にみかんなご作つてある山の頂上は約二十疊敷もあらんか、茶碗を伏せた様の丸い形、山の麓は主として竹藪、丁度竹藪の中よりぬけ出た禿げの坊主の如き山だ。東北面は高サ四間位二十間位の簣にて垣を一面にしてある之は風避けと見る又日光熱を籠らす爲めとも思へる頂上より斜に畦を切り之に採取の親菊を千鳥に植わてある、親菊の菊の辨は露心の周圍より約六七分を置き皆切り除けてある、有名なる擔の玉水もそこでは腹ふごゝつき出したる露心姿の大わらばである、來て居るわ／＼菊の蜂一花に三つ四つと簇つて居る、その西方の凹地には昨

年の實生や全家の門外不出の名菊は藏して植わてある時に早や時間は五時間も過ぎて居るに約束の自動車はまだ來ぬかと探種田より下ると運轉手はニコ／＼しつゝ一時間前より參つて居ましたあなたがあまり熱心ですからつい御邪魔してはと隠れて居ましたと氣のきいた運轉手である。園主とここで別を告ぐ園主はいふ明年は十万株に擴張しませうと益壯なりといふべしだ。

參觀した時期が晩かりし爲め全氏秘藏の名花を見るを得ざりしを憾む。

實生園にある親木の株數とその選抜種を調査せしに

親木名	植込株數	選抜新種
軒の玉水	一一、七五〇	二七〇
初秋の夢	一〇、八〇〇	二三〇
落葉籠	七、六〇〇	一三〇
八重霞	三、一〇〇	一〇五
白 妙	一、六五〇	六五

弓弦の光	二、九五〇	一六〇
望 月	二、五〇〇	三五
新龍冠	二、一五〇	二五
槇麓の露	一、八〇〇	八〇
落し文	五、三〇〇	六五
湖畔の曉	三、八〇〇	一七〇
田村丸	六、五〇〇	九〇
富士太鼓	約二〇、〇〇〇(一種一五〇〇株以下のもの)	
外數十種		

一、精興園

【廣島縣蘆品郡金丸】

廣島縣蘆品郡金丸精興園主山手義則君は園藝上十六七年來手紙の上の友達である氏は始め小學校教育に従事せられ副業として菊苗を廉價に販賣して居つたその節菊苗を三百餘種分けて貰つたのが私の交際の始めそれから毎年カタログを送つてくれる少しばかりでも注文する、氏はいつの程らに小學校をやめて菊の本手の商人と變つて居つた、氏はその後菊苗のみならず朝顔、ダリア、睡蓮と手を次から次へと擴げ行く、氏が實生の優秀菊花を出したのを私が知つたのは一昨々年の寶塚の菊花獎勵會に入選した時である、當時一寸祝詞を呈して置いた、近來メートルをうんとあげて、なか／＼優良の實生新花を造くる様になつた、十四年度の重陽會新花成績にも、氏は優等花を六つも出品して居る氏の實生は三万株と稱せらる「十一月廿四日にはあこがれし君をその園に訪はなむ」といふ端書を差上げて置き、丁度約束日に私は福山市の旅館を朝七時に出て、兩備鐵道に乗り、新市驛に下車しこゝより自動車を驅り三十分ばかりにして山手君の門につく、時

に十時半廣き屋前の廣庭には一輪咲菊花坦十二三間のもが家に沿ひ南より北向に作くられその又西に東向に五間位の花壇がある少し觀る時期後れて花の盛時越せしといへ晩咲のものは慥に盛と稱すべき頃である。

苗を集める觀客七八名、その花壇の前にあり、私は家に入り一揖して刺を通じると、山手君和服に羽織の着流でいや待て居ました……早くこちらへと座敷に請しられた庭の南の間に商業所の應接間がある、丸テーブルに椅子簿記台簿記帳洋服を着いた農學校を卒業した程の若い技手が四人働いて居る、菊苗送る荷箱、數十個山と積み水苔ラファイヤ箱に釘を打つもの荷札をかくもの、なか／＼多忙に見受けた、その側に實生新種の菊が數十鉢陳列されてある、中には山菊の北斗座型の濃紅、白色も作られて居る、早いな……やつてるな……と私は直覺した……座敷には山手君鷹揚として五球式ラヂヲのセットの側に座して骨董屋さんと對坐して掛軸や輪島の吸物椀の目きゝをして御座る……久瀧の挨拶終ると骨董屋さんそち除けにして段々得意の菊談となる、培養法より實生新種作製に至るまで十數年の苦心、今日成功の得意談と、時は移る令夫人令嬢をはじめ家を舉

げての待遇振り私はほんごに恐縮した山手君曰く近來の快事、私はいふ近來の快事、それより氏の案内で栽培地採種畑へ足を運ぶ先づ第一に花壇の説明、新花として枕慈童をはしめ寶船等數百種之は槇麓園の選定名花の己に花を切り芽だけにしたもの多きに比しこゝには花が殆んどつけてあつたのは、觀る私としては仕合であつた。

この地勢も山中で栽培地採種畑は皆山地の坂なす耕地である。菊と山地……何となく宿縁のありさうの感に打たれた、第一號園は採種畑である、五畝ばかりもあらう、各種混植である槇麓園とは餘程この点趣を異にして居る、槇麓園は坊主山の斜の處を系統正しく人爲的に駢植し花辨は殆んど切り落されたるにこゝはそのまゝで見本園否品種保存園を早速採種畑に利用したかの觀がある槇麓園の方に條理正しい理屈のあるの今時に精樂園に昆蟲雜媒の便ある主張もあらう、恰も園丁が霜覆の最中であつた、霜覆は屋根を斜にして東南を高くあげ北を低くして居るこゝより山手君は人か呼に來たるあり私と別れ、洋服を着た若い技手君に連れられて行く、山麓に散在せる民家を二軒三軒ぬけて芋豆を作る畑を通り山菊の實生地を見る一號、二號、三號園とあり槇麓園の山菊は一つ

も見ぬさうしがこゝには山菊に殆んど四割の力を注いで居る様に思ふなかゝ珍種がある、千五六種を選様で買取つた、それから大菊の實生園に趣く、この間三町以上あり大菊の實生園は一文字厚物、管物、細管と別けてある様の感じがした、花の混合して居る点は槇麓園によく似て居るが槇麓園の花型の畧ある統一を(京都趣味の)見せて居るに比しこの園はそれと趣を異にして千態万状さである十年前私が山手君に贈呈した數十種の菊の中で私の方に種切がしてこゝ五六年その回收につとめカタログにより一手の色を山手君より送つて貰つてもごうしても行き當らぬ今度こそ實地に見付けて呉れんとその一文字の中をあさる同じものにあらぬ殆んど同一といふものを見付けて悦び我物にした槇麓園のたふしは五拾錢均一だがこゝのたふしは品によりて價を異にす大菊の一號園二號園と六號園までで見次に又山菊の實生を見るこの間時間は三時間も過ぎたであらう道も直線にして十四五丁は歩みたであらうその間芍薬、牡丹、ダリヤの苗圃點綴して居る成程これば三万株たしかにある槇麓園につぐ實生界關西の雄である私は後で山手君に手を他方面に擴げず専ら菊にと願つて置いた、家にかへると福岡の老人、神戸の菊商、京

都の好事家と八九人集つて居る、皆その新種を競買して中には百圓札を投げて買つて行く、世は不景氣といへどもこゝにはよい風が吹いて居る私のものも三十幾種買取りそれより全氏の實生珍種日本一といへる鶯茶色間管大走玉巻段咲万重大々輪といふ大正十三年の實生種他へ出して居らぬ大天狗のしろものを私にあづけられた氏のこの厚意に私は感謝する時に午後四時自動車はブツト止りて私を招く私は山手君に送られて歸路につく尙全君が親木として採種して居るものは五十餘種あるがその主たるものは寶船、大金龍平和、曠古の賀、發心の志、波千鳥、梓弓、神聖、遠山の雲、紅葉山、落文、瀧の玉水月宮殿姫百合等である。左にその調査せし處を記せば

親木名	植込株數	撰抜新種
富士太鼓	三、〇〇〇	、五五
大金龍	一、五〇〇	三〇
寶船	九〇〇	二五

發心志	三、〇〇〇	四〇
梓弓	二、〇〇〇	四〇
月宮殿	二、一〇〇	三八
落文	五、〇〇〇	七〇
瀧の玉水	八〇〇	二五
波千鳥	一、二〇〇	三二
平和	一、五〇〇	三〇
紅葉山	七〇〇	二四
遠山の雪	八〇〇	三〇
其他卅種	一〇、〇〇〇	一五〇
計	三二、五〇〇	二八九

左の内 根絶販賣 約二百種

相持品

拾種

菊花實生界の權威精興園訪問記